貝塚市埋蔵文化財調査報告　第56集

貝塚市内遺跡発掘調査概要

2001. 1. 31

貝塚市教育委員会

はじめに

わが貝塚市は、北に波静かな大阪湾、南に緑豊かな和泉山脈とに接し、恵まれた自然環境を有する地域であります。そのため、古くから多くの人々が営みを繰り返し、市内各所には様々な遺跡が存在します。

しかし、近年の都市化の波は、生活の利便性の代償として遺跡を減少させています。これらは貴重な歴史的・文化的遺産であり、今に生きる私たちが後世に伝えるために努力をしなければなりません。

今回報告いたします調査もこうした開発行為に伴う緊急調査ではありますが、幾多の成果を得ることができましたので、それら成果の一部をここに報告いたします。

本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めて頂くとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご理解、ご協力を頂き、ここに深く感謝申し上げますとともに、今後とも本市文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いする次第であります。

平成13年1月31日

貝塚市教育委員会
教育長　山　本　太　三　郎

例　言

1、本書は大阪府貝塚市において実施した、民間宅地開発事業及び共同住宅建設事業に伴う事前発掘調査の概要報告である。なお各調査期間は以下のとおりである。

地蔵堂遺跡　平成５年６月16日～10月５日

土生遺跡　　平成８年７月２日～８月12日

加治・神前・畠中遺跡　平成５年８月17日～11月１日

窪田ハマデ遺跡　平成８年８月19日～11月18日

2、調査にあったては、関係各位より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

3、発掘調査は貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係、学芸員前川浩一、三浦　基、上野裕子が担当した。

現地・内業調査及び本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施した。

稲田宏美　石野貴史　尾越功一　大西隆子　川畑乃文　幸崎美江　清水久子
中辻澄子　松本武志　溝端美也子　山本寿子　山本　睦　米子千智

4、本書の執筆は目次に示したとおりⅠ、Ⅱは三浦、Ⅲ、Ⅳは上野が担当し、編集は前川が行った。

5、出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

目　次

はじめに
例　言
目　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

Ⅰ　地蔵堂遺跡の調査（三浦）
1、位置と環境……1
2、調査結果……1
3、まとめ……12
Ⅱ　土生遺跡の調査（三浦）
1、位置と環境……13
2、調査結果……13
3、まとめ……26
Ⅲ　加治・神前・畠中遺跡の調査（上野）
1、位置と環境……27
2、調査結果……27
3、まとめ……37
Ⅳ　窪田ハマデ遺跡の調査（上野）
1、位置と環境……38
2、調査結果……38
3、まとめ……47

図版目次

図版１　地蔵堂遺跡
　１、ＳＸ－３０２
　２、同　　上
図版２　地蔵堂遺跡
　１、ＳＤ－２１２
　２、ＳＤ－２１２遺物出土状況
図版３　地蔵堂遺跡
　１、第３遺構面東部
　２、同　　上
図版４　地蔵堂遺跡
　１、ＳＫ－３０１
　２、ＳＫ－３０１遺物出土状況
図版５　地蔵堂遺跡
　１、ＳＥ－３０１
　２、同　　上
図版６　地蔵堂遺跡
　SX-302（156）、SD-212（93、94、99、100、116）、
　SD-221（147）、Pit-204（157）出土遺物
図版７　地蔵堂遺跡
　SX-308（158）、SX-306（160）、SX-203（139）、
　SD-212（159）出土瓦
図版８　土生遺跡
　１、第１区　ＳＤ－２０４
　２、同　　上
図版９　土生遺跡
　１、ＳＤ－２０７
　２、ＳＤ－２０７土器集積部
図版10　土生遺跡
　１、第２区全景
　２、同　　上
図版11　土生遺跡
　１、ＳＫ－２０１
　２、ＳＫ－２０１土器出土状況
図版12　土生遺跡
　SD-204（67、100、101）、SD-207（79）、
　SK-201（85～88、90、102）出土遺物
図版13　加治・神前・畠中遺跡
　１、ＳＤ－３
　２、同　　上
図版14　加治・神前・畠中遺跡
　１、ＳＤ－４、５
　２、同　　上
図版15　加治・神前・畠中遺跡
　１、軒丸瓦検出状況
　２、軒平瓦検出状況
図版16　窪田ハマデ遺跡
　１、第１区　ＳＤ－３０９
　２、第２区　ＳＤ－３１０
図版17　窪田ハマデ遺跡
　１、第１区　ＳＤ－３１２
　２、第３区　ＳＤ－３０１、３０６
図版18　窪田ハマデ遺跡
　１、第３区　鋤溝群
　２、ＳＫ－１０１～１０３

挿図目次

図１　貝塚市遺跡分布図（部分）Ｓ＝1／25,000
図２　地蔵堂遺跡調査地位置図
図３　調査区地区割図
図４　土層模式図
図５　遺構配置図
図６　SD-212遺物出土状況図
図７　SE-301（1～16）、SK-302（17、20、23、26）、SX-302（18、19、21、22、24、25、27～42）出土土器
図８　SX-303（43～58）、SX-306（59～68）、SX-308（77、78）、SX-309（69）、SD-301（71）、SD-306（73）、SD-308（74）、SD-309（70）、SD-315（75）、Pit-320（76）出土土器
図９　SD-212出土土器
図10　SD-212出土遺物
図11　SX-201（145、149）、SX-203（122～143）、SD-221（147）、Pit-203（144）、第３層（146、148、150、154）、第４層（151～153、155）出土遺物
図12　土生遺跡調査地位置図
図13　調査区地区割図
図14　柱状土層図
図15　調査地遺構配置図
図16　SD-204土層断面図

図17　SD-207土器出土状況図
図18　SK-201平面図、土層図
図19　SD-204（砂層）出土遺物
図20　SD-204（下層、底部分）出土遺物
図21　SD-204（底部分）出土土器
図22　SD-204（上層）出土遺物
図23　SD-207出土遺物
図24　SK-201出土土器
図25　SX-202（94）、SX-204（92、95、96）、SX-210（93）、遺物包含層（91、97～99）出土遺物
図26　加治・神前・畠中遺跡調査地位置図
図27　調査区地区割図
図28　調査区土層柱状図
図29　地山上面遺構配置図
図30　軒丸瓦（2・11・12：SD-3、1・3・7・8・13：SD-4、6・9・14：SD-5、4・5：側溝、10：包含層第3層）
図31　軒平瓦（17：SD-3、15・16・18・19・20：SD-4、21：SD-5）
図32　軒平瓦（22・27：SD-3、23・25・26・28：SD-4、24：側溝）
図33　SD-3（31～40）、SD-4（42～47）、SD-5（29）、SK-3（30）出土遺物
図34　窪田ハマデ遺跡調査地位置図
図35　調査区地区割図
図36　調査区土層柱状図
図37　地山上面遺構配置図
図38　第3層（1～4）、第4層（5～9）、第5層（10～26）出土遺物
図39　第4層上面鋤溝群（27～29）、SK-101～103（30～34）、SE-101（35～40）、地山上面鋤溝群（41、42）

5．長楽寺跡　7．地蔵堂丸山古墳　8．地蔵堂廃寺　9．下新出遺跡　10．秦廃寺　15．麻生中新池遺跡　16．河池遺跡　19．泉州麻生塩壺出土地　20．堀遺跡　21．橋本遺跡　22．貝塚寺内町遺跡　23．加治・神前・畠中遺跡　28．沢城跡　29．新井・鳥羽遺跡　30．新井ノ池遺跡　31．半田遺跡　32．麻生中遺跡　34．澱池遺跡　35．積善寺城跡　36．清児遺跡　38．高井天神廃寺・高井城跡　43．二ツ池遺跡　51．窪田遺跡・窪田廃寺　55．槍ケ谷城跡　56．半田遺跡(清児地区)　57．堤遺跡　58．小瀬五所山遺跡　59．石才遺跡　60．王子遺跡　61．土生遺跡　64．海岸寺山遺跡　66．脇浜遺跡　67．今池遺跡　70．石才南遺跡　71．名越遺跡　72．地蔵堂遺跡　73．名越西遺跡　75．新井・鳥羽北遺跡　79．王子西遺跡　80．津田遺跡　82．福田遺跡　86．麻生中出口遺跡　87．小瀬遺跡　88．堤三宅遺跡　91．堀新遺跡　92．橋池遺跡　93．麻生中下代遺跡　94．堀秋毛遺跡　95．半田北遺跡　97．東遺跡　102．津田北遺跡　103．久保遺跡　109．窪田ハマデ遺跡　110．海塚遺跡　111．脇浜川端遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図(部分) S＝1／25,000

Ⅰ　地蔵堂遺跡の調査

１、位置と環境（図２）

今回の調査は地蔵堂遺跡で共同住宅建設工事の計画が起こり、事前に発掘調査を実施した。

地蔵堂遺跡は市内北西部に位置する集落跡で、南北 400 m、東西 580 mの範囲をもつ古墳時代から室町時代にかけての複合遺跡である。遺跡マーク内には市内唯一の前方後円墳丸山古墳、平安時代の寺院跡である地蔵堂廃寺が存在する。

調査地は地蔵堂廃寺に近接する地蔵堂遺跡の西部、ＪＲ和泉橋本駅西方約 500 m、府道大阪和泉泉南線から約 100 mに位置する地蔵堂 147-1 である。調査地周辺部での調査例としては、隣接する地蔵堂廃寺に含まれる正福寺がある。昭和 56 年度、昭和 57 年度の調査では平安時代まで溯るものと思われる一辺約９mの地山削り出しの建物基壇跡、本堂東側では現本堂の基壇の一部および雨落ち溝と現本堂以前の雨落ち溝を検出している。また、正応三年（1290）、永享十年（1438）銘の瓦も出土しており建物の実年代を知るうえで重要な資料となっている。本調査地も距離的に近接しており、少なからず関係が深いと考えられる地点である。

２、調査結果

調査は開発によって破壊を受ける部分、約 800 ㎡について実施した。また、調査区に５×５mの区画を設定し東西にＡ～Ｋ、南北に１～６までの記号を与えた。（図３）

調査区における基本層序は、20 ㎝前後の耕作土、約５㎝の床土の下に遺物を含む層（包含

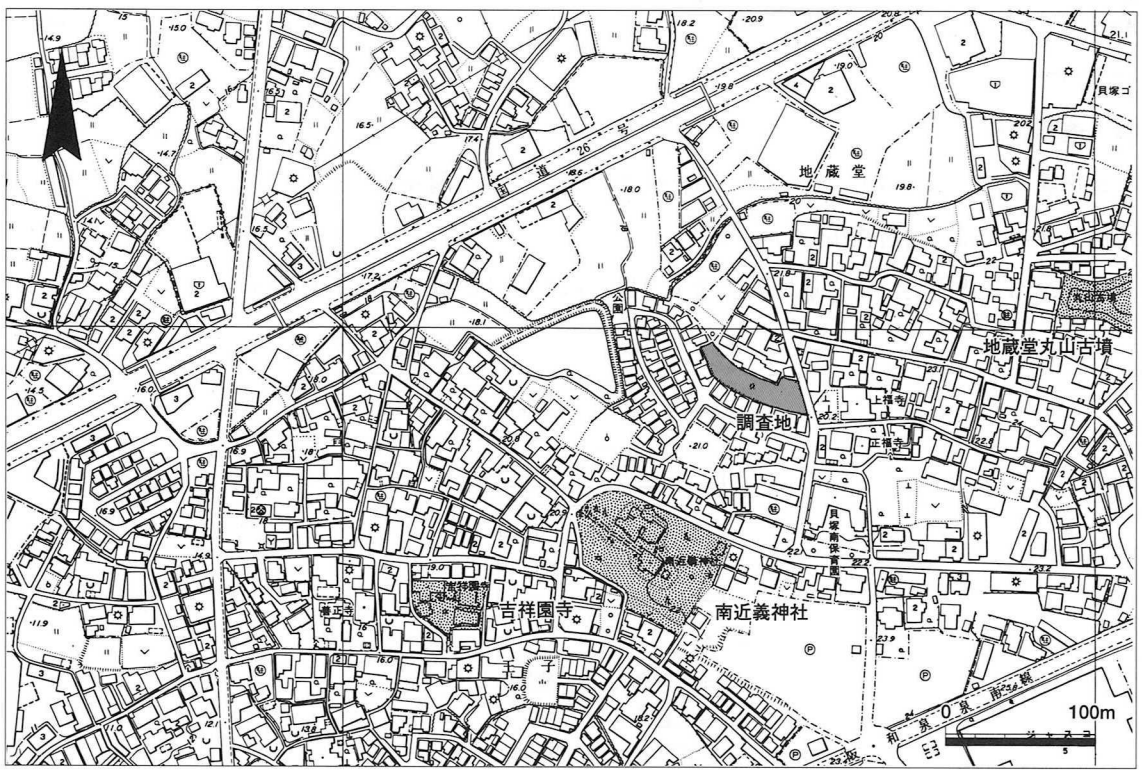


図２　地蔵堂遺跡調査地位置図

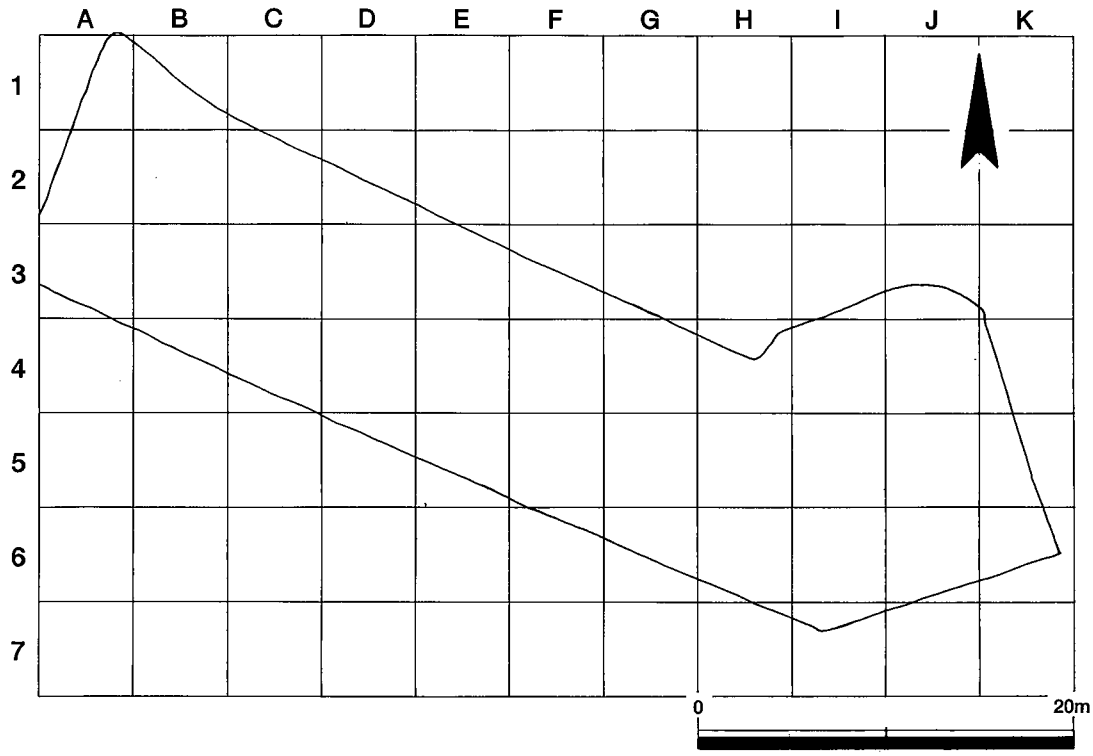


図３　調査区地区割図

層）３層が堆積している。包含層は上から淡黄灰色土（第３層）約 10 ㎝、暗灰色土（第４層）５～ 10 ㎝、暗灰褐色土（第５層）約 10 ㎝の厚さで堆積している。地山は淡黄色土および黄灰色土で粘土質の部分と礫を含む層が分布している。また、第４層と第５層の間に整地を行ったと思われる層が部分的に存在し５～ 50 ㎝の厚さで整地を行っており地山部分を削り取って低い部分を埋めたと考えられる。（図４）

検出遺構（図５、図版１～５）

発掘調査では各地層の上面で遺構の検出を行うが今回の調査では、第４層上面、第５層上面と地山上面の３面の遺構検出を行った。

以下、第３遺構面、第２遺構面、第１遺構面の順でその概要について示す。

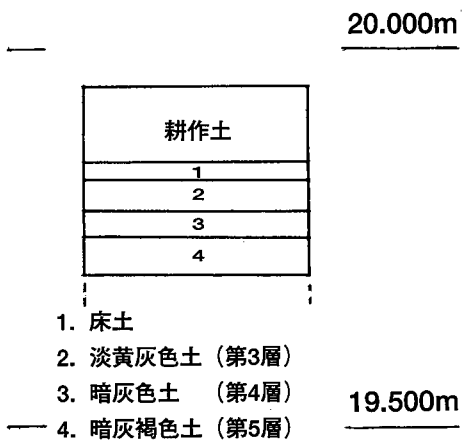


図４　土層模式図

第３遺構面

整地土除去後、検出した包含層第５層を掘削し、地山面上にて遺構検出を行った。本遺構面においては、第２遺構面で検出した区画溝であるＳＤ－２１２に対応する区画溝を検出した。以下、代表的な区画溝、遺構について概要を示す。

ＳＤ－３１３

検出長、幅ともに小規模のもので、東西方向の検出長約 3.5 m、幅約 0.3 mを測る溝で、やや丸みをもちつつ、緩やかに南側に向かって方向を変える。

ＳＤ－３０４

最大検出長９m、幅 0.6 mを測る溝である。東西方向に走り東端部分で北側に方向をかえ、西端部分で南側に方向をかえている。溝の幅、規模から考えればＳＤ－２２１に近い規模である。また、溝の流れの方向であるが西端部分から南側と東側に向かって２方向に流れをもっていると考えられる。出土遺物は、瓦器椀、瓦片が出土している。

ＳＫ－３０１

調査区中央部にて検出した長さ 0.9 m、幅 0.5 m、深さ約 0.05 mを測る土坑である。瓦器小皿１点、瓦片１点が出土している。また、炭、灰を含んでおり、何らかの祭祀が行われていたと考えられる。

ＳＫ－３０２

調査区西部に位置し、ＳＸ－２０１の下から検出した遺構で長さ約１m、幅約 0.7 m、深さ約 0.4 mを測る土坑である。羽釜、甕等を多量に出土している。

ＳＥ－３０１

調査区中央部にて検出した井戸である。直径 1.3 m、深さ約４mを測る。井戸は素掘りのもので自然堆積による埋土と窪みを埋めるために埋め戻した土に分けることができる。井戸埋土内からは瓦器椀、土師器小皿、白土器小皿、羽釜、瓦等が出土のほか桃の種なども出土している。

ＳＸ－３０２

調査区中央部に位置し検出長７m、幅７mを測る土坑である。埋土は焼土を含んでおり北側に瓦、土器が集積した状態で出土している所が２カ所あり、瓦を中心として多数の遺物を出土している。

ＳＸ－３０３・ＳＸ－３０６

調査区中央部南側に位置する土坑である。同一の遺構と考えられるがＳＸ－３０６側では瓦を中心とした遺物の集積部分が存在している。また、ＳＸ－３０３側では最大約 20 ㎝ある河原石が部分的に並び青磁碗底部片が出土している。

第２遺構面

第２遺構面では調査区北側半分、東側北部において地山を検出した。また、第１遺構面において地山を検出していた西北部も地山部分が広がり、南側に向かって傾斜する地形変化が確認される結果となった

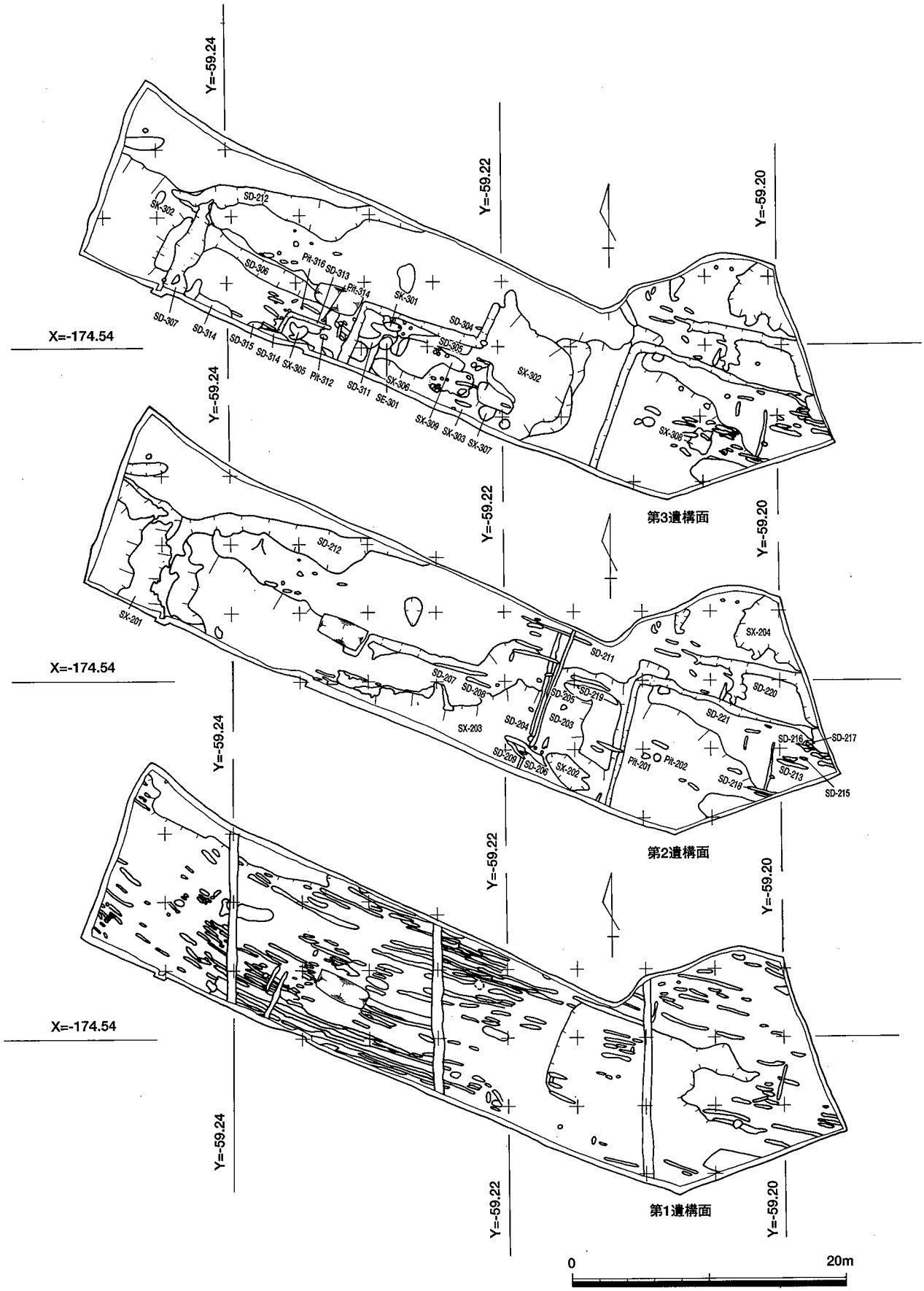

Y=-59.24
Y=-59.22
Y=-59.20
X=-174.54
SK-302
SD-212
SD-306
Pit-316
SD-313
Pit-314
SK-301
SD-304
SD-305
SD-307
SD-314
SD-315
SD-314
SX-305
Pit-312
SD-311
SE-301
SX-306
SX-309
SX-303
SX-307
SX-302
SX-308
第3遺構面
SD-212
SX-201
SD-211
SX-204
SD-207
SD-209
SD-205
SD-219
SD-220
SD-203
SD-221
SX-203
SD-204
SD-216
SD-217
SD-208
SD-206
SX-202
Pit-201
Pit-202
SD-213
SD-218
SD-215
第2遺構面
第1遺構面
0
20m

図５　遺構配置図

図６　SD-212遺物出土状況図

検出遺構は、東側を中心に鋤溝を検出しているほか中央部北側から西側にかけて流れをみせるＳＤ－２１２、東側に東西方向に走るＳＤ－２２１、ＳＤ－２２０に代表される溝と西側、中央部にかけて黄色土の部分を広範囲で検出した。埋土は地山土（黄色土）を中心として灰色の土が混じりあう状況であった。確認の結果、南側に向かって傾斜する部分の窪みを埋める形で堆積しており、整地を行っていることが明らかとなった。この整地の層は浅い部分で 0.05 m程度であるが第１遺構面で検出した段差部分周辺については特に深く 0.5 mを測る部分も存在している。

整地は、調査区北側の地山面を削りその土で行ったことが考えられる。

出土遺物は、瓦器、土師器、瓦が中心であるが青磁、白磁も出土している。器種は椀、小皿、羽釜、すり鉢等の日用品が中心である。遺物の時期は中世で 14 世紀後半ごろのものである。

以下、代表的な遺構についてその概要を示す。

ＳＤ－２１２（図６）

調査区中央部北側から西に向かって流れる溝である。検出長 19 m、最大幅 2.7 m、深さ約 0.3 mを測る。埋土は暗灰褐色土で、緩やかに蛇行し一部深い部分があり、その部分に瓦、瓦器、土師器が廃棄され集積した状態で大量に出土している。器種も椀、小皿、羽釜、甕等と幅広い。

ＳＤ－２２０

調査区東側から西方向に流れる溝である。検出長約 10 m、幅約 0.6 m、深さ約 0.05 mを測る。ＳＤ－２２１とほぼ平行しているが浅く、遺物は瓦器の小片を中心として少量の出土である。

ＳＤ－２２１

調査区東側から西方向に流れ、南方向にほぼ直角に曲がる溝である。検出長約 14.5 m、幅約

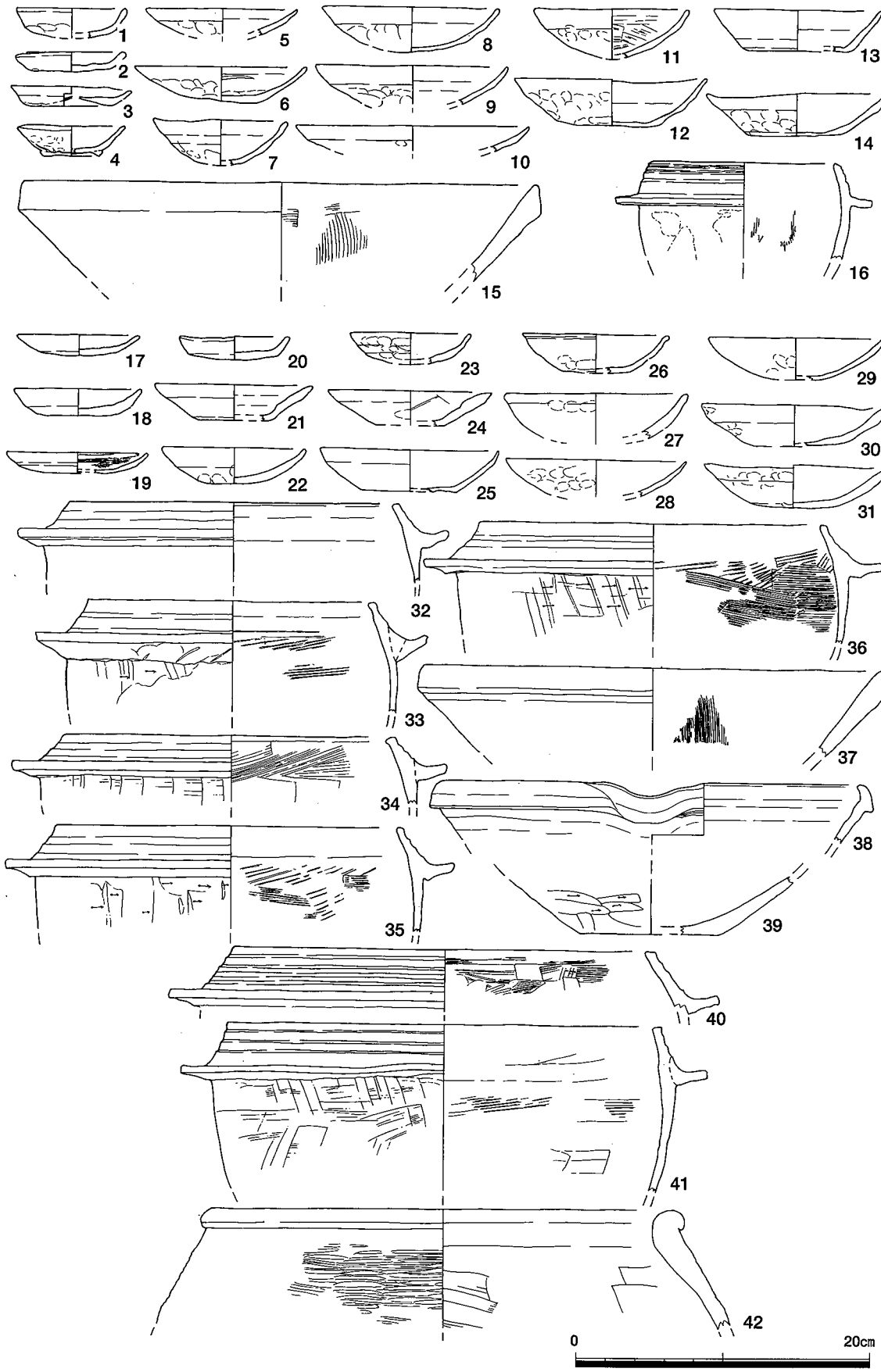


図７　SE-301（1～16）、SK-302（17、20、23、26）、
SX-302（18、19、21、22、24、25、27～42）出土土器

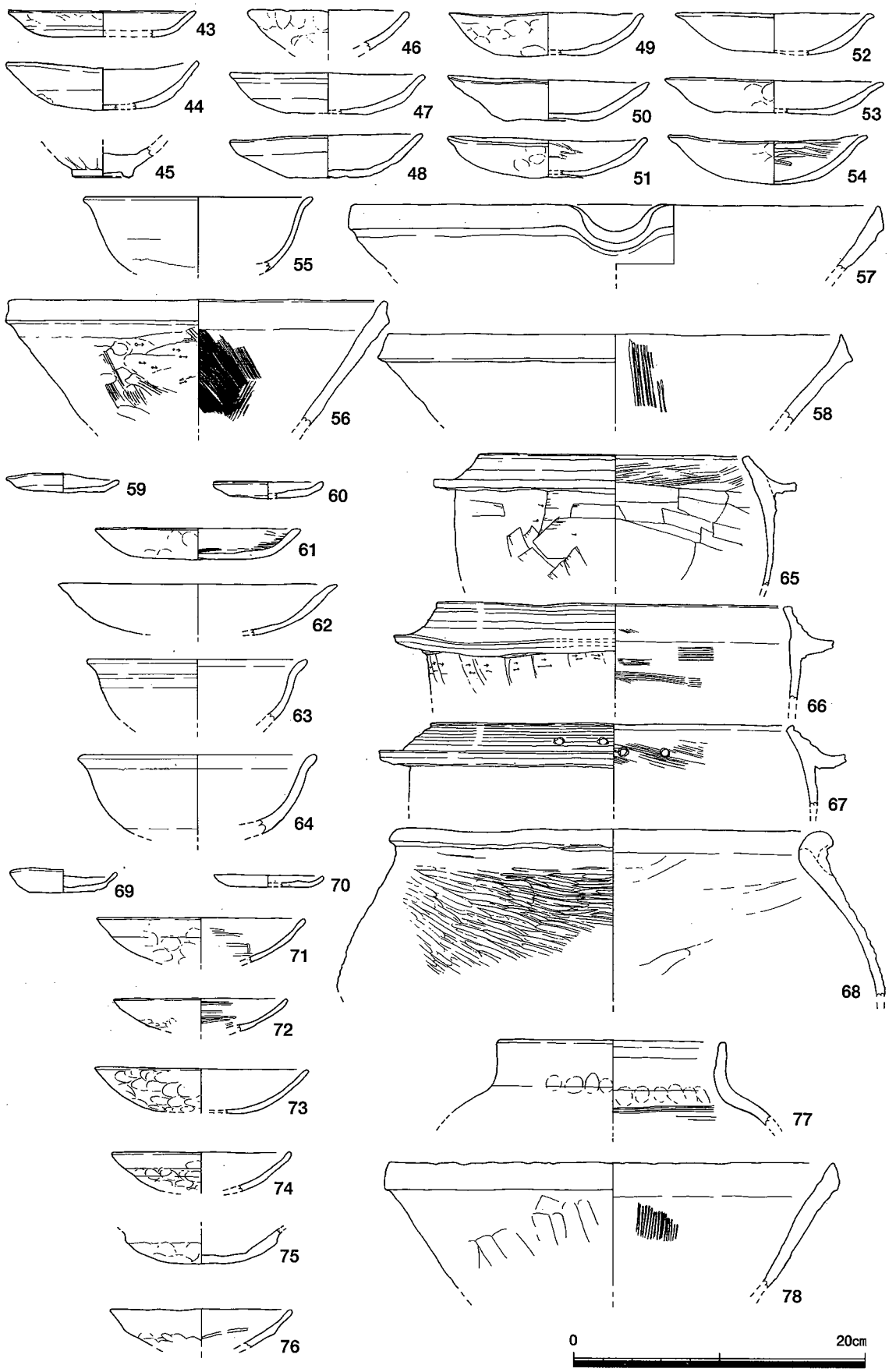


図8　SX-303（43～58）、SX-306（59～68）、SX-308（77、78）、SX-309（69）、SD-301（71）、SD-306（73）、SD-308（74）、SD-309（70）、SD-315（75）、Pit-320（76）出土土器

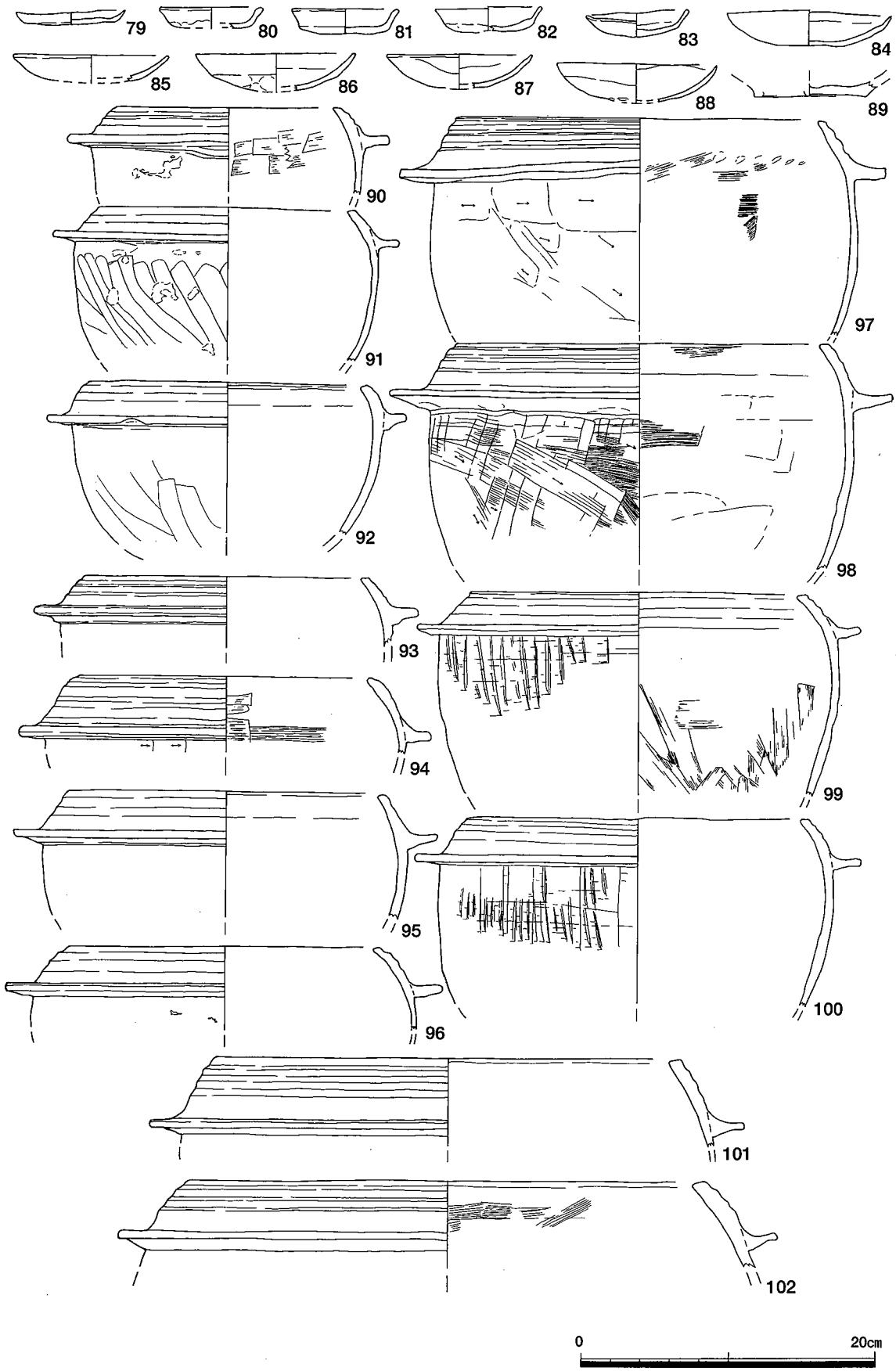


図９　SD-212出土土器

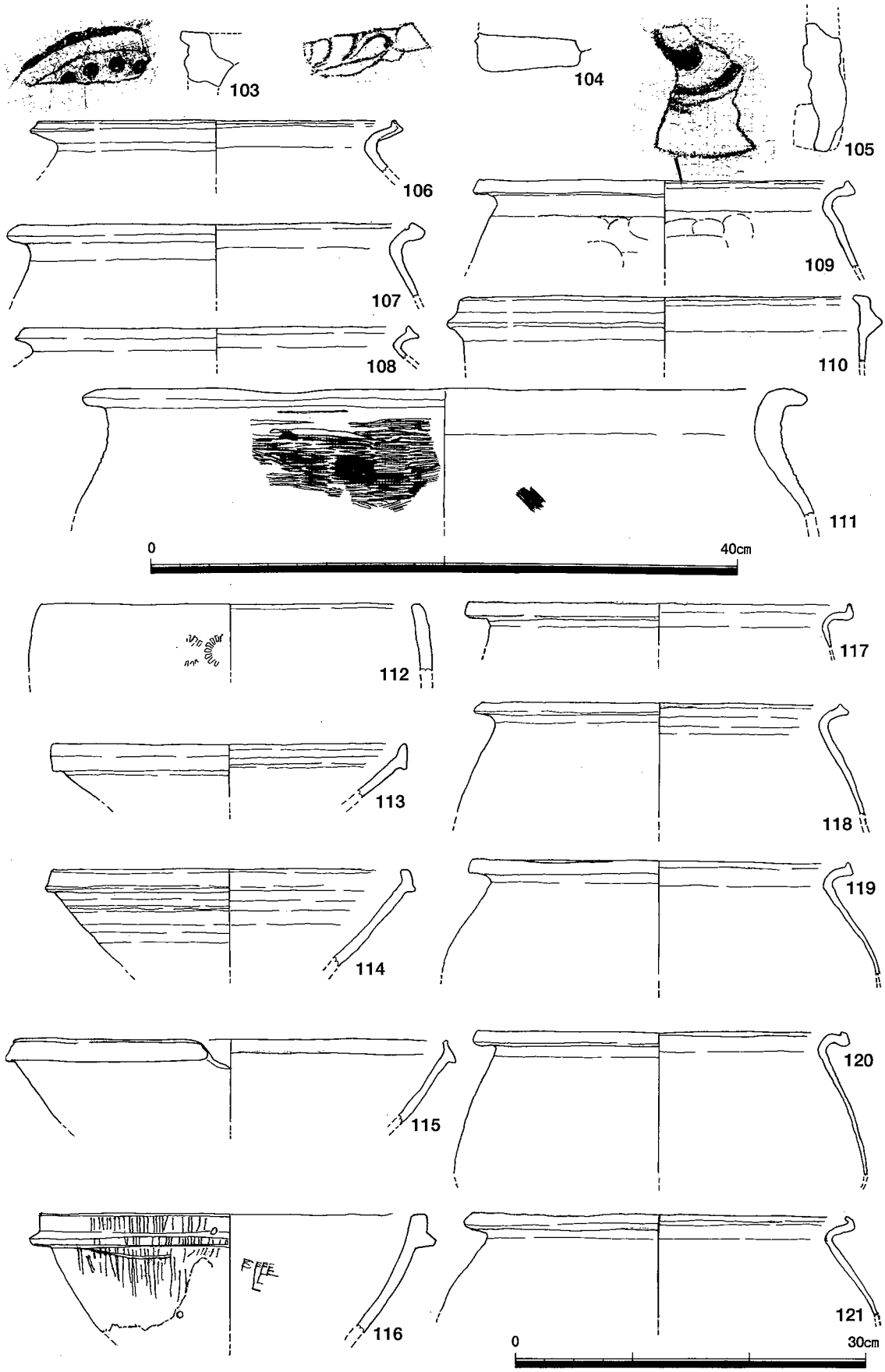


図 10　SD-212出土遺物

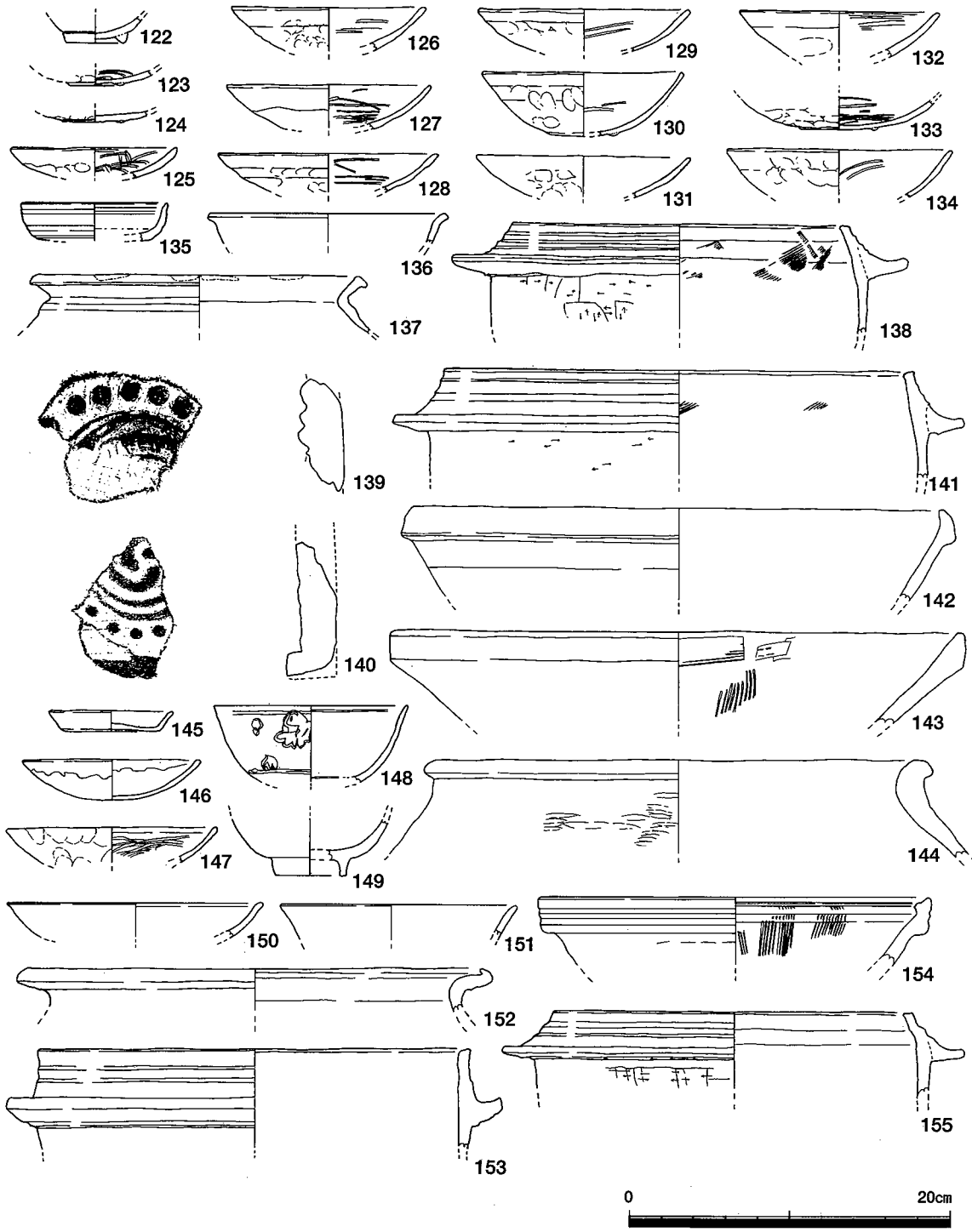


図11　SX-201（145、149）、SX-203（122～143）、SD-221（147）、Pit-203（144）、第3層（146、148、150、154）、第4層（151～153、155）出土遺物

0.6 m、深さ約 0.2 mを測る。この溝は土地境界および建物を区画する溝と考えられる。

ＳＸ－２０１

調査区西端部分に検出した遺構で、検出長７m、深さ 0.4 mを測る。整地のために埋められている遺構である。一時期ＳＤ－２１２が流れ込んでいた。遺構の形状から池であった可能性が考えられる。

ＳＸ－２０３

調査区中央部に広範囲に広がる整地遺構である。規模は約 30 m、最大幅 10 mを測る。整地土の掘削を行った結果、包含層第 5 層を検出した。出土遺物は瓦、瓦器等を中心としている。この部分が主に第 3 遺構面として遺構検出を行った部分である。

第 1 遺構面

第 1 遺構面では調査区西北部において地山を検出したほかは調査区ほぼ全域から良好な形で主に耕作に伴う鋤溝跡を検出している。鋤溝の規模は幅 0.2 ～ 0.3 mのものが中心である。地形は、北側から南側に向かって傾斜するとともに西側に向かって緩やかに傾斜している。出土遺物は主に近世陶磁器、瓦を中心に出土しており時期は近世後半と考えられる。

本調査地で検出した鋤溝の方向はほとんどが北東－南西方向で調査区中央部でやや南側に曲がり敷地の形状にそっていることがわかった。また、調査区東側では鋤溝はほぼ真っすぐでやや方向が東側に傾いており状況が若干異なる。中央部やや東の調査区が曲がる部分でもとは段差を有しておりそれを整地することによって同一面としている。もとは西側が一段低くなっており、この段は現代の耕作地の区画と一致していることから近世にこの区画が設定され現代に至っていることがわかった。

出土遺物（図版 6 、 7）

ＳＥ－３０１（図 7）

1 ～ 3 は土師器小皿である。4 ～ 12 は瓦器椀である。4 は口径 7.1 ㎝で貼り付け高台を有する椀のミニチュアである。13、14 は白土器皿である。15 は瓦質すり鉢である。16 は復元口径 12.2 ㎝の瓦質羽釜である。

ＳＫ－３０２（図 7）

17、20、23、26 は土師器小皿である。

ＳＸ－３０２（図 7）

18、21、24、25、27 ～ 31 は土師器小皿である。19、22 は瓦器小皿である。32 は土師質羽釜 33 ～ 36、40、41 は瓦質羽釜、37 は瓦質すり鉢、38 は東播系須恵器こね鉢、39 は土師質こね鉢底部である。

ＳＸ－３０３（図 8）

43、44、46 ～ 54 は土師器皿である。45、55 は青磁碗である。56 は土師質すり鉢、57 は瓦質こね鉢、58 は瓦質すり鉢である。

ＳＸ－３０６（図 8）

59、60 は土師器小皿、62 は土師器皿である。63、64 は青磁碗である。65 は土師質羽釜である 66、67 は瓦質羽釜である。67 は復元口径 23.4 ㎝で口縁部 2 箇所に紐を通す穴をあける。68 は瓦質甕である。

ＳＸ－３０８（図 8） 77 は土師質壺、78 は土師質すり鉢である。

ＳＸ－３０９（図 8） 69 は土師器小皿である。

ＳＤ－３０１（図 8） 71 は瓦器椀である。

ＳＤ－３０５　72 は復元口径 11.6 cmの瓦器椀である。

ＳＤ－３０６（図８）　73 は復元口径 14.0 cmの瓦器椀である。外面を指押さえで仕上げる。

ＳＤ－３０８（図８）　74 は瓦器椀である。

ＳＤ－３０９（図８）　70 は土師器小皿である。

ＳＤ－３１５（図８）　75 は瓦器小皿である。

Ｐｉｔ－３２０（図８）　76 は瓦器椀である。

ＳＤ－２１２（図９、10）

79 ～ 84 は土師器小皿である。85 は瓦器小皿、86 ～ 88 は瓦器椀である。89 は復元底部径 7.6 cmの須恵器壺である。底部は回転糸切り未調整である。90、91、95、96、100 ～ 102 は瓦質羽釜である。92 ～ 94、97、98 は土師質羽釜である。103、105 は軒丸瓦片である。104 は軒平瓦である。106 ～ 109、117 ～ 121 は甕である。110 は紀伊型土師質羽釜である。112 は印花スタンプ文を施す火鉢である。111 は瓦質湊焼甕である。113 ～ 115 は東播系須恵器こね鉢である。116 は復元口径 30.8 cmの石鍋である。滑石製で顎部上部、体部に穿孔を施す。

ＳＸ－２０１（図 11）　145 は瓦器椀である。149 は瓦質湊焼甕である。

ＳＸ－２０３（図 11）

123 ～ 134 は瓦器椀である。122 は復元高台径 3.6 cmのミニチュアの瓦器椀である。135 は須恵器坏身である。136 は青磁碗である。137 は土師器壺である。139、140 は軒丸瓦である。ともに三つ巴文である。138、141 は瓦質羽釜である。142 は瓦質こね鉢、143 は瓦質すり鉢である。

ＳＤ－２２１（図 11）　147 は復元口径 12.0 cmの青花である。

Ｐｉｔ－２０３（図 11）　144 は土師器小皿である。

遺物包含層第３層（図 11）　146 は瓦器椀である。148、150 青磁碗、154 は堺すり鉢、

遺物包含層第４層（図 11）　151 は青磁、152 は土師質甕、153、155 は瓦質羽釜である。

３、まとめ

今回の調査は今まで明らかにされていなかった地蔵堂遺跡の西側部分についての遺跡の状態を知ることができた。

第１遺構面は、近世の鋤溝を中心とした遺構で構成され、当時の土地区画についての復元を可能とした。第２遺構面では、中世における開発によって大規模な整地が行われていたことが明らかとなり、ＳＤ－２１２からは多数の遺物が出土し、市内中世の出土遺物を考えるうえで良好な資料が出土している。

第３遺構面では、土地境界および建物の区画と考えられる区画溝を検出し、また、ＳＫ－３０１のような祭祀にかかわる遺構のほか、調査区中央部の土坑から数多くの瓦、土器等の遺物が廃棄された状況が明らかとなった。これらのことから、本調査地は、地蔵堂廃寺の主要な伽藍ではなく、生活に関わる坊などの建物が存在したと考えられ、寺域が本調査地部分にまで広がっていたという、地蔵堂廃寺を考えるうえで貴重な成果となった。

Ⅱ　土生遺跡発掘調査

1、位置と環境（図 12）

市北部に位置する岸和田市側に集落の中心が広がると考えられる弥生時代～古墳時代の集落跡である。周辺の遺跡として西に弥生～古墳・中世の散布地・集落跡である小瀬五所山遺跡、南には縄文、平安～近世、散布地、集落跡である久保遺跡がある。津田川南側には小瀬遺跡、新井・鳥羽北遺跡、新井・鳥羽遺跡、堀遺跡、津田遺跡、貝塚寺内町遺跡などが存在する。

本遺跡の立地する津田川右岸下流域は広範囲に河岸段丘を形成し、現在の状況と違い水量も多く流路の移動幅は本調査地周辺では 500 m以上である。本調査地は中位段丘の端部分に位置する標高約 18 mの地点で、岸和田市側の水田が整然とした区画であるのに対して貝塚市側は地形変化に沿って水路が走り、道がつくられている。

本遺跡における過去の調査では弥生土器、土師器の出土が見られ、溝や流路と考えられる遺構を検出しているが小規模調査によるものであり、まとまった面積での調査は初めてと言ってよい。

2、調査結果（図 13）

調査は分譲住宅建設に伴う道路部分（第 1 区）と開発地南西部擁壁部分（第 2 区）の 480 ㎡の調査区を設定した。調査区には国家座標に基づいて 5 × 5 mを基準とする区画を設定し南北Ａ～Ｐ、東西 1 ～ 14 の記号をあたえた。

調査区における地層の状況は、盛土下に耕作土が薄く残り、耕作土下の状況はすぐに地山の部

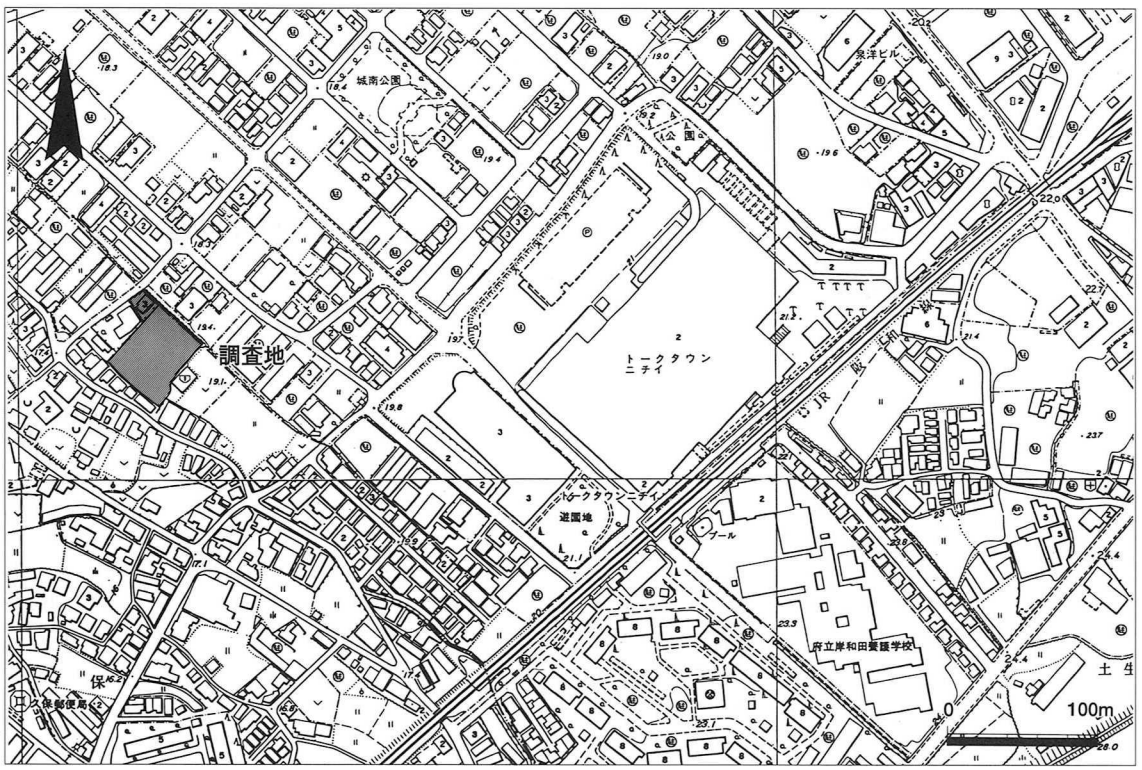


図 12　土生遺跡調査地位置図

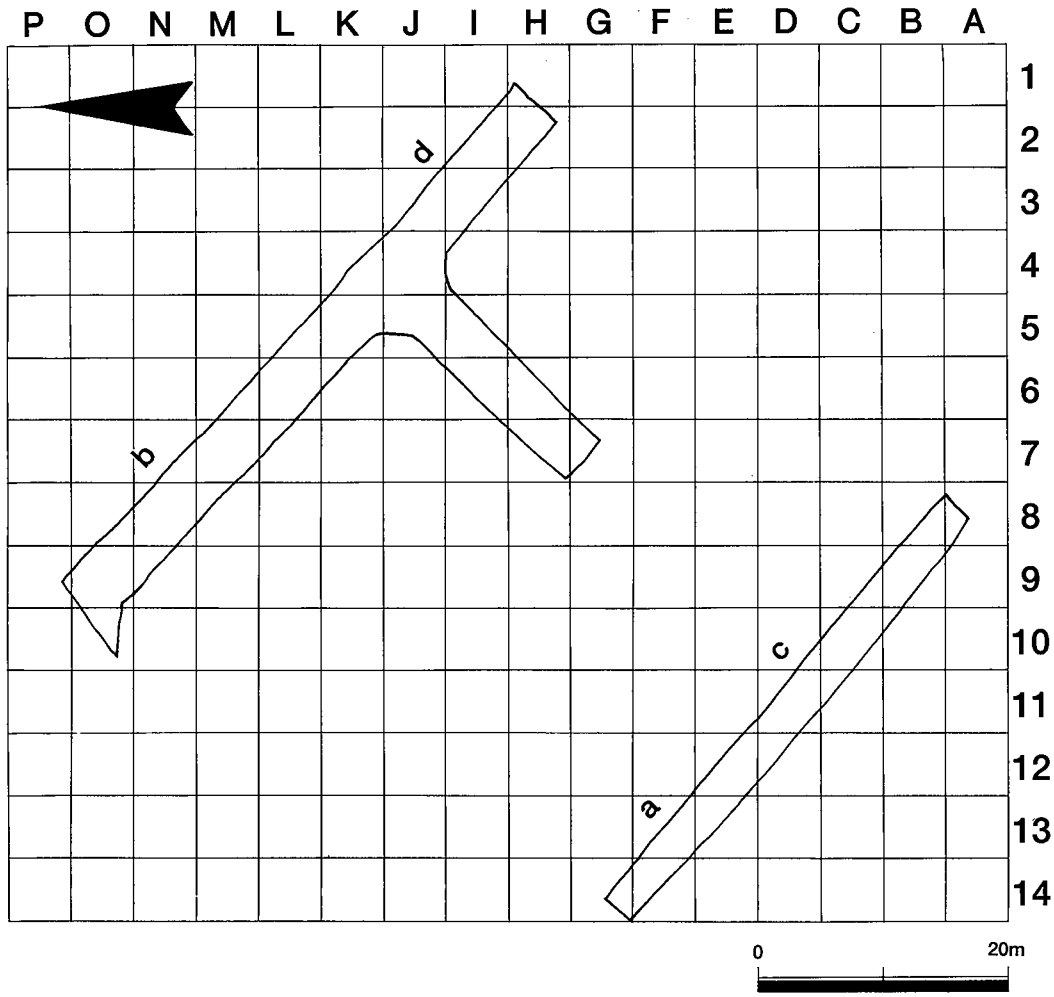


図 13　調査区地区割図

分と淡黄灰色土が約 0.05 m程度堆積する部分に分けられる。地山は黄色土及び褐色砂質土で上面では多数の遺構を検出している。(図 14)

以下、各調査区および各遺構面について概要を説明する。また、第 1 遺構面（地山上面及び淡黄灰色土上面)、第 2 遺構面（地山上面）として説明する。

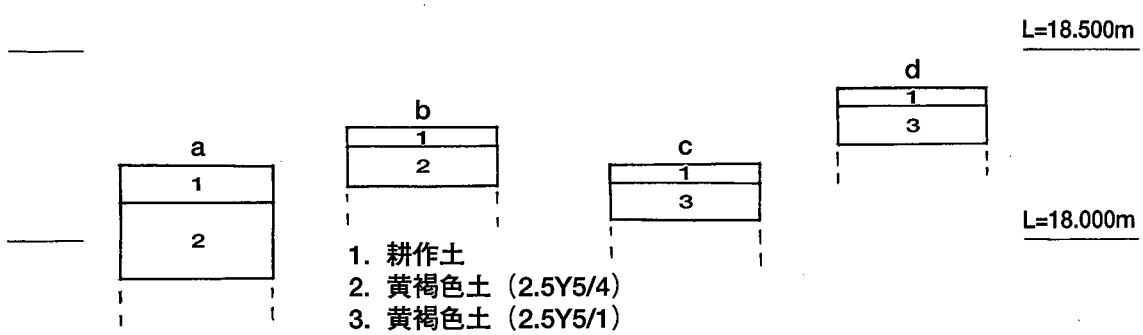


図 14　柱状土層図

第１遺構面

調査区東部においては淡黄灰色土（耕作土層）があり、上面では鋤溝を検出している。遺物は14世紀代の瓦器椀を中心としており、遅くとも14世紀には開発され水田として使用されていたことがわかる。第１区では14世紀代と考えられる井戸が掘削されている。この井戸は素掘りで、また、近世以降にも２ヶ所で井戸が掘削されている。２箇所ともに素掘りで遺物も少ないことから生活用のものではなく耕作用のものと考えられる。

第２遺構面（図15、図版８～12）

ＳＤ－２０１

本遺構はＯ－９区にて検出した溝である。幅0.4ｍ、検出長２ｍで埋土は暗灰褐色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

ＳＤ－２０２

Ｏ－８、９区にて検出した溝である。一部撹乱に切られる。幅0.5ｍ、長さは３ｍ以上である。埋土は暗灰褐色土で、遺物は弥生土器が出土している。

ＳＤ－２０３

Ｏ－10区で検出した。調査区端に位置する溝である。幅0.5ｍ以上、長さ1.5ｍ以上である。埋土は暗灰褐色土で、遺物は弥生土器が出土している。

ＳＤ－２０４（図16、19～22）

Ｉ－２からＮ－９区にかけて南東－北西方向に流れる溝である。幅1.5ｍ、深さ約1.2ｍで長さ20ｍ以上である。集落を区画する環濠の一部ではないかとの推測も可能であるが、集落の中心部が広がると推定される岸和田市側ではこのような溝は検出されておらず、集落の範囲も明らかになっていない状況である。

埋土は上層、下層、底部、砂層の４層に分けて掘削を行った。しかし、掘削時に各層の遺物が混じって掘削しており、各層の遺物は明確に分けられていない。出土遺物は弥生中期を中心として庄内期にかけての時期幅がある土器（１～73）、石包丁（100、101）が出土している。しかし、出土遺物から示される期間この溝が機能していたとは考えにくく、時期の異なる溝が重なり合っている可能性が高い。限られた面積のため調査では切り合い関係を確実に押さえることはできなかった。また、新しい時期の遺物は溝の南東部から出土していることは確認できており溝の北西部が弥生中期で押さえることができ、明らかに時期差が見られることがわかっている。

本溝からの出土遺物には大きな特徴がある。台形土器と呼ばれる台状の形態の土器が多く出土していることである。（8、9、11、12、14、15、22～25、30、31、37～42、59、61、63～66、68～73）土器の製作台、玉作りなどの作業台といったことが推測されている台形土器であるが、貝塚市内では初めての出土で、土生遺跡がどのような性格の集落であったか考える上でキーポイントと言える。

他の出土遺物としては壺、甕、高坏、鉢、器台(33)、蓋(35、36、56、57)、水差しとして使用したとって付の壺(67)。ミニチュアの土器(50、51)は手づくね成形のもの。また、飯蛸壺(10)や

製塩土器(13、52 ～ 55)も出土している。製塩土器は脚付きのもので 55 以外は脚部分が残るのみで上部は破損している。

ＳＤ－２０５

Ｌ－６区で検出した溝である。幅 0.2 m、長さ 0.7 m以上、深さ 0.2 mである。埋土は暗灰褐色土で、出土遺物は弥生土器が出土している。

ＳＤ－２０７（図 17、23）

Ｇ・Ｈ－７区で検出した溝である。弥生土器が集積して出土している。溝の規模は幅 1.2 m、長さ 5.5 m以上、深さ 0.5 mである。埋土は暗赤灰色土である。弥生土器の集積は、本溝が３分の２以上埋まった状態で一時に廃棄を行っていると考えられる。壺（77 ～ 84）を中心として蓋（76)、手づくねの土器（74)、蛸壺（75）などが出土している。

ＳＤ－２０８

Ｉ－２・３区で検出した。幅 0.8 m、長さ４m以上である。埋土は淡黄灰色土で瓦器椀片が出土しており 14 世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＤ－２０９（Ｇ－ 14)、ＳＤ－２１１（Ｅ・Ｆ－ 13)、ＳＤ－２１２（Ｅ・Ｆ－ 13)

幅 0.2 m、深さ 0.2 mの鋤溝である。埋土は淡黄灰色土で瓦器椀片が出土している。

ＳＤ－２１０

Ｆ・Ｇ－ 14 区にて検出した。検出長 2.1 m、幅 0.3 m、深さ 0.3 mの耕作に伴う溝である。本溝は調査区敷地の西北隅部分に位置しており水田端付近につくられた溝と考えられる。瓦器椀片が出土している。

ＳＸ－２０８

Ｈ－１・２区にて検出した土坑である。検出長 1.1 m、深さ 0.4 mの土坑である。調査区南東隅の近世井戸に切られる。出土遺物は瓦器椀である。

ＳＸ－２１０

Ｆ－ 13･14、Ｇ－ 14 区にて検出した落ち込みである。検出長８m、検出幅 0.8 m、深さ 0.1 mで南東方向に下がる。埋土は耕作土で調査区南西端は地形変化地点で段差を有しており２層程度の石垣の掘り方の可能性がある。

ＳＸ－２１１

Ｆ－ 13・14 区にて検出した土坑である。長軸 0.8 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 mで埋土は淡灰色土で瓦器椀が出土している。

ＳＸ－２１２

Ｄ－ 12、Ｅ－ 12・13 区にて検出した落ち込みである。検出長７m、検出幅 0.5 mで瓦器椀、磁器染付などが出土している。埋土は耕作土で、ＳＸ－ 210 と同様石垣の掘り方の可能性がある。

ＳＸ－２１３

Ｅ－ 12 区にて検出した土坑である。長軸 0.9 m、短軸 0.7 mで埋土は暗灰褐色土。弥生土器細片が出土している。

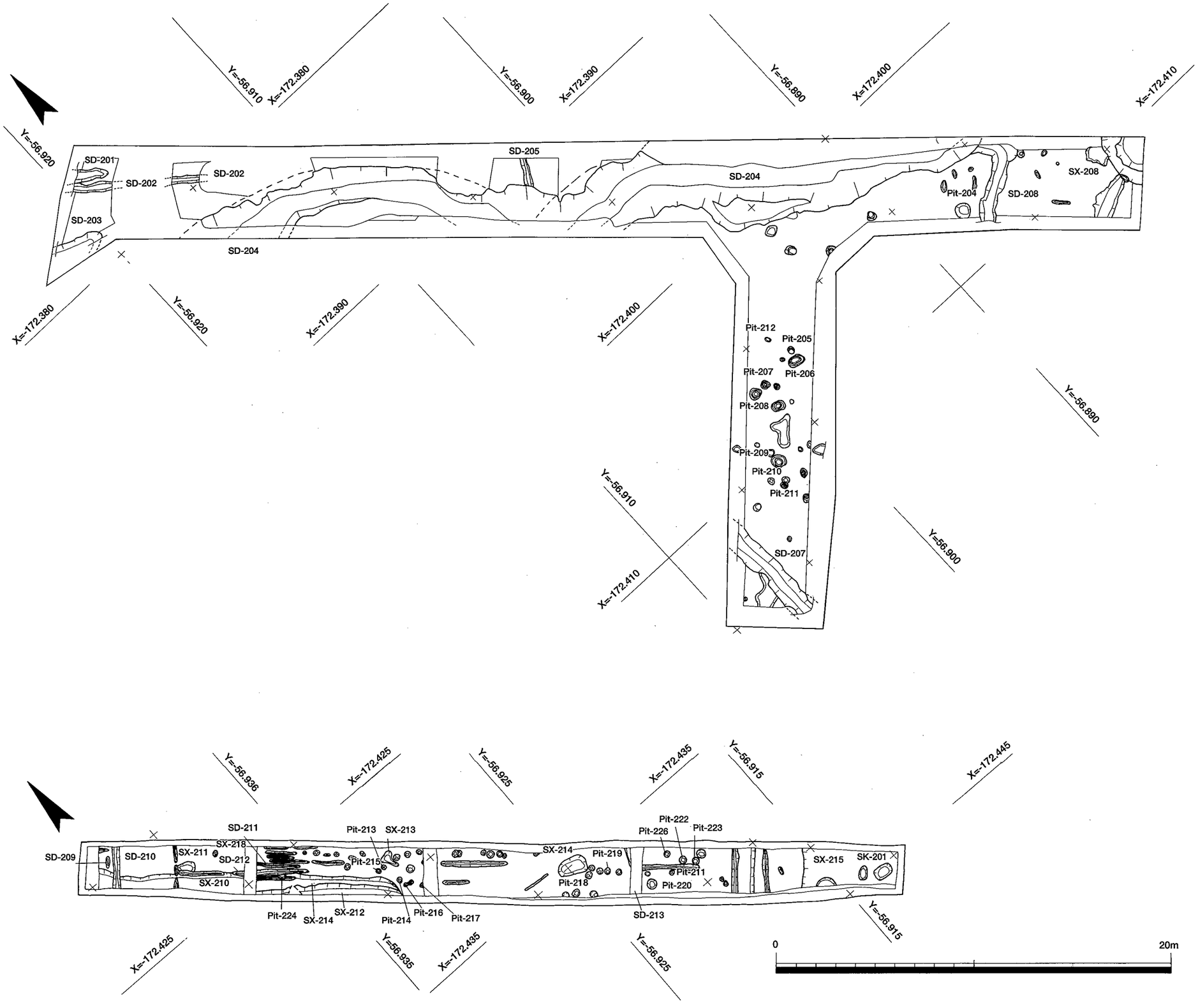


図 15　調査地遺構配置図

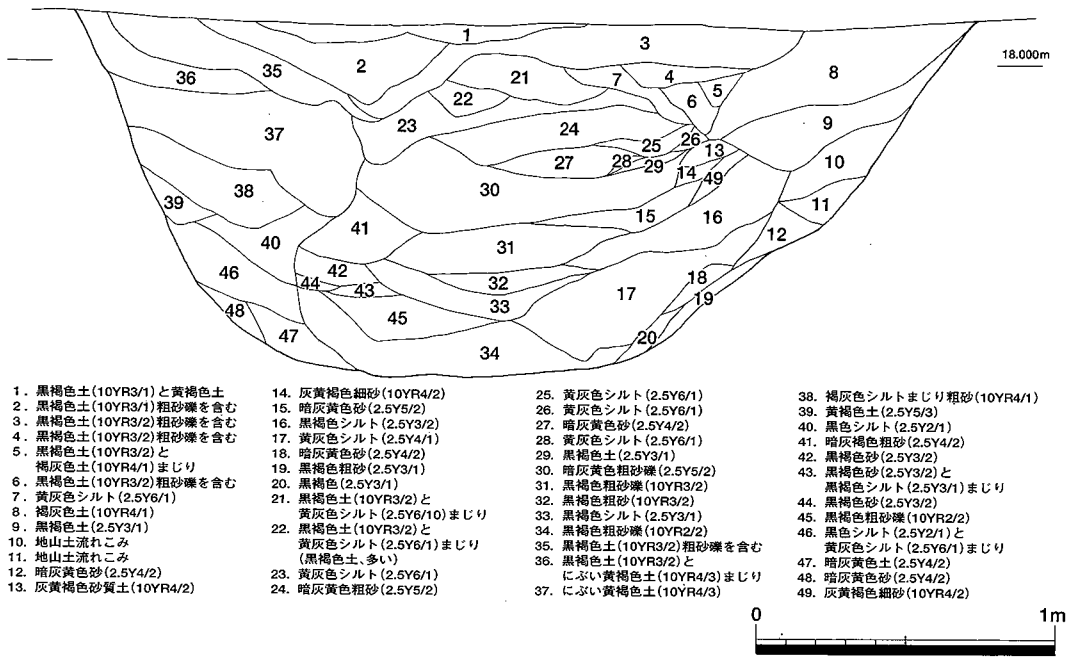


図 16　SD-204土層断面図

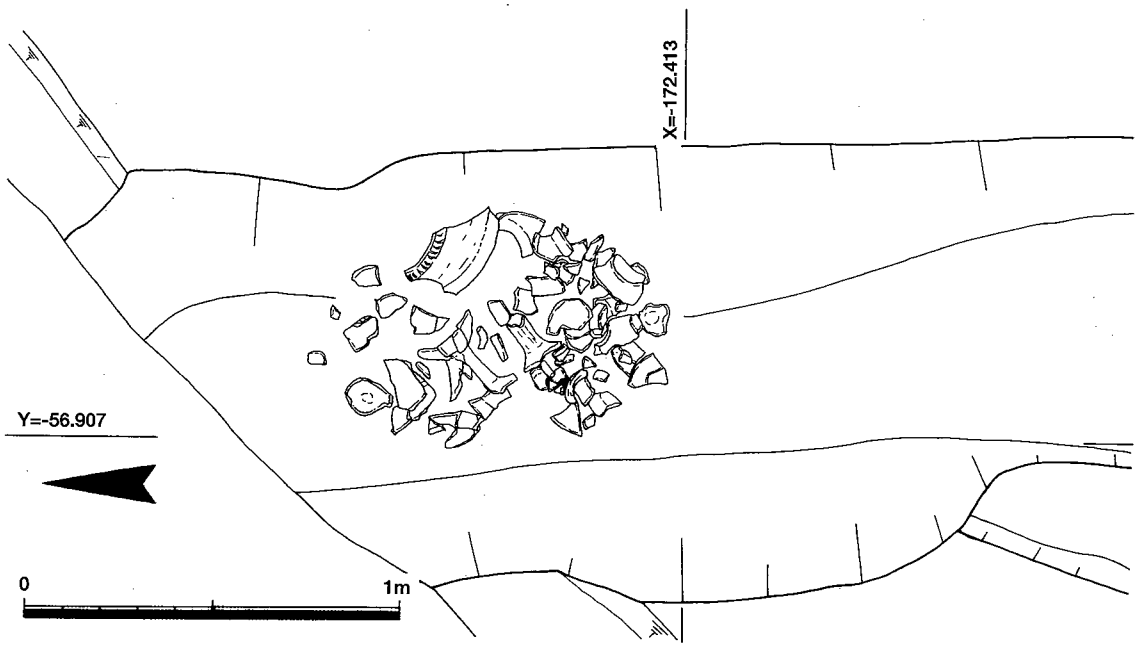


図 17　SD-207土器出土状況図

ＳＸ－２１４

Ｄ－12、Ｅ－12・13区にて検出した落ち込みである。検出長7.5ｍ、検出幅0.8ｍで瓦器椀、磁器染付等が出土している。埋土は耕作土で、ＳＸ－２１０同様に石垣の掘り方の可能性がある。

ＳＸ－２１５

Ａ－８、Ｂ－８・９区にて検出した土坑である。検出長4.7ｍ、深さ0.5ｍで南東方向に下がる。瓦器椀、土師器小皿などが出土している。

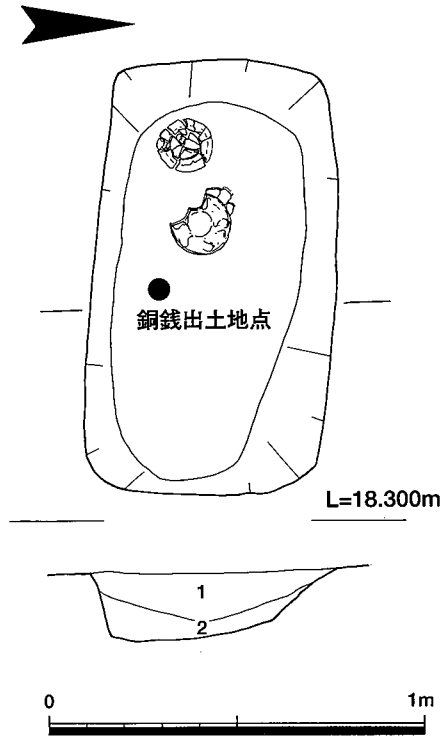


図 18　SK-201平面図、土層図

ＳＸ－２１６

Ｂ－９区にて検出した土坑である。検出長 0.6 m、幅 0.6 mで埋土は黄褐色土で土壙墓の可能性がある。遺物は土師器片が出土している。

ＳＸ－２１７

Ｂ－８区にて検出した土坑である。検出長 1.1 m、幅 0.55 m、深さ 0.3 mで埋土は黄褐色土で土壙墓の可能性がある。遺物は瓦器椀が出土している。

ＳＸ－２１８

Ｃ・Ｄ－ 10・11 区にて検出した長軸 1.4 m、短軸 0.8 m深さ 0.2 mの土坑である。埋土は暗灰褐色土で弥生土器の細片が出土している。

Ｐｉｔ－２０３

Ｊ－４区で検出した。直径 0.4 m、深さ 0.3 mで埋土は暗灰褐色土で弥生土器片が出土した。

Ｐｉｔ－２０４

Ｉ－３区で検出した。直径 0.7 m、深さ 0.5 mで埋土は淡黄褐色土で須恵器片が出土した。

Ｐｉｔ－２０５～Ｐｉｔ－２１２、Ｐｉｔ－２２５

Ｈ－６、Ｉ－５・６区で集中する柱穴である。埋土はすべて暗灰褐色土で、規模の最大のものでは長軸 0.8 mであるが、直径 0.3 ～ 0.4 mの規模のものが中心で、深さは 0.2 mのものが多い。建物のプラン復元はできなかったが、掘立柱建物が数棟存在したことは確かである。出土遺物は弥生土器片が出土しておりこれらの柱穴が弥生時代中期まで遡る可能性がある。

Ｐｉｔ－２１３～Ｐｉｔ－２１７、Ｐｉｔ－２２４

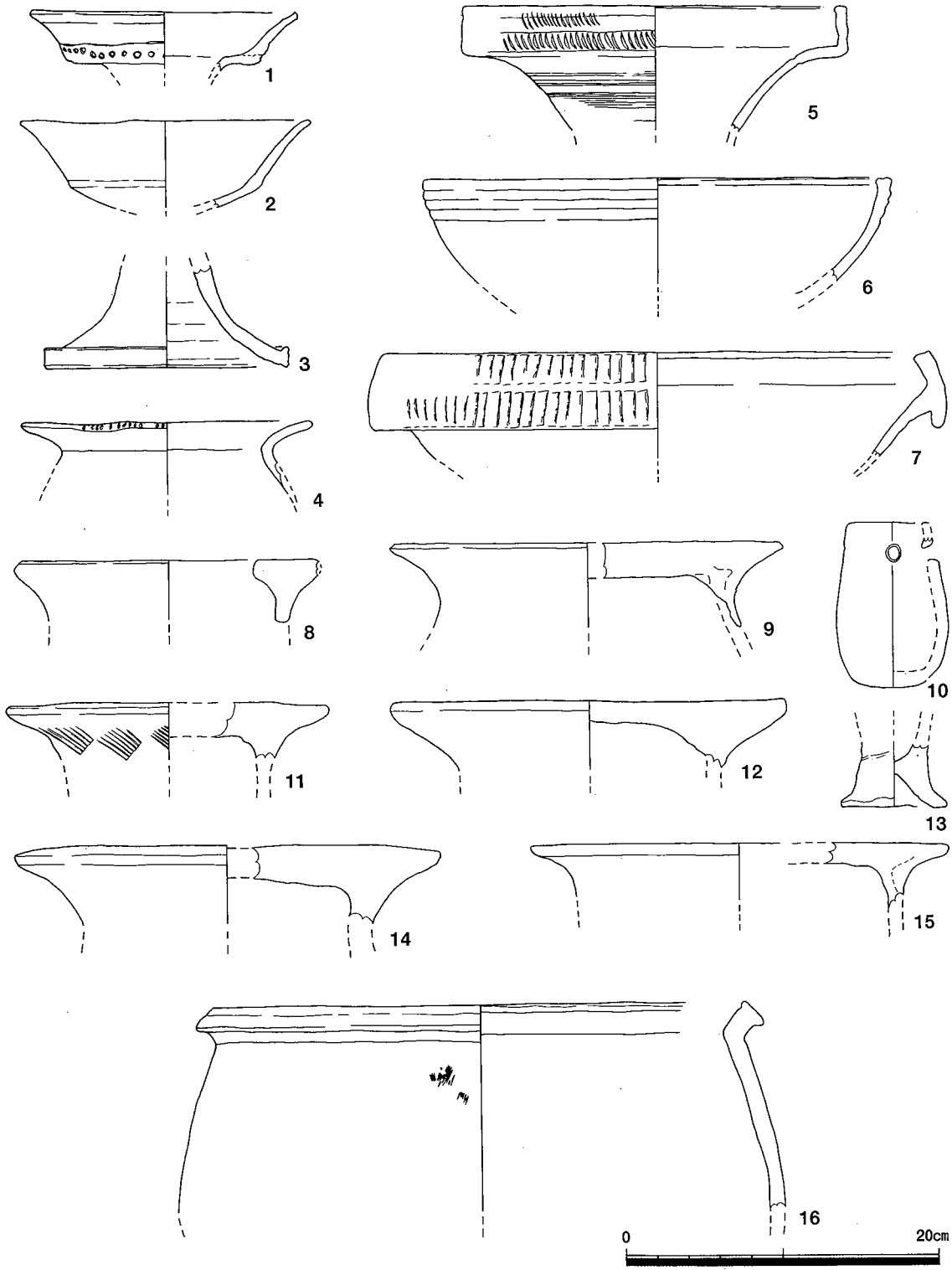


図 19　SD-204（砂層）出土遺物

D－12、E－12・13 区に集中する柱穴である。埋土はすべて暗灰褐色土で、規模は直径 0.3 m、深さ 0.1 mの規模のものを中心とする。遺物は極めて少ないが、弥生土器細片とサヌカイト片が出土している。

Ｐｉｔ－２１８～Ｐｉｔ－２２３、Ｐｉｔ－２２６

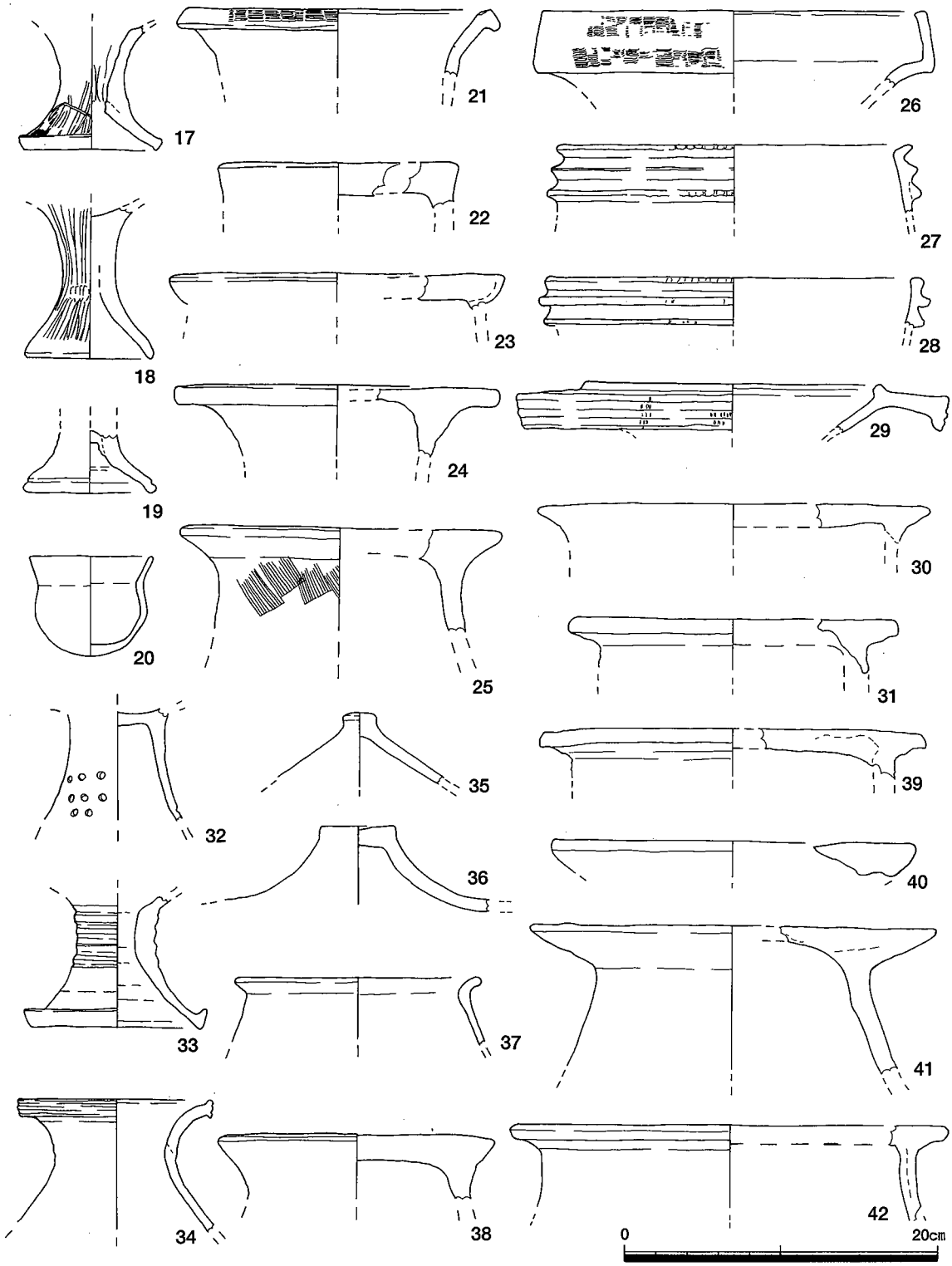


図 20　SD-204（下層、底部分）出土遺物

C－9～10 区で検出した柱穴である。埋土はすべて暗灰褐色土で、規模は直径 0.3 m、深さ 0.1 mの規模のものを中心とする。遺物は少ないが弥生土器細片とサヌカイト片が出土している。

ＳＫ－２０１（図 18、24）

調査区南東部で検出した土壙で、検出長軸 1.2 m、幅 0.64 m、深さ約 0.2 mを測る。軸方向は

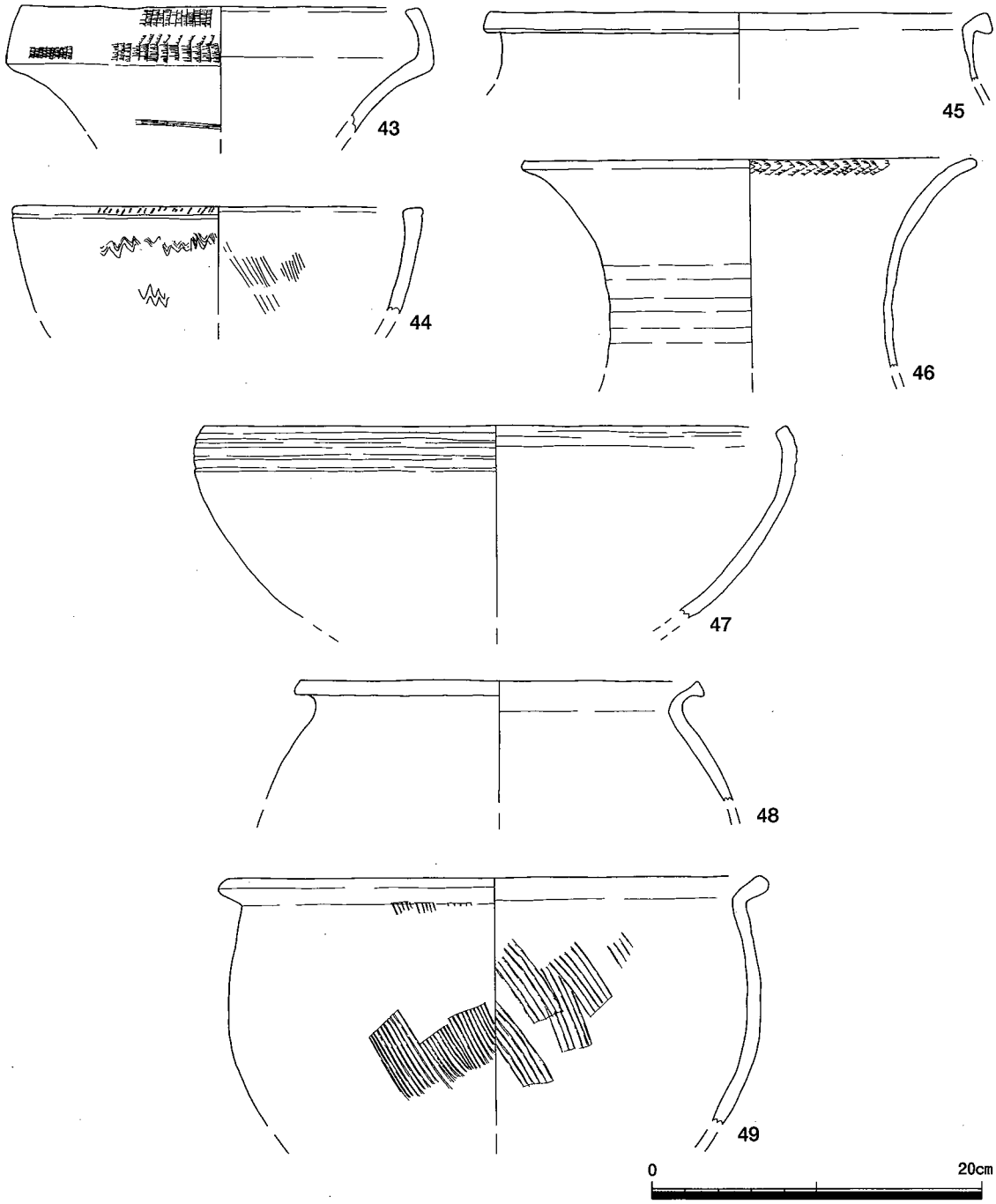


図 21　SD-204（底部分）出土土器

東西方向で底辺西側やや南よりに土師皿が裏向きで１点、中央部から西よりで青磁碗（90）、その下に土師器皿（89）、土師器小皿４（85 ～ 88）、近接した中央部やや南よりから銅銭が５枚重なって錆ついた状態（102）で出土している。

出土遺物は底部分から浮き上がった位置で出土しており、埋置した位置ではないと考えられる。（人骨等の腐朽によって移動した可能性が高い）上部は削平されており青磁碗が少し顔を出す程度の深さしかなく推定の深さは 40 cm以上であると考えられる。土層状況から考えると木棺をもたない土壙墓とみられる。方向は違うが、ＳＫ－２０１周辺には土壙墓の可能性がある土坑（Ｓ

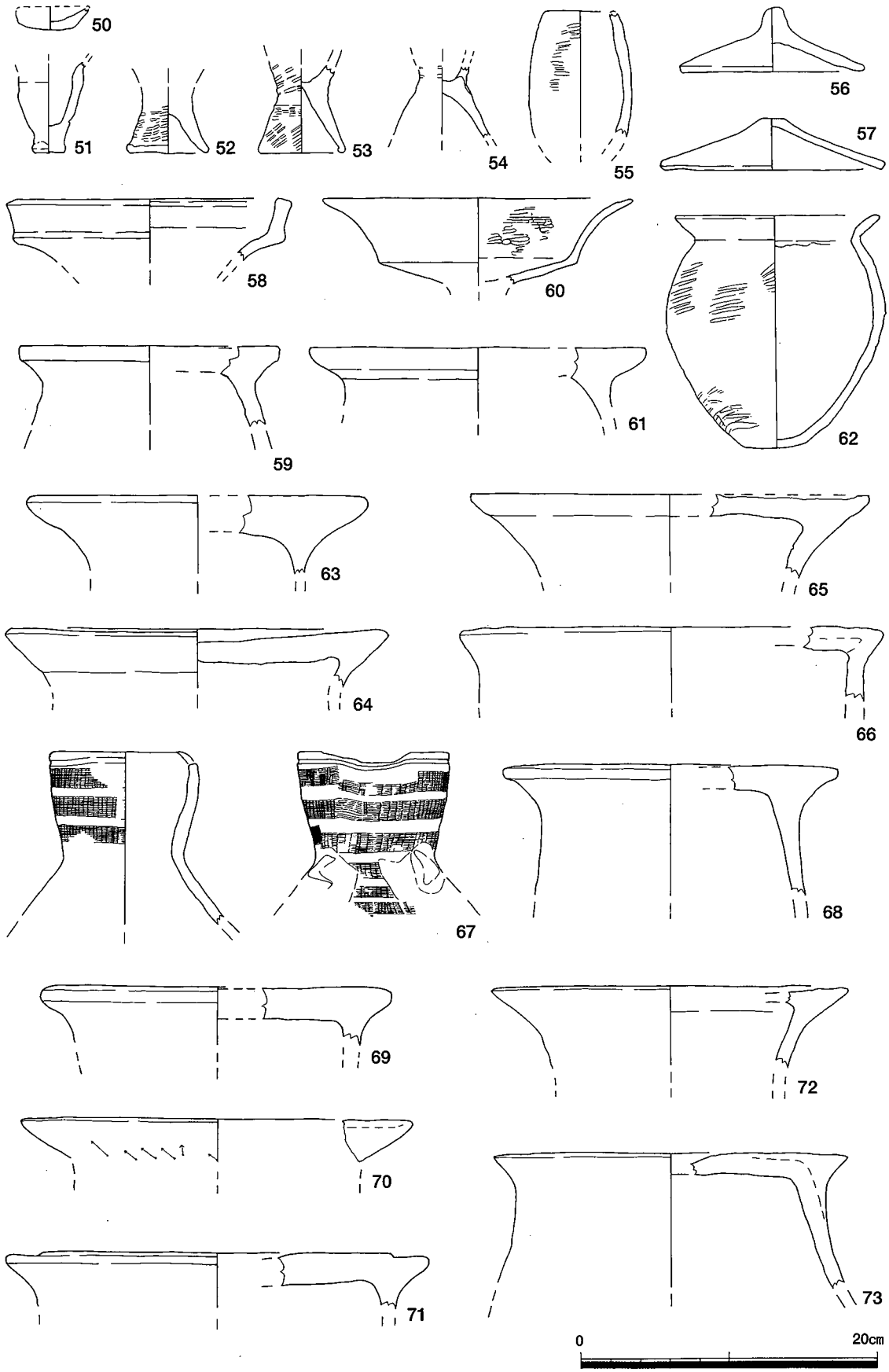


図 22　SD-204（上層）出土遺物

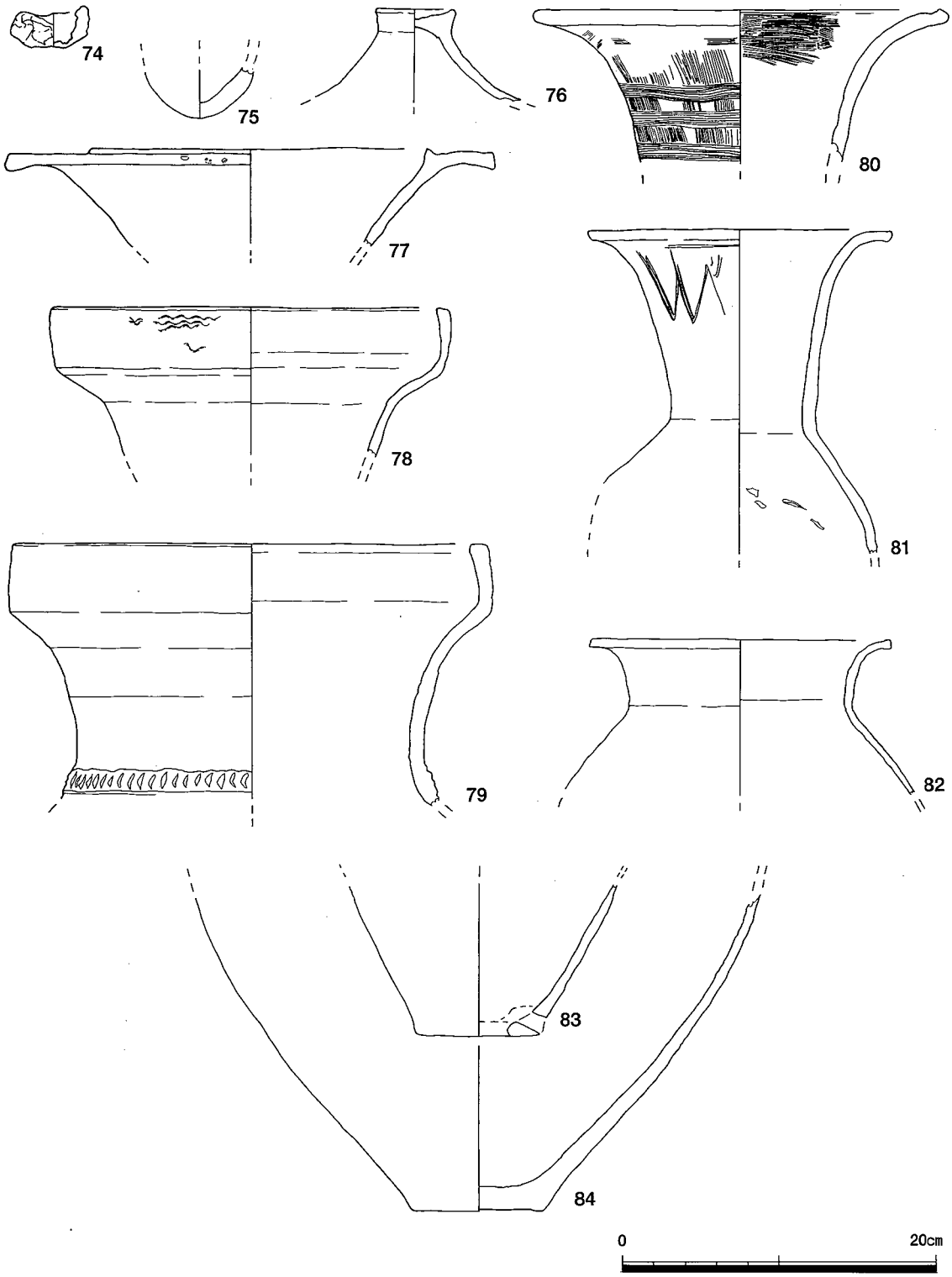


図 23　SD-207出土遺物

Ｘ－２１６、ＳＸ－２１７）が密集している。

土壙内で推定される頭部方向はほぼ西であり、地形に沿ってつくられたものかあるいは方角を意識したことの両方が考えられる。土壙は木棺を伴わないもので、その規模から女性を埋葬した可能性が高いといえる。

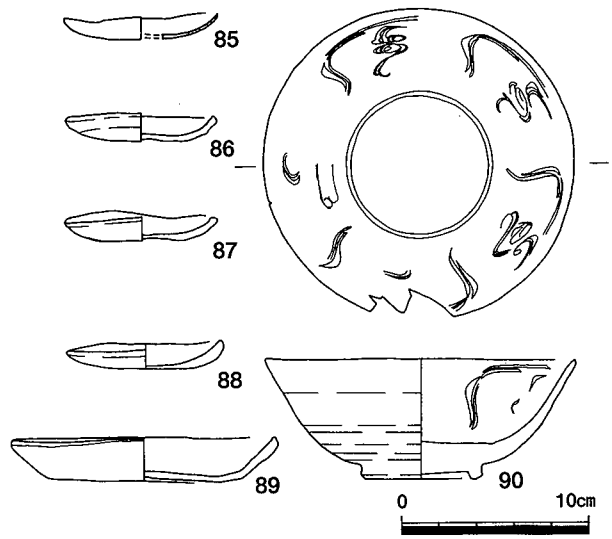


図 24　SK-201出土土器

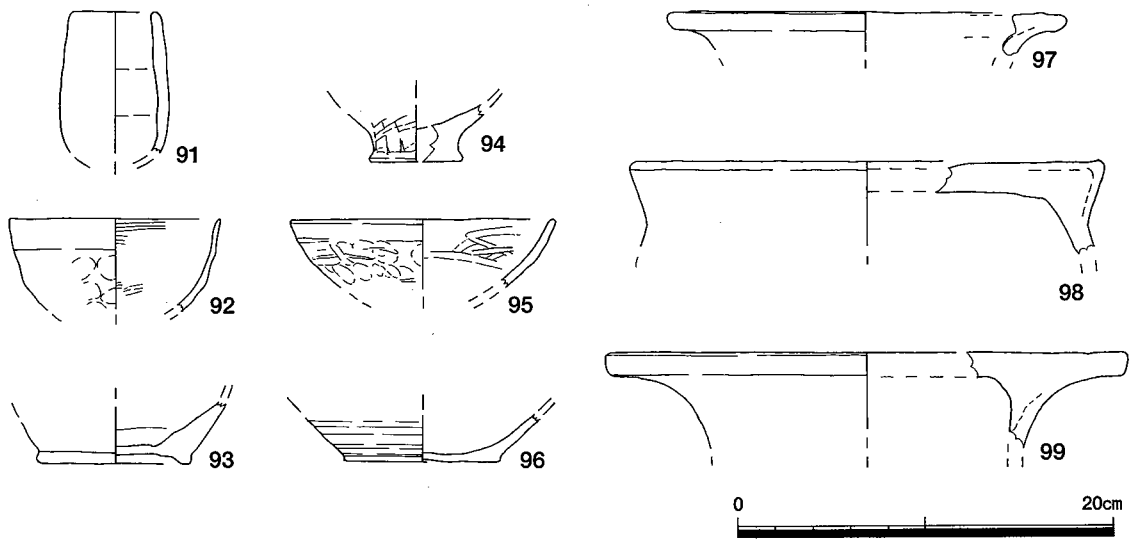


図 25　SX-202（94）、SX-204（92、95、96）、SX-210（93）、
遺物包含層（91、97～99）出土遺物

3、まとめ

弥生時代から近世までと幅広い時代の遺構を検出した。第１区では幅２ｍ、深さ２ｍの溝を検出した。溝は何度か流れが変化しており、弥生時代中期から庄内期にかけての遺物が出土した。中央部では柱穴多数を検出しており、溝に画された弥生時代の掘立柱建物を伴う空間が存在したことがわかる。第２区南部では中世の土壙墓（ＳＫ－201）を検出した。周辺では規模の似かよった土坑を検出しており、土壙墓の集中する場所、墓域として位置付けられる。

特に弥生時代の遺構は、岸和田市側に中心をもつと考えられる集落と外界を区画する「堀」と考えられ、掘立柱建物、多数の土器や石器とともに重要な成果であると言える。ＳＤ－204とＳＤ－207に挟まれる地点の柱穴の集中や他の柱穴の集中部分で建物があったことは想像ができるが、ＳＤ－204との位置関係から集落の外に位置すると考えられる。土生遺跡全体の遺構の広がり、集落の構成などが明らかになる日も近いと言える。

Ⅲ　加治・神前・畠中遺跡の調査

1、位置と環境（図 26）

遺跡は近木川右岸に位置し、弥生時代～近世にかけての遺構が多く発見されている。調査区の北側に位置する市役所周辺では、昭和 63 年頃から公共事業等に伴い、調査を行ってきた。その結果、周辺は飛鳥～平安時代の掘立柱建物や竪穴住居等が存在し、集落の中心部であったことが判明した。また現市民文化会館建設の際に検出した奈良時代の大型井戸、石帯や硯の発見等庶民の集落とは異なる、特殊な施設の存在が考えられている。

2、調査結果（図 27、28）

本調査区の基本層序は 3 層である。上から順に第 1 層；現代耕土（層厚約 0.1 m）、第 2 層；暗褐色土（層厚約 0.05 m）、第 3 層；オリーブ灰色土（層厚約 0.1 m）である。第 2 層は現代耕土に伴う床土、第 3 層は調査区北半のみに堆積している層である。地山は灰白色粘土～砂礫層で、T·P＝ 18.900 mである。

調査は第 1 層、第 2 層を機械で取り除いた後、第 3 層上面及び地山上面で行った。

第 3 層上面では若干の鋤溝と不定形の土坑を確認した。鋤溝は南北を基軸として東に約 40°振った方向とそれに直交する方向のものがある。土坑は 0.03 ～ 0.05 mと浅く、その形状からも自然の落ち込みであると考えられる。

地山上面では、大型の不定形土坑 2 基（ＳＫ－３、５）と、溝状遺構 3 条（ＳＤ－３、４、

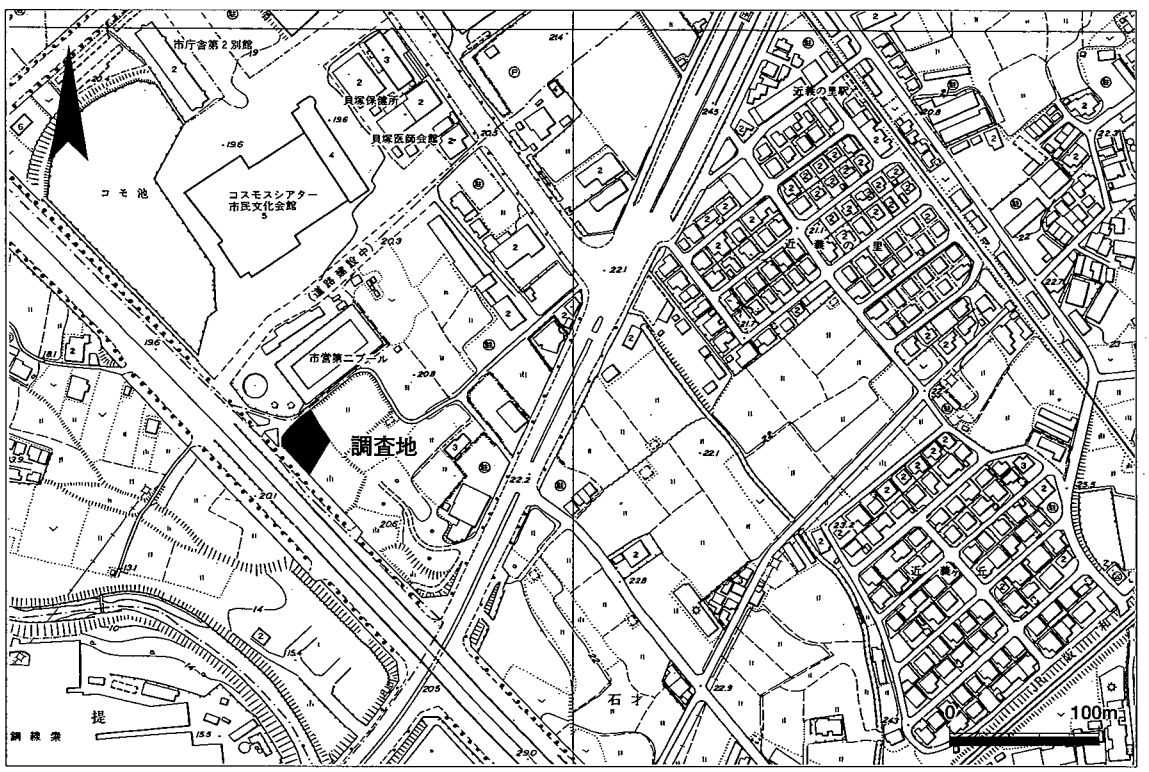


図 26　加治・神前・畠中遺跡調査地位置図

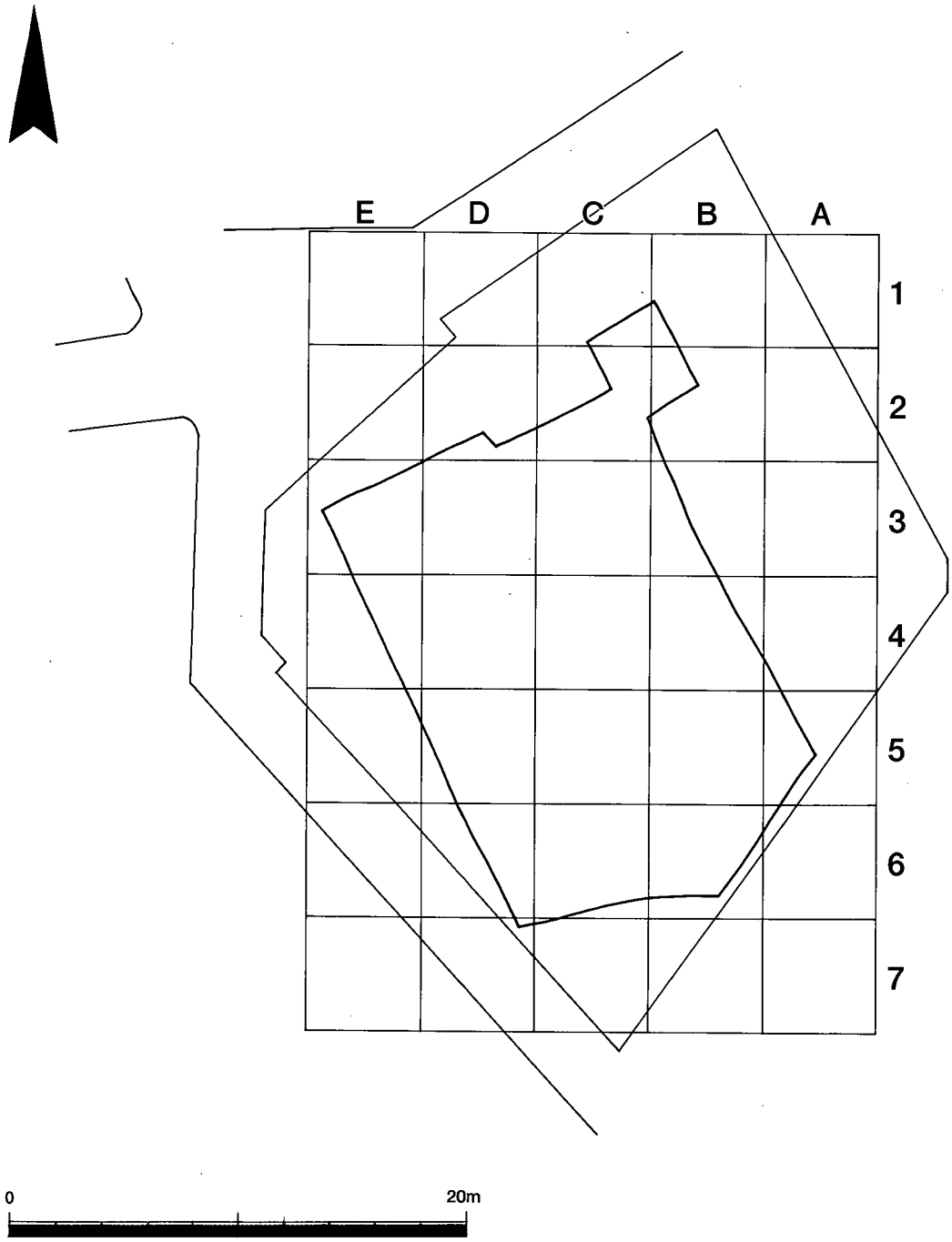


図 27　調査区地区割図

5)、小型のピット状を呈した土坑数基を確認した。

検出遺構（図 29、図版 13 ～ 15）

以下地山上面遺構の主なものについて詳述する。

ＳＫ－3

本遺構はＢ・Ｃ－２・３区で検出した土坑である。検出長約 7.5 m、検出幅約 2.7 ～ 3.5 mを測り、不整形を呈する。断面の形状は逆台形で、深さは約 0.5 mである。埋土はオリーブ灰色土の上に砂礫混灰白色粘土が若干堆積する。遺物は須恵器、瓦器、土師器、瓦、陶器片が出土した。

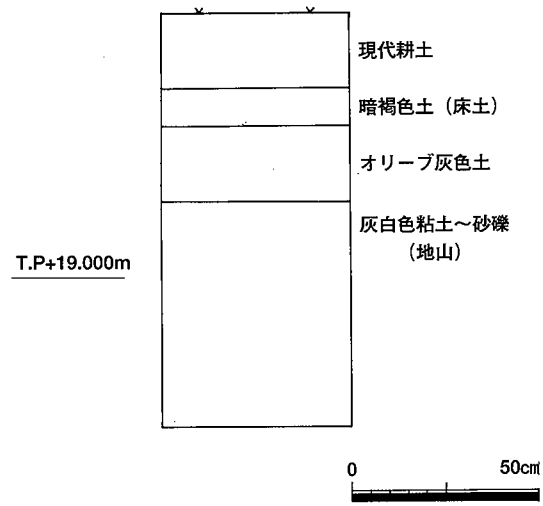


図 28　調査区土層柱状図

ＳＫ－５

本遺構はＡ・Ｂ－４・５区で検出した土坑である。検出長約 9.5 m、検出幅約 2.5 ～ 3.5 mを測り、不整形を呈する。底部は凹凸があり、深さは 0.2 ～ 0.5 mである。埋土はオリーブ灰色土の上に砂礫混灰白色粘土が堆積する。砂礫混灰白色粘土は地山粘土ブロックも多数含み、人為的に埋められた状況を呈す。遺物は須恵器、瓦器、瓦、陶器片が出土した。

ＳＫ－３、５は埋土の堆積状況、平面規模、深さ等が類似し、同じ用途で掘削されたものであろう。埋土が人為的に埋められている状況や近辺で行われた過去の調査結果等を検討すると粘土採掘坑と考えられる。

ＳＤ－３

本遺構はＢ～Ｄ－５・６区で検出した溝状遺構である。検出長約 9 m、検出幅約 3 ～ 5 mを測る。埋土は上層に黄色粘土ブロック混暗褐灰色粘質土、下層に灰色粗砂～細砂層が堆積する。埋土にはブロックや砂礫を多数含み、人為的に埋められた状況を呈す。埋土中から瓦が大量に出土した。瓦は上層の暗褐灰色粘質土に集中している。調査期間の関係上、瓦を取り上げて掘削を途中で断念した。検出深度は約 0.5 ～ 0.7 mである。遺物は他に須恵器、土師器、瓦器、肥前磁器、和泉音羽焼等が出土した。瓦は均整唐草文軒平瓦や蓮華文軒丸瓦等、平安期のものに位置づけられる。当初大量の瓦片が出土したことによって、本遺構を平安時代の溝と位置づけた。調査地には近木堂、近木ド、コギト等の字名が残ることから、平安期熊野詣に際して休憩所となった近木堂に関する遺構と考えた。しかし、遺物洗浄の段階で近世の肥前磁器、陶器類が出土していることが判明した。

ＳＤ－４・５

本遺構はＣ・Ｅ－２～５区で検出した溝状遺構である。ＳＤ－４・５は別遺構ではなく、同一遺構で、検出長約 13 m、検出幅 9 ～ 11 mを測り、不整形を呈する。ＳＤ－４の埋土は暗灰色粘質土の下に茶褐色砂礫～細砂、灰色細砂層等が堆積している。埋土には地山粘土ブロックや砂礫

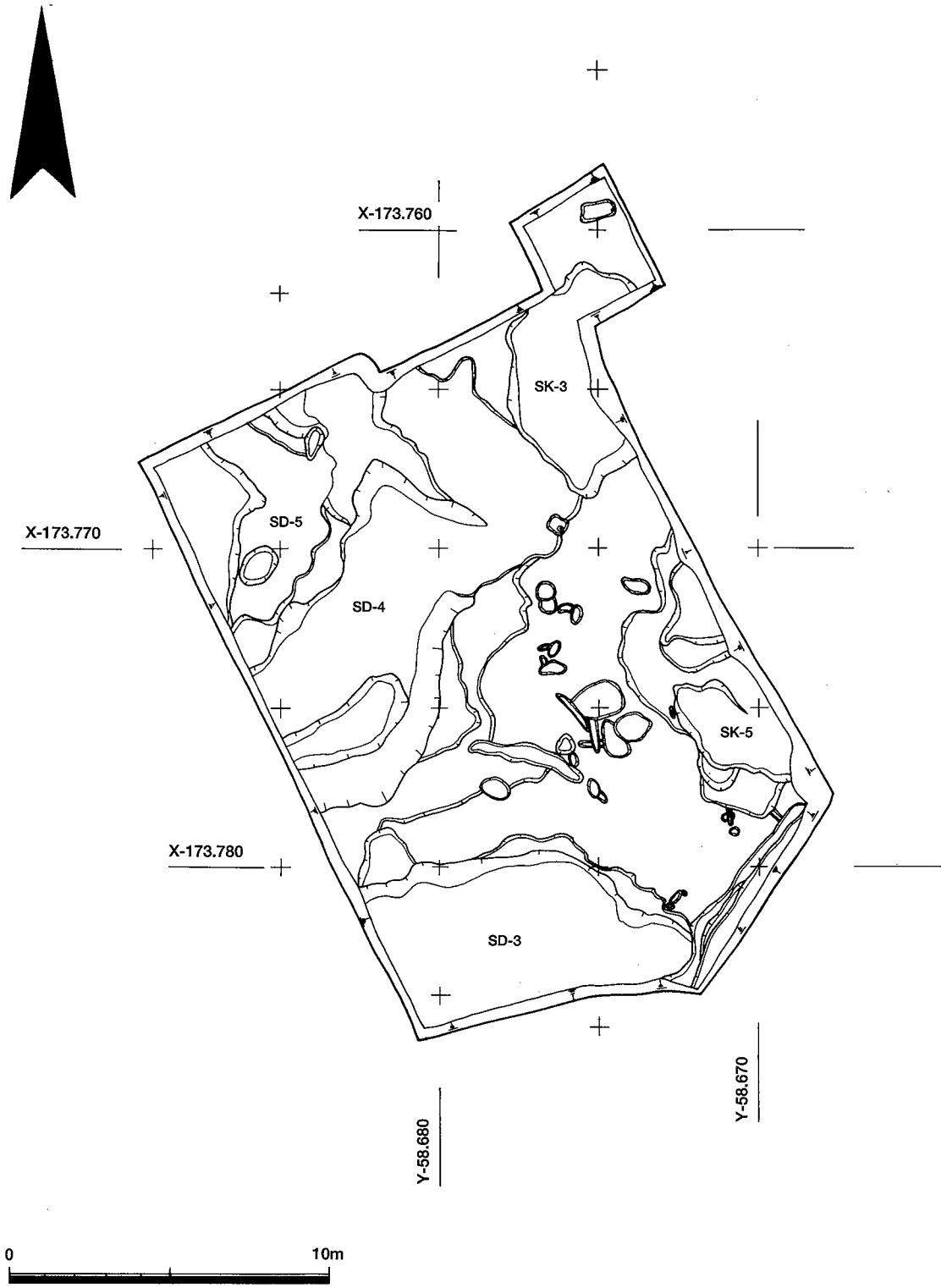


図 29　地山上面遺構配置図

を多数含み、人為的に埋められた状況を呈す。埋土中から瓦が大量に出土した。瓦は上層の暗褐灰色粘質土に集中している。調査期間の関係上、瓦を取り上げて掘削を途中で断念した。検出深度は約 0.45 ～ 0.7 mである。ＳＤ－５の埋土は黄色粘土ブロック混暗褐灰色砂礫、灰色粘土等が互層に堆積している。下層は青灰色細砂やオリーブ灰色砂礫混粗砂等が堆積する。遺物は瓦の他、

肥前系磁器、在地産陶器、瓦質鉢、瓦器、土師器、瓦質羽釜、土師質羽釜等が出土した。

出土遺物

本調査からはコンテナ 100 箱の遺物が出土した。その大半が瓦類で、ほとんどが細片である。瓦は軒丸瓦、軒平瓦だけでなく平瓦、丸瓦等もある。今回は整理期間も少なく、報告スペースにも限りがあるため、軒丸瓦、軒平瓦にしぼって報告する。

分類にあたっては、多量の瓦の中から、瓦当の文様がはっきりしている、または瓦当部分が 1 ／ 4 以上残存しているものに限って抽出した。全体の形状がわかるものは少なく、種類によっては細分も可能なものもあるかもしれない。抽出した瓦は文様構成によって軒丸瓦 14 種類、軒平瓦 10 種類に分類した。各種類の個体数も少なく、同笵関係等については筆者の力量不足から不明と言わざるを得ない。なお、瓦の文様、部分名称、技法については上田陸氏、近藤康司氏、市本芳三氏らの分類を参考にさせていただいた。

軒丸瓦Ａ類～Ｊ類は蓮華文である。

軒丸瓦Ａ類（図 30、１）：瓦当径約 16 cmを測る。周縁は直立し、外縁幅約 1 cm、高さ 1.3 cmである。外区内縁は珠文を 33 個めぐらす。中房は径 7.2 cmを測る。雄芯をめぐらせ、蓮子は 8 ～ 9 個である。瓦当厚さ 3.5 cmを測る。内区は複弁 8 葉の蓮華文である。瓦質で水簸した精緻な土を用いている。

軒丸瓦Ｂ類（図 30、２）：瓦当径、中房径不明。周縁は直立し、外縁幅約 1 cm、高さ 1.4 cmを測る。外区内縁は珠文をめぐらす。中房は雄芯をめぐらし、蓮子は不明。内区は複弁の蓮華文である。蓮華文の形状はＣ・Ｄ類と類似する。土師質で砂粒の少ない精緻な土を用いている。

軒丸瓦Ｃ類（図 30、３）：内区の複弁蓮華文のみ残存。瓦当径、中房径、周縁等は不明。瓦当厚 3.5 cmを測る。蓮華文の形状はＢ・Ｄ類と類似する。瓦質で水樋した精緻な土を用いている。

軒丸瓦Ｄ類（図 30、４）：瓦当径、中房不明。周縁は直立し、外縁幅約 1.1 cm、高さ 1.2 cm、瓦当厚さ約 2 cmを測る。外区内縁は珠文をめぐらす。内区は複弁の蓮華文である。瓦質で若干砂粒を含む精緻な土を用いている。

軒丸瓦Ｅ類（図 30、５）：内区の複弁蓮華文のみ残存。瓦当径、中房径、周縁等は不明。瓦当厚約 2 cmを測る。中房は雄芯をめぐらし、蓮子は不明。瓦質で水簸した精緻な土を用いている。

軒丸瓦Ｆ類（図 30、６）：瓦当径、中房径不明。周縁は直立し、外縁幅約 1 cm、高さ約 1 cmを測る。外区内縁の珠文はない。蓮子の数は不明だが、15 ～ 16 ではないかと考えられる。内区は複弁の蓮華文で、間弁はない。蓮華文の形状はＥ類に類似する。瓦質で水簸した精緻な土を用いている。

軒丸瓦Ｇ類（図 30、７）：瓦当径約 15 cmを測る。周縁は直立し、外縁幅約 1.5 cm、高さ 1.5 cmである。外区内縁幅 1 cmで文様はなし。中房は径 4.8 cmを測る。蓮子は 5 個である。瓦当厚さ 3.5 cmを測る。内区は単弁 8 葉の蓮華文である。瓦質で若干砂粒を含む土を用いている。

軒丸瓦Ｈ類（図 30、８）：瓦当径は不明。周縁は直立し、外縁幅約 0.5 cm、高さ 1.2 cmである。中房は径 6.2 cmを測る。雄芯をめぐらせ、蓮子は 9 個である。内区は単弁の蓮華文でＧ類に類似

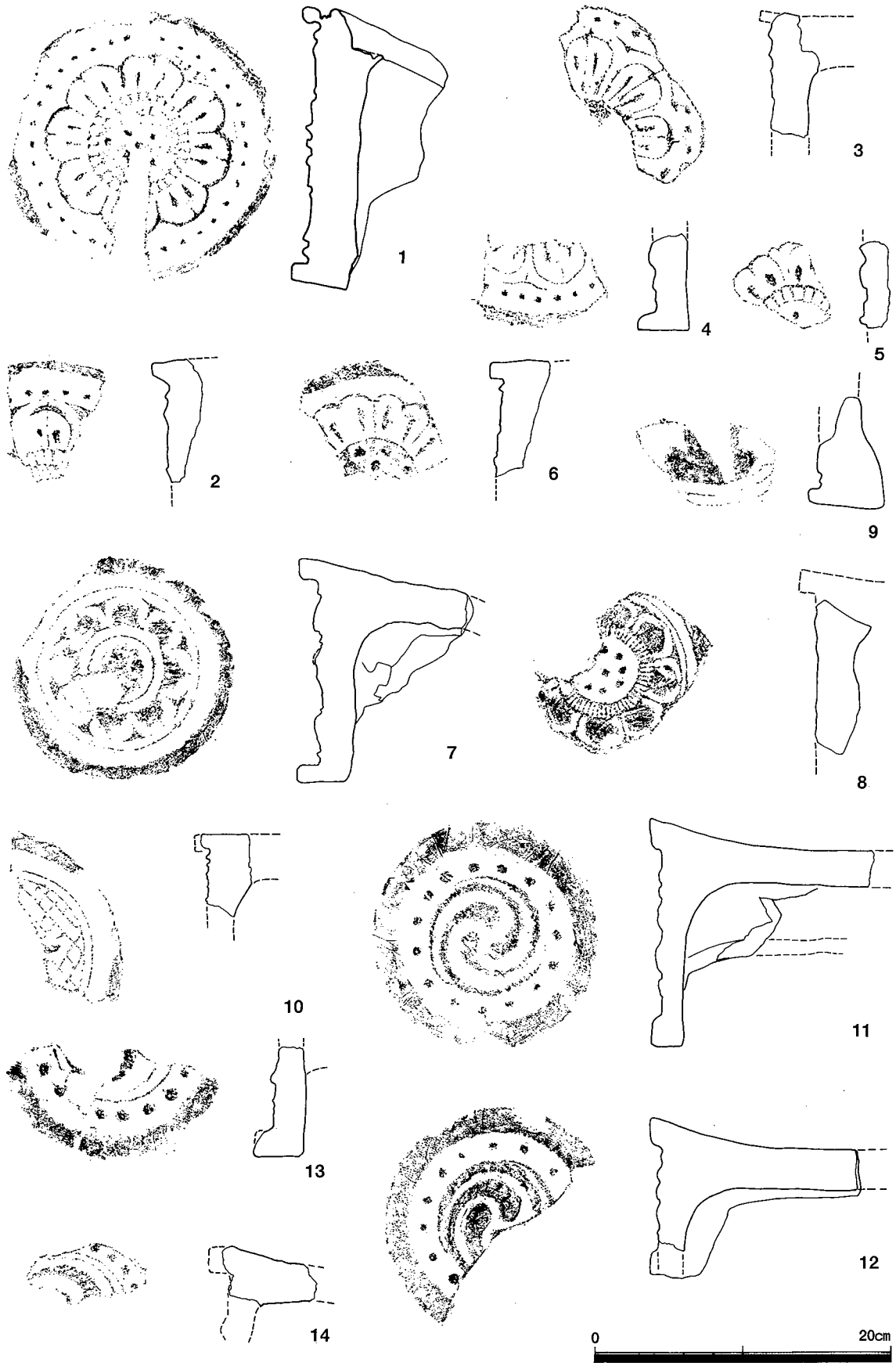


図 30　軒丸瓦（2・11・12：SD-3、1・3・7・8・13：SD-4、
6・9・14：SD-5、4・5：側溝、10：包含層第3層）

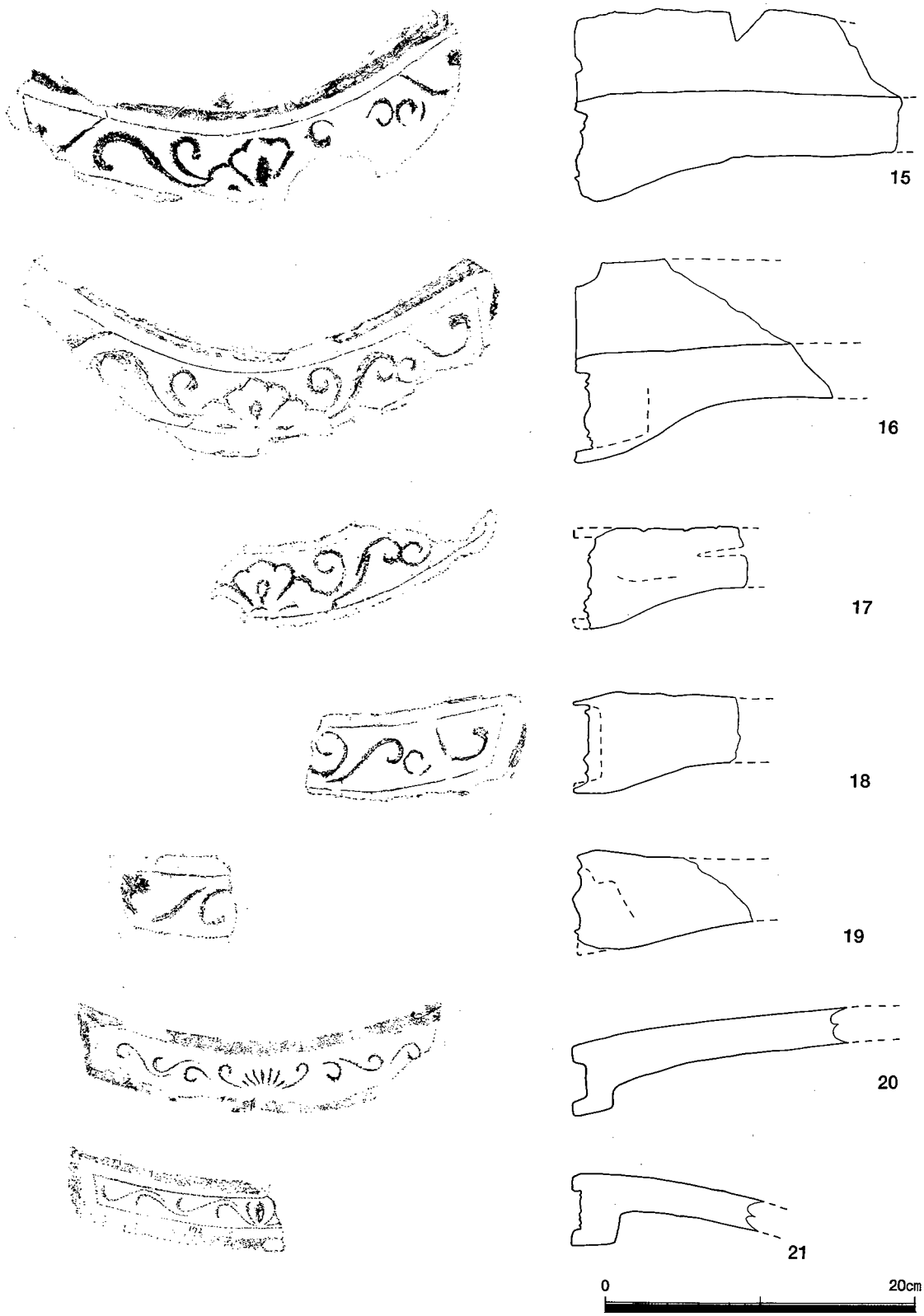


図 31　軒平瓦（17：SD-3、15･16･18･19･20：SD-4、21：SD-5）

するが、作り方は雑な感じである。焼きがあまく、土師質だが水簸した精緻な土を用いている。

軒丸瓦Ⅰ類（図 30、9）：格子文に仏像？を描く。周縁は直立し、外縁幅約 1 cm、高さ 0.8 cm を測る。瓦当径は不明、瓦当厚さ 4 cmを測る。瓦質で若干砂粒を含む土を用いている。

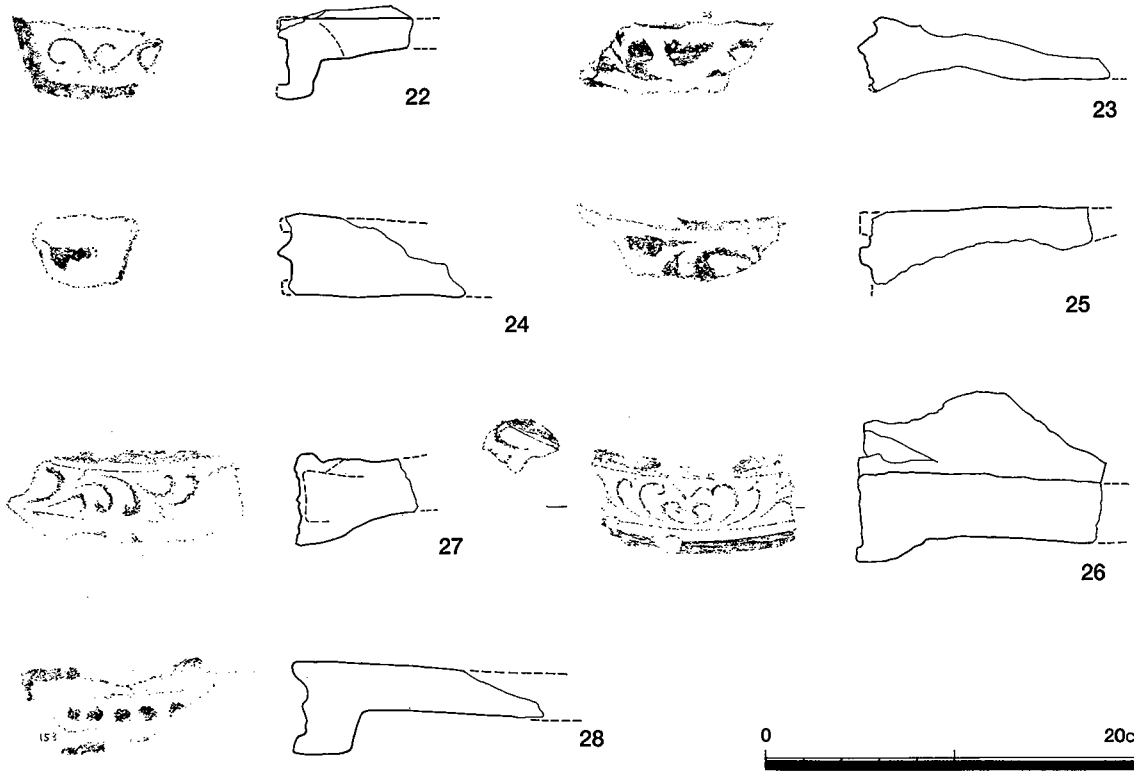


図 32　軒平瓦（22･27：SD-3、23･25･26･28：SD-4、24：側溝）

軒丸瓦Ｊ類（図 30、10）：宝塔文瓦である。近藤康司氏の分類によればⅡｂ類である。周縁は直立し、外縁幅約 1 cm、高さは不明である。瓦当径は不明、瓦当厚さ 2.5 cmを測る。瓦質で水簸した精緻な土を用いている。

軒丸瓦Ｋ類～Ｎ類は巴文の瓦である。

軒丸瓦Ｋ類（図 30、11）：巴頭の端部が丸く収まるタイプである。尾は巴胴部に重なる。瓦当径 15.5 cm、 周縁は直立し、外縁幅約 1.5 cm、高さ 0.8 cmを測る。珠文は 15 個である。瓦質で砂粒の多い土を用いる。

軒丸瓦Ｌ類（図 30、12）：巴頭の端部が四角くなるタイプである。尾は巴胴部に重なる。瓦当径 16 cm、 周縁は直立し、外縁幅約 1.6 cm、高さ 0.6 cmを測る。珠文は 15 ～ 16 個である。瓦質で若干砂粒の混じる土を用いている。

軒丸瓦Ｍ類（図 30、13）：巴頭の端部が丸く収まるが、尾は巴胴部とは重ならない。瓦当径は不明、 周縁は直立し、外縁幅約 2 cm、高さ 0.8 cmを測る。珠文はＫ・Ｌ類と比べ大きく、数も少ないようである。瓦質で若干砂粒の混じる土を用いている。

軒丸瓦Ｎ類（図 30、14）：巴文と珠文の間に界線がめぐるタイプ。瓦当径、周縁の形態等は不明。珠文はＫ～Ｍ類に比べ小さく、数が多いようである。瓦質で砂粒が多い土を用いる。

軒平瓦Ａ類（図 31、15、16）：均整唐草文。瓦当部長さ約 35 cm、幅約 6.5 cm、外縁高約 1 cm、界線幅約 4 cm、外縁と界線の間は約 0.3 ～ 0.5 cm、瓦当厚 3.5 cm、上端面幅約 2 cmを測る。外縁幅約 1 cmのＡ１類と 0.2 ～ 0.3 cmと薄いＡ２類がある。凹面両端に 2 cm前後の面取りを施す。凹面には布目が残る。顎の形状は曲線を呈す。ほとんどが瓦質で、胎土は水簸された精緻な土を用

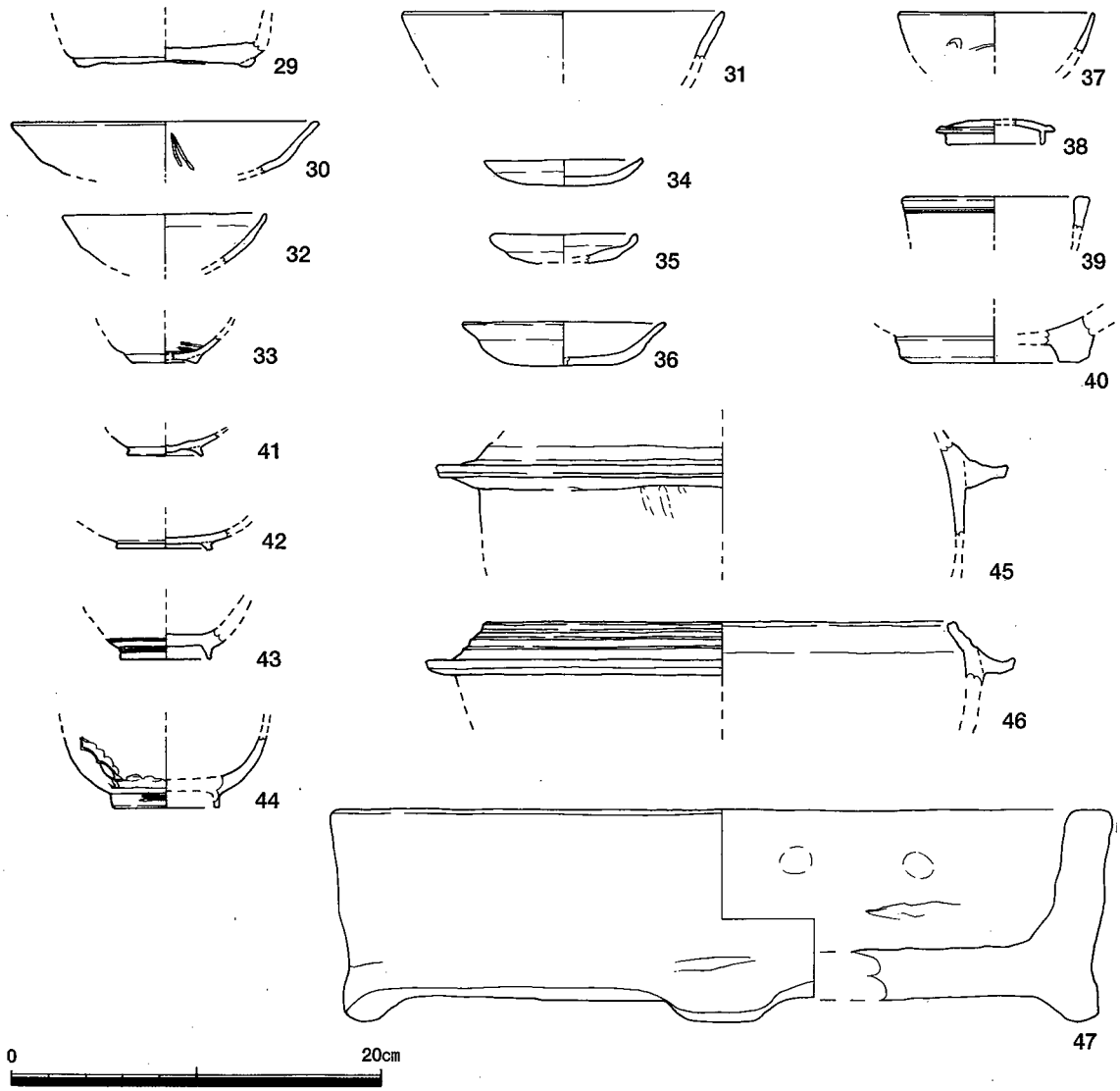


図 33　SD-3（31～40）、SD-4（42～47）、SD-5（29）、SK-3（30）出土遺物

いている。なお、A１類には須恵質のものも存在する。

軒平瓦B類（図 31、17）：均整唐草文。瓦当部長不明、幅約 5.7 cm、外縁断面三角形を呈し、外縁高約 0.5 cmである。界線幅約 4 cm、外縁と界線の間はほとんどない。瓦当厚約 4 cm、上端面幅約 2 cmを測る。顎の形状は曲線を呈す。ほとんどが瓦質で、胎土は若干砂礫の混じる精緻な土を用いている。凹面両端に 2 cm前後の面取りを施す。凹面には布目が残る。A類と類似しているが文様構成が若干異なる。

軒平瓦C類（図 31、18）：均整唐草文。瓦当部長さ約 25 cm、幅約 4.2 cm、外縁幅約 1 cm、外縁高約 1.2 cm、界線なし、瓦当厚約 2.5 cm、上端面、凹面両端に面取りを施さない。顎の形状は曲線を呈す。ほとんどが瓦質で、胎土は水樋された精緻な土を用いている。須恵質のものも存在する。

軒平瓦D類（図 31、19）：均整唐草文。瓦当部長さ約 25 cm、幅約 4.5 cm、外縁幅約 1 cm、外縁高約 0.6 cmである。界線幅約 2 cm、外縁と界線の間は 0.2 ～ 0.3 cm、瓦当厚約 2.5 cm、上端面幅

約 0.9 cmを測る。顎の形状は曲線を呈す。ほとんどが瓦質で、胎土は若干砂礫の混じる精緻な土を用いている。凹面両端に 1 cm前後の面取りを施す。凹面は丁寧なナデを施し布目を消している。須恵質のものも存在する。

軒平瓦Ｅ類（図 31、20）：均整唐草文。瓦当部長さ不明、幅約 4 cm、外縁幅約 0.8 cm、外縁高約 0.5 cmである。界線はない。瓦当厚約 4 cm、顎の形状は段顎である。上端面不明、凹面両端の面取りを施さない。凹面は丁寧なナデを施し布目を消している。瓦質で、胎土は若干砂礫の混じる精緻な土を用いている。

軒平瓦Ｆ類（図 31・32、21、22）：均整唐草文。肉厚で太い唐草文である。瓦当部長さ不明、幅約 4 cm、外縁断面三角形を呈し、外縁高約 0.4 cmを測る。界線はなし、瓦当厚約 4 cm、顎は直線的である。土師質で、焼きはあまく、胎土は精緻でない。上端面は約 1 cm。凹面は布目が残っている。

軒平瓦Ｇ類（図 32、23）：均整唐草文。肉厚で太い唐草文。瓦当部長さ、幅不明、外縁幅 0.7 cm、外縁高約 0.6 cmを測る。界線はなし、瓦当厚不明、顎は直線的である。土師質で、焼きはあまく、胎土は精緻でない。上端面は約 1 cm。凹面は布目が残っている。Ｆ類に類似するが文様構成が若干異なる。

軒平瓦Ｈ類（図 33、24）：均整唐草文。瓦当部長さ不明、幅約 4.7 cm、外縁幅約 1 cm、外縁高約 0.3 ～ 0.4 cmである。界線幅約 2.9 cm、外縁と界線の間は 0.2 ～ 0.3 cm、瓦当厚約 3.2 cm、顎は直線的である。凹面両端に 1 cm前後の面取りを施す。凹面には布目が残る。土師質で焼きはあまく、胎土は精緻でない。

軒平瓦Ｉ類（図 33、25）：均整唐草文。瓦当部長さ不明、幅約 5 cm、外縁幅約 1 cm、外縁高はほとんどない。界線幅約 2.8 cm、外縁と界線の間は 0.2 ～ 0.3 cm、瓦当厚約 4.2 cm、顎の形状は曲線を呈す。凹面には布目が残る。土師質で焼きはあまく、胎土は精緻でない。Ｈ類に類似するが文様構成が異なる。

軒平瓦Ｊ類（図 33、26）：連珠文。瓦当部幅約 5 cm、外縁幅約 1 cm、外縁高 0.5 cm、界線幅約 1.5 cmを測る。顎の形状は段顎である。瓦質で若干砂礫の混じる土を用いている。

その他の遺物（図 33）

27 はＳＤ－５出土の須恵器である。高台径 9.4 cmを測る。28 はＳＫ－３出土の瓦器椀である。口径 16.5 cmに復元でき、残存高 2.8 cmである。29 ～ 38 はＳＤ－３出土遺物である。29 は青磁碗である。口径 17.2 cmに復元で、残存高 2.5 cmである。30、31 は瓦器椀である。30 は口径 11.2 cmに復元でき、残存高 2.7 cmである。31 は高台径 3.4 cmに復元でき、残存高 1.5 cmである。32 ～ 34 は瓦器皿である。32 は口径 8.6 cm、高さ 1.4 cmを測る。33 は口径 7.8 cmに復元でき、残存高 1.7 cmである。34 は口径 11 cmに復元でき、残存高 2.3 cmである。35 は肥前系磁器碗である。口径 10.6 cmに復元でき、残存高 2 cmである。36 ～ 38 は和泉音羽焼である。36 は径 6.5 cm、残存高 1 cm、37 は口径 10.2 cm、残存高 1.7 cm、38 高台径 9.4 cm、残存高 2.5 cmである。39 ～ 45 はＳＤ－４出土遺物である。39、40 は瓦器椀である。それぞれ高台径 2 cmと 5.4 cm、残存高 1.3 cmと 1.1 cmで

ある。41、42 は肥前系磁器碗である。それぞれ高台径 5 cmと 5.8 cm、残存高 1.8 cmと 3.8 cmを測る。43、44 は瓦質羽釜である。43 は鍔径 30.6 cm、残存高 4.9 cmである。44 は口径 25 cm、鍔径 31.6 cm、残存高 3.5 cmに復元できる。45 は瓦質火鉢である。3 足で、口径 43 cm、残存高 11.5 cm である。

3、まとめ

今回の調査で最も大きな成果は、多量に出土した瓦類であろう。調査地には前述したように、近木堂、近木ド、コギト等の字名が残っている。今回出土の瓦類は、年代や出土数の点からも平安期熊野詣に際して休憩所となった近木堂に関するものと考えて間違いはないだろう。しかし、遺構については近世の遺物を含み、当該期のものではない。これらの遺構については、全掘していないので断定できないが、埋土の状況から粘土採掘に伴うものであると考えられる。しかし下層に細砂～中砂層が堆積しており、自然流路の可能性もある。いずれにしても近世の段階で、粘土採掘等の理由で掘り返した土を埋めたものであると考えられる。埋土については、遺物の状態が摩滅等も少なく、また多量の瓦とともに土を遠くから運んだとは考えにくく、近くから運ばれてきたものであろう。いずれにしても今回調査では近木堂を発見することはできなかったが、近辺に文献や字名に残る近木堂が存在することが証明できた。なお、出土遺物の中には、瓦と共に多量の焼土塊が含まれており、瓦の数量や種類の多さからも灰原中の遺物であった可能性が高い。

遺物については、文様の種類から軒丸瓦Ａ～Ｎ類、軒平瓦Ａ～Ｊ類に細分したが、その中でも文様の類似などから、大きく何系統かに分類できる。軒丸瓦は蓮華文瓦がＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ系統、Ｅ・Ｆ系統、Ｇ・Ｈ系統の３系統に分類できる。Ｉ・Ｊはそれぞれ一つの系統である。巴文は数も少なく、時代も平安後期から中世に至るものがあり、今の段階では系統別に分類することはできない。軒平はＡ・Ｂ系統、Ｃ・Ｄ・Ｅ系統、Ｈ・Ｉ系統、Ｊ系統の５系統である。Ａ・Ｂ系統、Ｃ・Ｄ・Ｅ系統には須恵質のものも存在する。

セット関係については軒丸瓦Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ系統と軒平瓦Ａ・Ｂ系統がセットになるものと考えられるがその他は不明である。

それぞれの系統については文様の構成が全く異なる版型を用いているということであり、使用している土も異なっている。またそれぞれ、軒丸瓦はＡ→Ｂ→Ｃ→Ｄ、Ｅ→Ｆ、Ｇ→Ｈ、軒平瓦はＡ→Ｂ、Ｈ→Ｉと文様の変化が追えるものがある。これらの系統は近木堂建立に伴い集められた工人の系統を表すものではないかと考えられる。すなわちいくつかの工人が異なる版型と土を用いて瓦を焼いたか、いくつかの瓦窯から寄せ集められたものではないだろうか。

瓦については、まだまだ考察が必要であり、すぐに結論できるものではない。大半を占める丸・平瓦についてはまとめられなかったし、他の寺院や瓦窯との比較検討もおこなっていない。また軒丸瓦と軒平瓦のセットも充分にまとまっていない。これらは筆者の勉強不足であり、機会があれば、もう少し詳しい分類、分析をしたいと考えている。

Ⅳ　窪田ハマデ遺跡の調査

1、位置と環境（図 34）

窪田ハマデ遺跡は近木川と見出川にはさまれた台地状に位置し、今回の調査で新たに包蔵地に登録した遺跡である。周辺の遺跡は、南側に国指定史跡の前方後円墳、地蔵堂丸山古墳と地蔵堂古墳群、平安時代の寺院跡である地蔵堂廃寺、それらを包括する地蔵堂遺跡等が存在する。西側には平安時代の瓦が見つかっている窪田廃寺や、中世の集落が存在する窪田遺跡、澱池遺跡等が存在する。東側には古墳時代の散布地、堤遺跡や、中世の集落跡、堤三宅遺跡が存在する。また、調査区の中央には貝塚市脇浜と和歌山県粉河町を結ぶ粉河街道が通っている。調査地は遺跡マーク地内のほぼ中央に位置し、中世もしくはそれ以前の遺構が存在する可能性があった。

2、調査結果（図 35、36）

調査は分譲住宅建設による宅地造成に伴うものである。したがって、遺構が破壊される道路部分と擁壁部分に調査区を設定し、調査を行った。調査地は旧粉河街道で分断されているため、調査区を 3 区に分けた。北側の道路部分を第 1 区、北側擁壁部分を第 2 区、南側道路部分を第 3 区とした。調査区には国家座標に基づいて 5 × 5 mの区画を設定し、北から 1 ～ 14、西からA～Xの番号を与えた。

調査区の基本層序は 6 層である。上から順に第 1 層；盛土（層厚約 0.2 ～ 0.4 m）、第 2 層；暗灰色土　N3/0（現代耕土、層厚約 0.15 ～ 0.3 m）、第 3 層；黄灰色砂礫混土　2.5Y5/1（層厚約

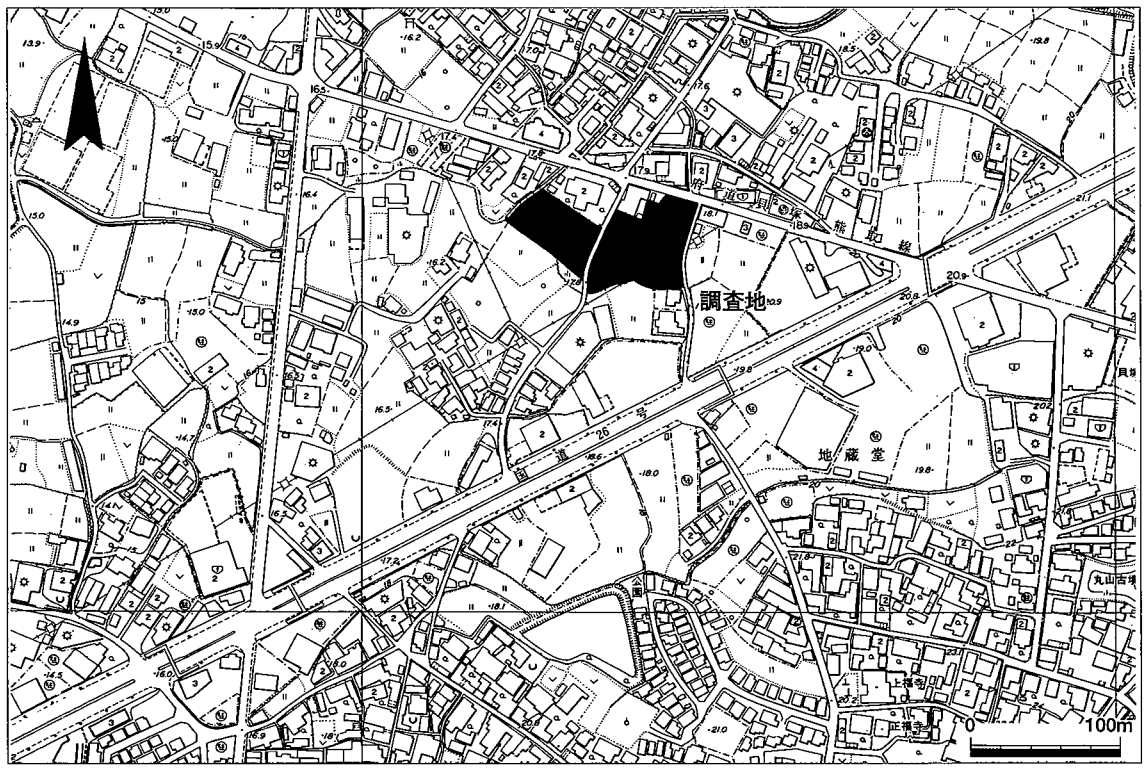


図 34　窪田ハマデ遺跡調査地位置図

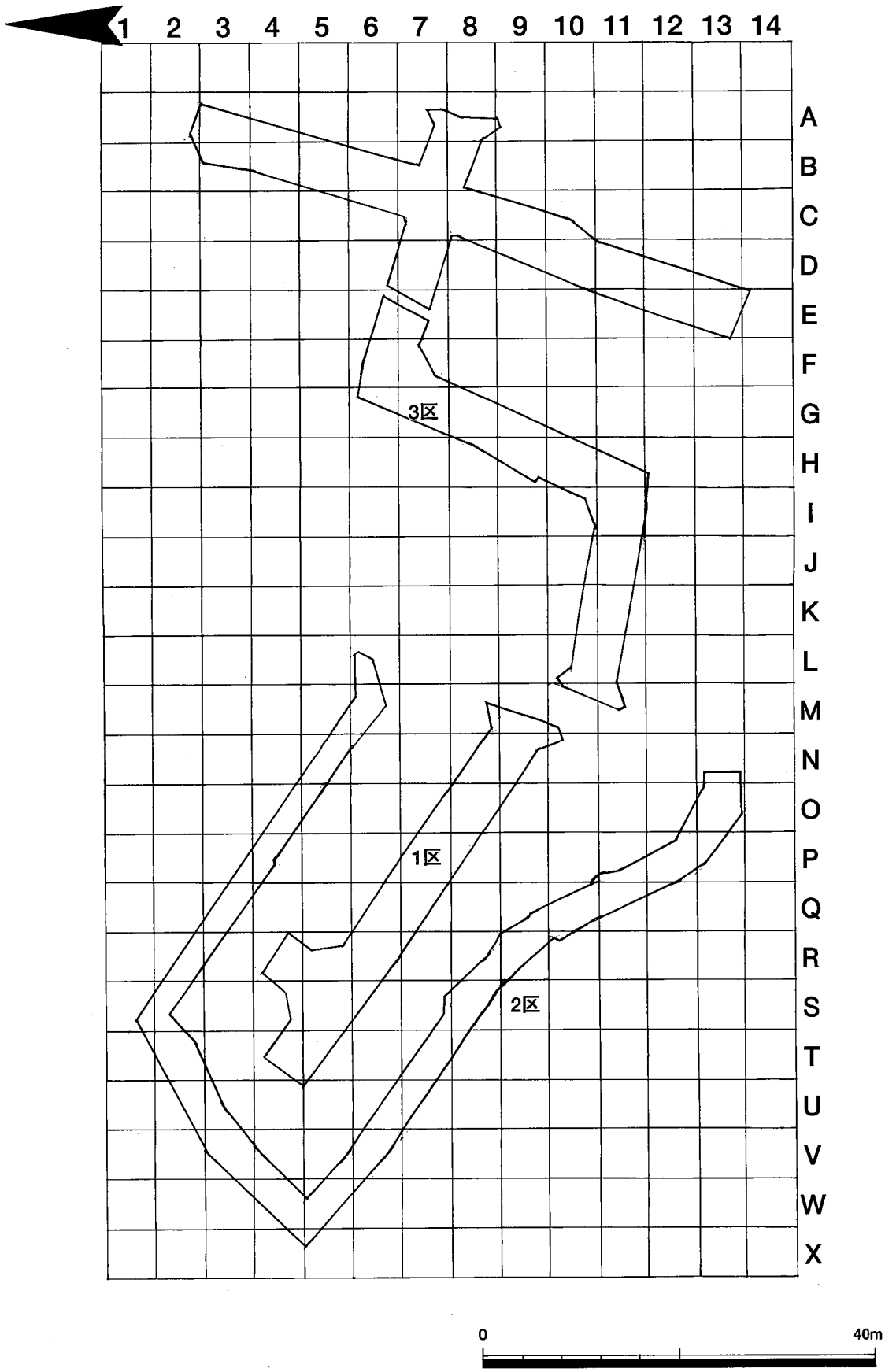

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X
3区
1区
2区
0
40m

図 35　調査区地区割図

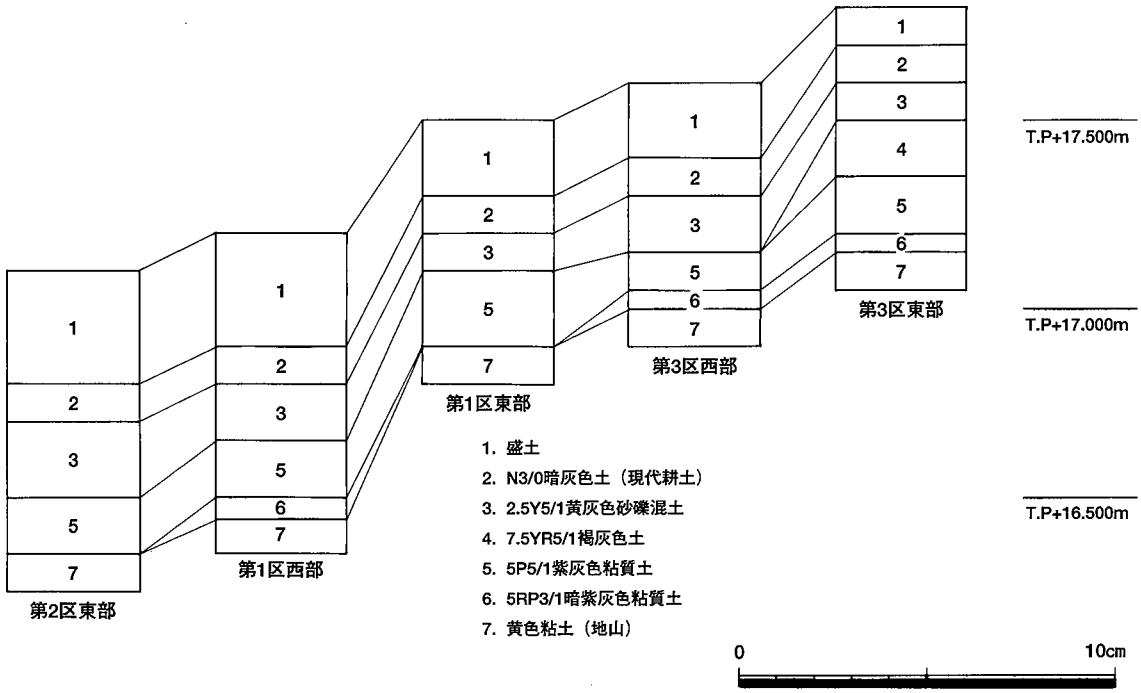


図 36　調査区土層柱状図

0.2 m)、第 4 層；褐灰色土　7.5YR5/1（層厚約 0.1 ～ 0.2 m)、第 5 層；紫灰色粘質土　5P5/1（層厚 0.1 ～ 0.2 m)、第 6 層；暗紫灰色粘質土　5P3/1（層厚約 0.05 ～ 0.1 m）である。このうち第 1 ～ 5 層までは調査区に普遍的に存在するが、第 6 層は薄く、部分的にしか存在しない。おそらく第 5 層堆積時に削平を受けたものと考えられる。遺物は第 3 層；瓦器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、瓦、青磁、白磁、陶器、第 4 層；瓦器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、瓦、青磁、白磁、サヌカイト、第 5 層；瓦器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、瓦、青磁、白磁、サヌカイト、焼土等が出土している。各々の時期は第 3 層が 16 世紀～ 17 世紀、第 4 、5 層が 13 ～ 15 世紀、第 6 層が 13 世紀以前と考えられる。

調査は第 4 層上面と、第 5 層上面、地山上面で行った。第 4 層上面では井戸 1 基、粘土採掘坑 3 基、鋤溝群、第 5 層上面では鋤溝群、地山上面では溝 14 条、鋤溝群を検出した。

検出遺構（図 37、図版 16 ～ 18）

ＳＫ－ 101・102・103

本遺構は第 2 区Ｒ～Ｖ－ 2 ～ 4 区で検出した粘土採掘坑である。規模はＳＫ－ 101 が検出長約 14 m、検出幅約 2 m、ＳＫ－ 102 が検出長約 4 m、検出幅約 1.5 m、ＳＫ－ 103 が検出長約 4 m、検出幅約 1.5 mを測る。深さ 0.3 ～ 0.5 mである。

断面の形状は不整形で、埋土は地山黄色粘土ブロックを含む灰色砂質土である。遺物は陶磁器、土師質土器、瓦器、土師器、須恵器、瓦等が出土した。

第 4 層上面鋤溝群

本遺構群は調査区全面において検出した鋤溝群である。第 1 ・ 2 区では南北を機軸に西に約 45° 振った方向の溝を検出した。第 3 区では南北を基軸に東に約 30° 振った方向の溝を検出し

た。いずれも断面半円形を呈し、幅 0.1 ～ 0.3 m、深さ約 0.03 ～ 0.05 mを測る浅い溝である。

第５層上面鋤溝群

本遺構群は調査区全面において検出した鋤溝群である。第１・２区では南北を基軸に西に約 40° 振った方向の溝を検出した。第３区では南北を機軸に東に約 25 ～ 30° 振った方向の溝を検出した。いずれも断面半円形を呈し、幅 0.1 ～ 0.3 m、深さ約 0.03 ～ 0.05 mを測る浅い溝である。

地山上面検出遺構

ＳＤ－ 301

本遺構は第３区Ｃ・Ｄ・Ｇ・Ｈ－９区で検出した溝である。幅 0.65 ～ 0.8 m、検出長は分断されているが約 25 mを測る。深さ 0.2 ～ 0.3 mで、西から東へ流れる。断面の形状はＵ字形で、埋土は３層で、上から暗紫灰色粘質シルト　5P3/1、紫灰色砂質シルト　5P5/1、紫灰色細砂～砂礫 5P5/1である。

ＳＤ－ 303・304

本遺構はＤ・Ｅ－ 11 ～ 13 区で検出した溝である。幅 0.1 ～ 0.25 m、検出長はＳＤ－ 303 が約 3 m、ＳＤ－ 304 は約７mを測る。深さ 0.05 ～ 0.08 mで、北から南へゆるやかに流れる。断面の形状はＵ字形で、埋土は２層で、上層が地山ブロック混暗紫灰色粘質土　5RP3/1、下層が暗紫灰色粘質土　5RP3/1である。両溝の形状、埋土は類似しており、方向も一定の間隔をおいて一致する。遺構の性格として道路側溝の可能性がある。

ＳＤ－ 307

本遺構は第３区Ｂ・Ｃ－６・７区で検出した溝である。幅 0.2 ～ 1.1 mで東側が幅が広く、西に向かって細くなる。検出長約４mを測る。深さ 0.15 ～ 0.2 mで東から西へ流れる。断面の形状はＵ字形で、埋土は暗紫灰色細砂含シルト　5RP3/1である。

ＳＤ－ 309

本遺構は第１区Ｒ～Ｔ－４～６区で検出した溝である。幅 0.5 ～ 0.6 m、検出長 14 mを測る。深さ 1.3 ～ 1.5 mで、南東から北西へ流れる。断面の形状はＵ字形である。埋土は３層で、暗紫灰色細砂混シルト　5P4/1、暗紫灰色粘質シルト　5P4/1、紫灰色極細砂　5P5/1である。遺物は須恵器、土師器が出土した。

ＳＤ－ 310

本遺構は第２区Ｑ－ 10・11 区で検出した溝である。幅 0.5 ～ 0.7 m、検出長約５mを測る。深さは約 0.25 ～ 0.3 mで、南から北へ流れる。断面の形状はＵ字形である。埋土は３層で、暗紫灰色細砂混粘質シルト　5P4/1、暗紫灰色粘質シルト　5P4/1、暗青灰色細砂混シルト　5PB4/1である。遺物は瓦器、須恵器が出土した。

ＳＤ－ 312

本遺構は第２区Ｖ－５・６区で検出した溝である。幅 1.8 ～ 1.9 m、検出長約５mを測る。2 段掘りをしており、最も深い部分で深さ 0.5 ～ 0.55 mである。南から北へ流れる。埋土は紫灰色及び青灰色極細砂～シルト層の上に紫灰色および青灰色粘質土や粘質シルトが堆積する。遺物は

須恵器が出土した。

ＳＤ－313

本遺構は第２区Ｖ－４区で検出した溝である。幅 0.5 ～ 0.7 m、検出長約 1.6 mを測る。深さ約 0.2 mである。断面の形状はＵ字形である。埋土は３層で、暗紫灰色細砂混シルト　5P4/1、暗紫灰色粘質シルト　5P4/1、紫灰色極細砂　5P5/1である。本遺構とＳＤ－ 309 は規模、埋土の状況等が類似している。方向もほぼ同じであるので、両遺構は何らかの関係があったと考えられる。遺物は土師器、須恵器が出土した。

ＳＤ－314

本遺構はＴ－４区で検出した溝である。第１区の北西隅で、断面でわずかに確認できる程度であったため、幅、長さ、深さ等は不明と言わざるを得ない。埋土は暗紫灰色粘質シルト　5P4/1 の堆積を確認した。

ＳＥ－101

本遺構は第１区Ｎ－ 19 区で検出した井戸である。調査区外に広がり、約半分を検出した。径約 2.6 mを測り、円形の井戸に復元できる。深さ約 1.3 m掘り下げたところで、湧水層に達した。これ以上は危険であると判断したため、掘削を断念した。したがって深さは不明である。埋土は黄橙色粘質土　10YR7/8、紫灰色土　5RP5/1の下に灰色粘土　N4/1が堆積する。遺物は陶磁器、瓦器、瓦が出土した。

出土遺物

本調査区からはコンテナ 20 箱分の遺物が出土した。そのほとんどが破片である。遺物は中世、近世の瓦器、土師器、陶磁器類がほとんどである。中世の輸入陶磁器である青磁、白磁類も出土している。また、若干ではあるが古墳～奈良時代の須恵器やサヌカイト片等も出土している。今回はその中で図示し得た主なものについて紹介する。

包含層第３層出土遺物（図 38）

１は土師器小皿である。口径 6.6 cm、高さ 1.1 cmを測る。２は瓦器皿である。口径 8.7 cm、高さ 1.6 cmを測る。内面見込みに円形のミガキを施す。３は青磁である。口径 13.4 cm、残存高 3.5 cmである。４は土師質蛸壺の取手部分である。残存高 3.5 cmである。蛸壺は他に第５層より須恵質のものも出土している。

包含層第４層出土遺物（図 38）

５は土師器小皿である。口径 8 cm、高さ 1.6 cmに復元できる。６は瓦器椀である。口径 12.4 cm、残存高 2.4 cmである。高台はなく、瓦器椀の最終段階に位置する資料である。７、８は白磁碗である。７は口縁部で、玉縁状を呈する。口径 18.4 cm、残存高 2.5 cmである。８は底部である。高台径 6.5 cm、残存高 2.7 cmである。９は青磁碗である。口径 15.6 cm、残存高 3.3 cmを測る。

包含層第５層出土遺物（図 38）

10 は瓦器皿である。口径 9.8 cm、高さ 2.1 cmである。11 は土師器皿である。口径 16.8 cm、残存高 1.7 cmである。

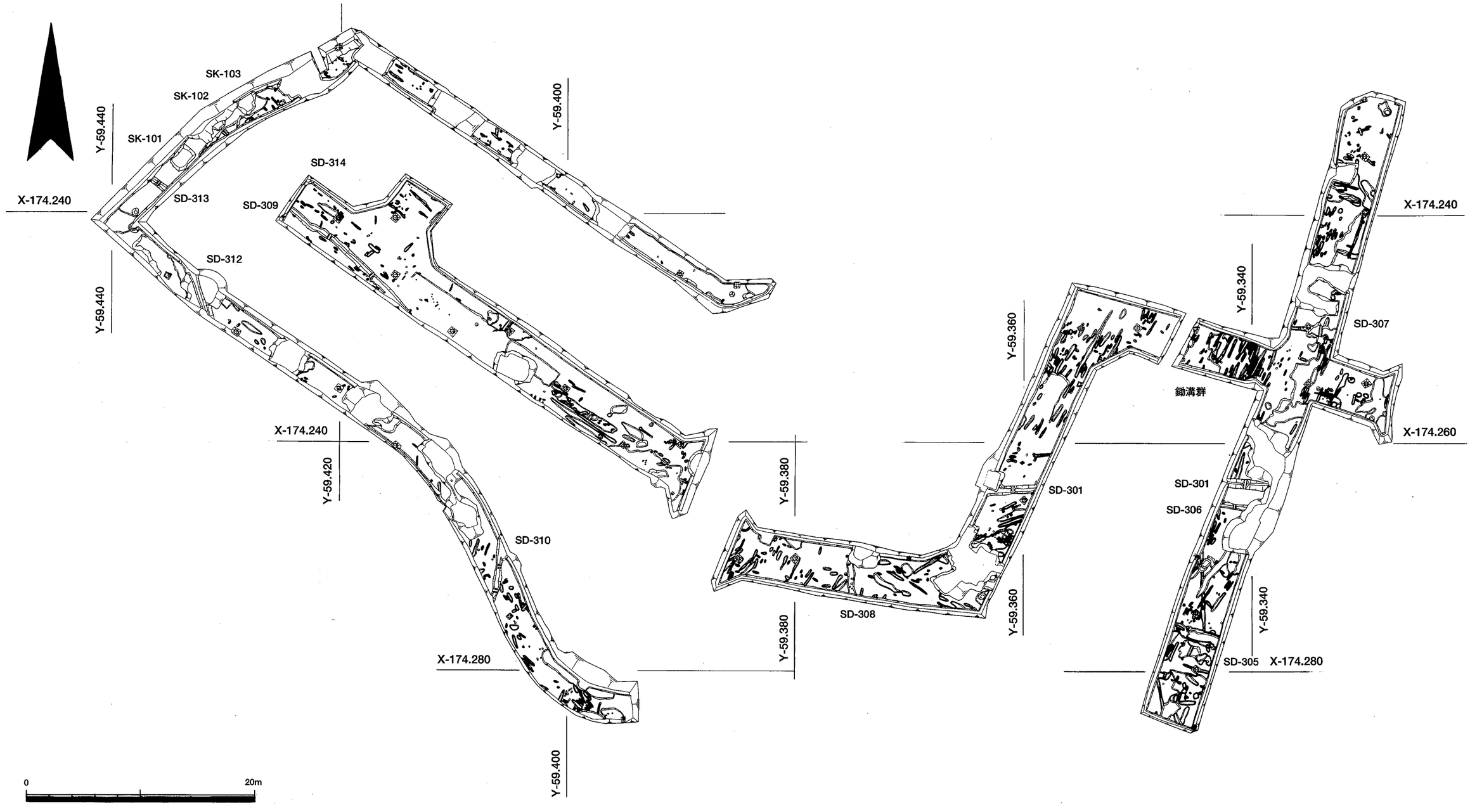


図 37　地山上面遺構配置図

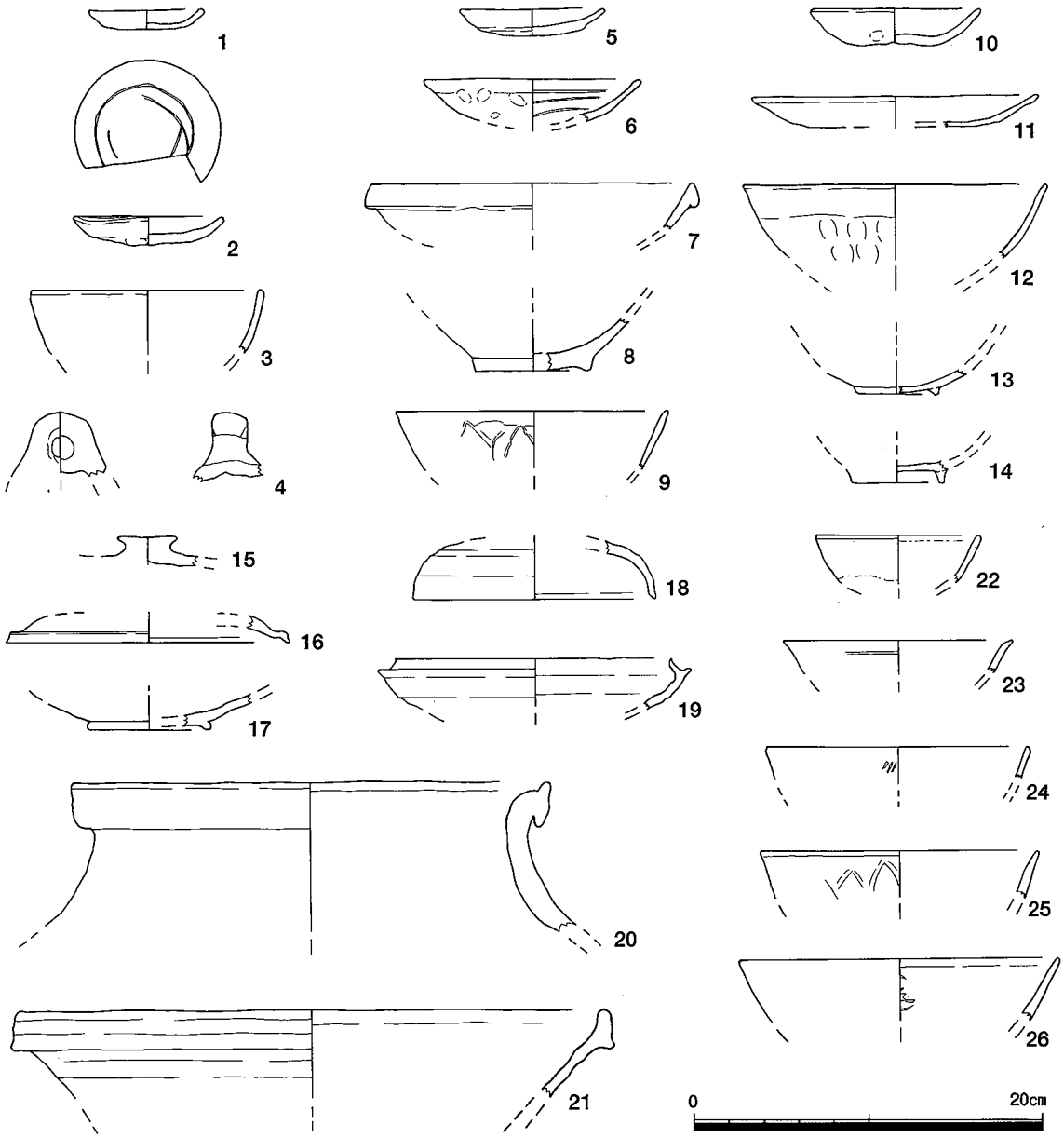


図 38　第 3 層（1 ～ 4）、第 4 層（5 ～ 9）、第 5 層（10～26）出土遺物

12 ～ 14 は瓦器椀である。12 は口縁部で、口径 17.4 cm、残存高 4.2 cmである。13、14 は高台部である。13 は高台径 4.8 cm、残存高 1.2 cm、14 は高台径 5.4 cm、残存高 0.8 cmである。

15 ～ 21 は須恵器である。15 ～ 17 は杯蓋である。15 はつまみである。径 3.5 cm、残存高 1.7 cmを測る。16 は径 16.2 cm、残存高 1.5 cmを測る。17 はつまみの付かないタイプで、径 13.8 cm、残存高 3.3 cmである。18、19 は杯身である。18 は高台の付くタイプで、高台径 7 cm、残存高 1.5 cmを測る。19 は返りの付くタイプで径 15.8 cm、高さ 2.9 cmである。20 は常滑産の甕口縁部である。口径 27.4 cm、残存高 8.2 cmである。21 は東播系鉢口縁部である。口径 33.4 cm、残存高 5 cmである。

22 ～ 26 は輸入磁器類である。22 は漳州窯系青花である。口径 9.5 cm、残存高 2.7 cmである。23 ～ 26 は青磁碗である。23 は端反りの口縁部で、口径 13 cm、残存高 1.9 cmである。24 は口径15.2 cm、残存高 1.7 cmである。25 は口径 16 cm、残存高 2.5 cmである。蓮華文を印刻している。26 は口径

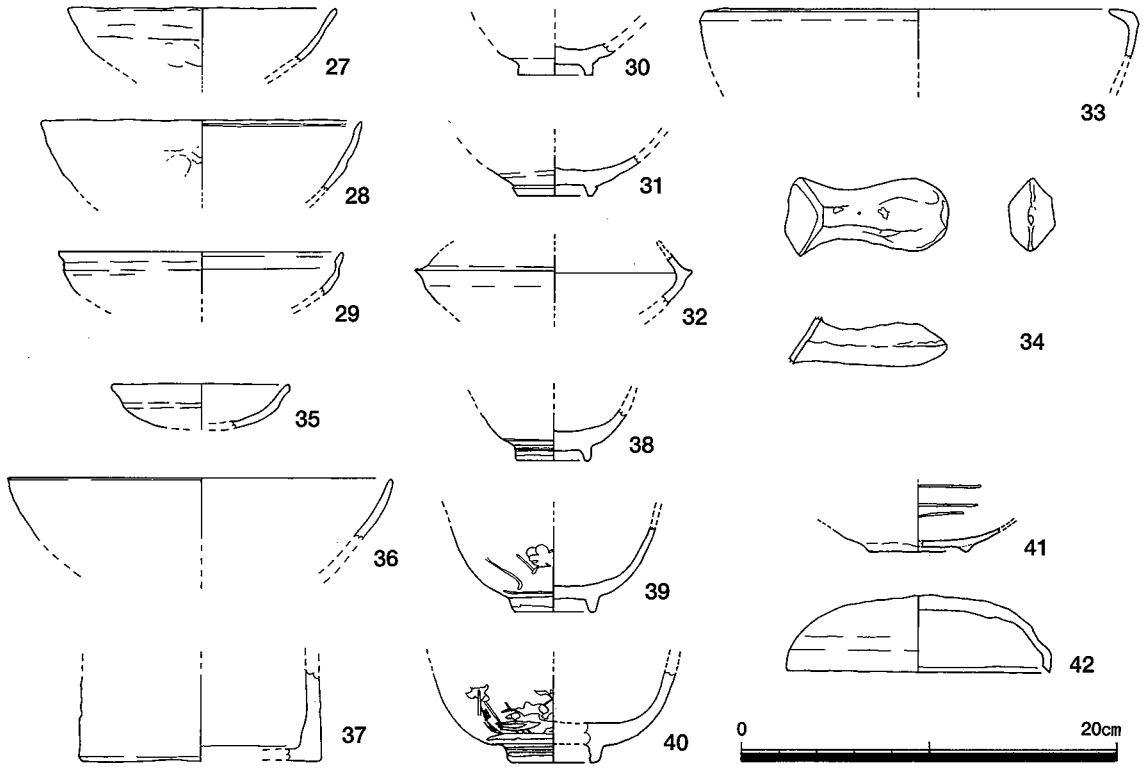


図 39　第 4 層上面鋤溝群（27～29）、ＳＫ-101～103（30～34）、
ＳＥ-101（35～40）、地山上面鋤溝群（41、42）

18.4 cm、残存高 3.5 cmである。

第 4 層上面鋤溝群（図 39）

27･28 は瓦器椀である。27 は口径 14.4 cmに復元でき、残存高 2.8 cmである。ミガキの痕跡が残っているが詳細は不明。28 は口径 17 cmに復元でき、残存高 3.8 cmである。調整は摩滅により不明。29 は須恵器杯である。口径 15 cmに復元でき、残存高 2.3 cmである。

ＳＫ－101・102・103

30 は唐津焼碗である。高台径 4 cmに復元でき、残存高 1.7 cmである。見込みには蛇の目釉ハギを施す。31 は肥前系磁器碗である。高台径 4.2 cmに復元でき、残存高 2.1 cmである。高台の形は三角形で、見込みには蛇の目釉ハギを施す。32 は須恵器杯である。かえり部分径 14.8 cmに復元でき、残存高 2.7 cmである。33、34 は和泉音羽焼である。33 は片口口縁部である。口径 20.6 cm、残存高 1.5 cmに復元できる。34 は行平取手である。長さ 8.5 cm、最大幅 4.2 cm、厚さ 2.4 cmを測る。鉄釉掛けで、胎土は黄色味を帯びたやや軟質のものである。内面には灰釉を施す。

ＳＥ－101

35 は瓦器皿である。口径 9.5 cm、残存高 2 cmに復元できる。摩滅により調整は不明。36 は唐津焼碗である。口径 20.6 cm、残存高 3.3 cmに復元できる。37 は備前焼鉢である。底径 12.8 cm、残存高 4.8 cmを測る。38 ～ 40 は肥前系磁器である。38 は高台径 4 cm、残存高 2.8 cm、39 は高台径 10.9 cm、残存高 4.4 cm、40 は高台径 4.8 cm、残存高 5 cmにぞれぞれ復元できる。文様は 38 は不明、39、40 は

梅花文を施し、18 世紀後半のものと考えられる。39 の見込みには蛇の目釉ハギを施している。

地山上面鋤溝群

42 は瓦器椀である。高台径 5.4 cmに復元でき、残存高 1.7 cmである。高台は短く、断面三角形を呈す。見込みに平行ミガキを施している。

ＳＤ－ 313

43 は須恵器杯蓋である。口径 14.2 cm、高さ 4 cmを測る。焼成はやや不良で、胎土は赤褐色を呈している。

3、まとめ

今回の調査は道路、擁壁部分の細長いトレンチ調査であったため制約も多く、地区ごとに分断されるため全体の概要が見えにくい調査であった。その中で明らかにし得た事実について述べたいと思う。

遺構については、各調査面で多数の鋤溝を確認した。このことによって調査地では中世～近世にかけて耕作が続けられていたことが判明した。鋤溝の方向によって、当時の畝の状況を復元できるので若干の考察を試みる。

第 4 層上面と第 5 層上面で検出した鋤溝は、ほぼ同じ状況であった。鋤溝の方向は第 1 ・ 2 区と第 3 区との間で方向が異なり、両者の間に通っている粉河街道に平行または直交している。また、第 1 ・ 2 区と第 3 区との間にまたがる遺構は確認できない。

地山上面では、溝を数条検出したが、いずれも上面検出遺構とは方向を違えている。鋤溝の方向は、街道よりも溝を意識しているようで、各溝に平行または直交し、あるいは溝の両側で方向が違っていたりしている。以上のことから考えると、第 4 ・ 5 層上面では、耕作に際し、街道を意識していた様子が受けとられるが、地山上面では街道を意識していなかったものと考えられる。街道の成立については、近世になってから整備が進み現在の形になったとされる。しかし今回の調査で中世段階に何らかの道ができていた可能性が高くなった。

遺物については、細片ではあるが、瓦器、土師器などの日常雑器等とともに、輸入磁器類が出土している。いずれも周辺遺跡の状況と変化はなく、13 世紀以降耕作地の整備に伴って調査地にもちこまれたものと思われる。これらの日常雑器を使用していた人々の集落については、今のところ不明と言わざるを得ない。調査地の北側にある窪田廃寺・窪田遺跡では、中世の掘立柱建物を検出しているが、調査地と何らかの関わりを持つ可能性がある。なお窪田廃寺については、調査地で瓦の出土はあったものの、小破片になっているものが多く、存在を裏付けるような発見はできなかった。いずれにしても、本遺跡も含め周辺ではまだまだ調査数も多くなく、全体の状況を把握できるような段階ではないと思われる。本遺跡の発見を契機に、今後の調査によって周辺地域の歴史を解明していく必要があるだろう。

報告書抄録

ふりがな	かいづかしないいせきはっくつちょうさがいよう
書名	貝塚市内遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第56集
編著者	前川浩一、三浦　基、上野裕子
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒2597-8585　大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号
発行年月日	西暦2001年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
地蔵堂遺跡	大阪府 貝塚市 地蔵堂	27208	72	34度 25分	135度 21分	1993,6,16 1993,10,5	800	共同住宅
土生遺跡	大阪府 貝塚市 久保	27208	61	34度 27分	135度 22分	1996,7,2 1996,8,12	480	宅地造成
加治・神前・畠中遺跡	大阪府 貝塚市 畠中	27208	23	34度 26分	135度 21分	1993,8,17 1993,11,1	320	共同住宅
窪田ハマデ遺跡	大阪府 貝塚市 窪田	27208	109	34度 25分	135度 21分	1996,8,19 1996,11,18	1,320	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
地蔵堂遺跡	集落	中世	溝 土坑	瓦器 瓦質土器	
土生遺跡	集落	中世	流路	瓦器	
加治・神前・畠中遺跡	集落	平安時代 近世	土坑	瓦	
窪田ハマデ遺跡	集落	中世	溝 瓦	瓦器、土師器	

図　　版

1．第４遺構面完掘状況　　南より

2．第４遺構面完掘状況　　北東より

図版1　地蔵堂遺跡

1、ＳＸ－３０２　　南東より

2、同　　上　　北より

1、ＳＤ－２１２　　東より

2、ＳＤ－２１２遺物出土状況　　北より

図版3　地蔵堂遺跡

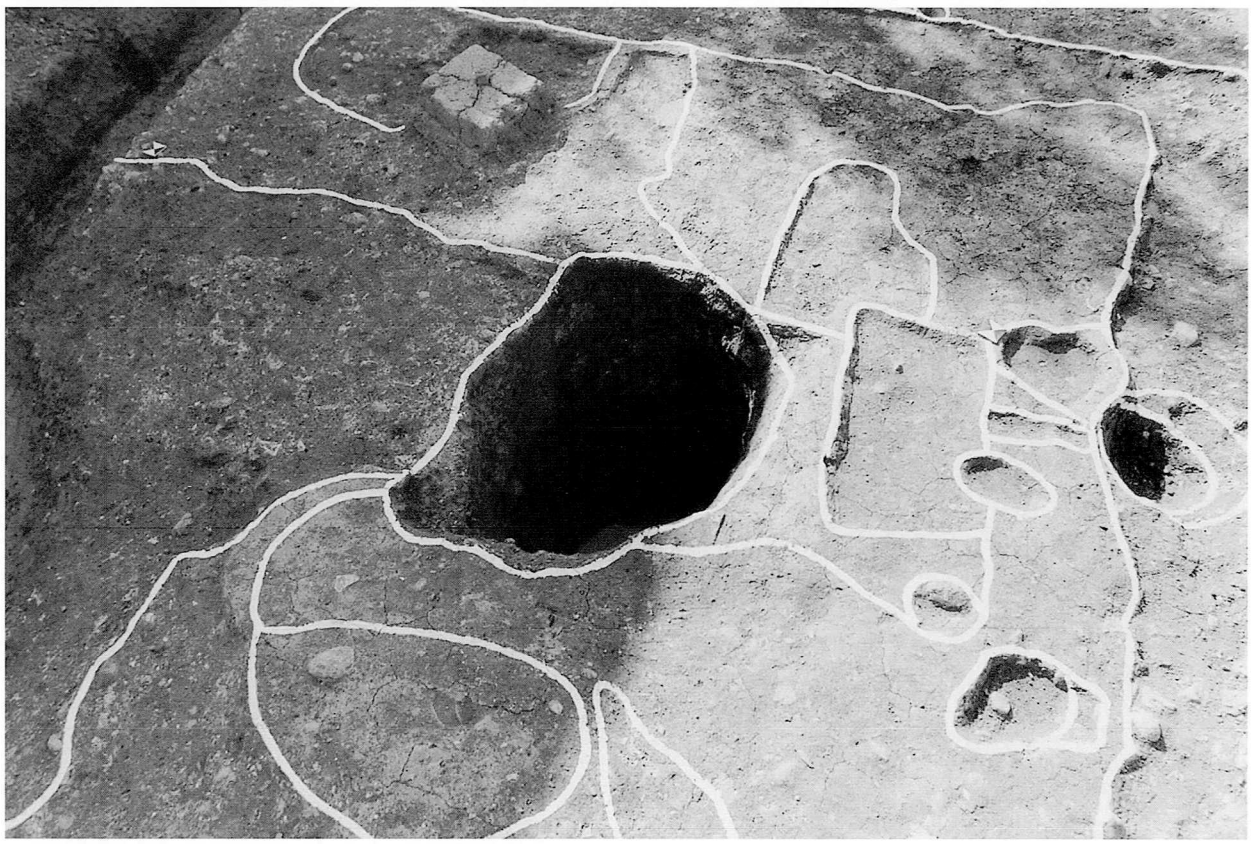
1、第3遺構面東部　　北より

2、同　　上　　南東より

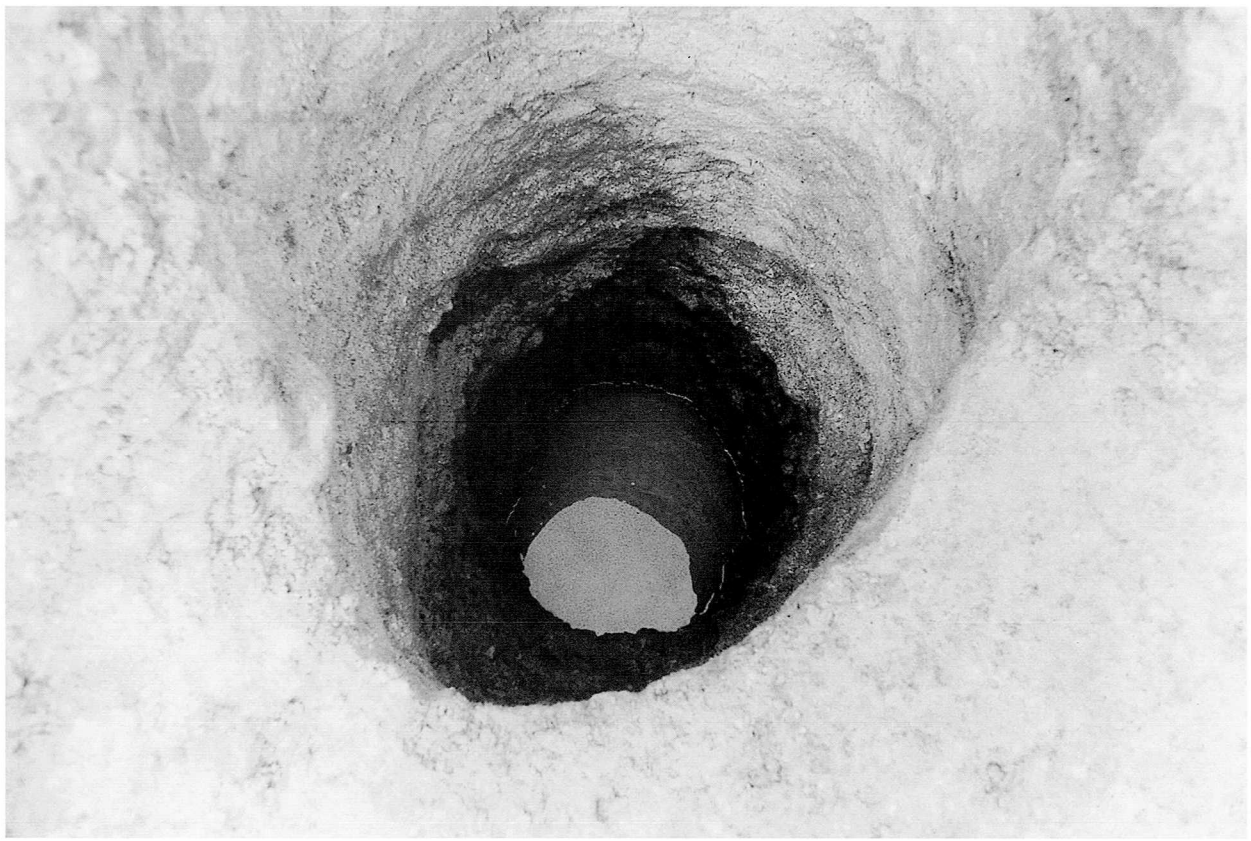
1、ＳＫ－３０１　　北東より

2、ＳＫ－３０１遺物出土状況　　北東より

図版5　地蔵堂遺跡

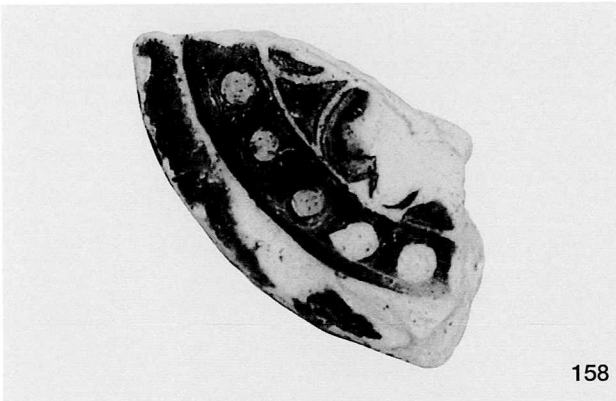


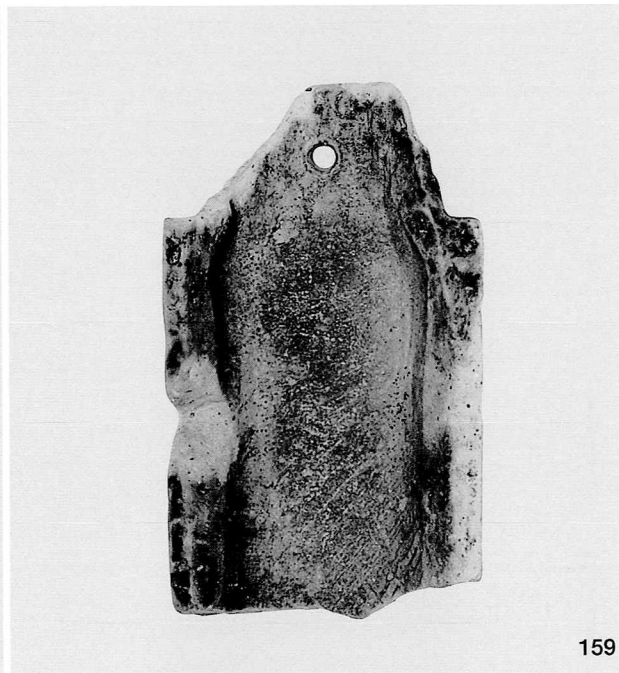
1、SE－301　　南東より



2、同　　上　　南東より

SX-302（156）、SD-212（93、94、99、100、116）、SD-221（147）、Pit-204（157）出土遺物

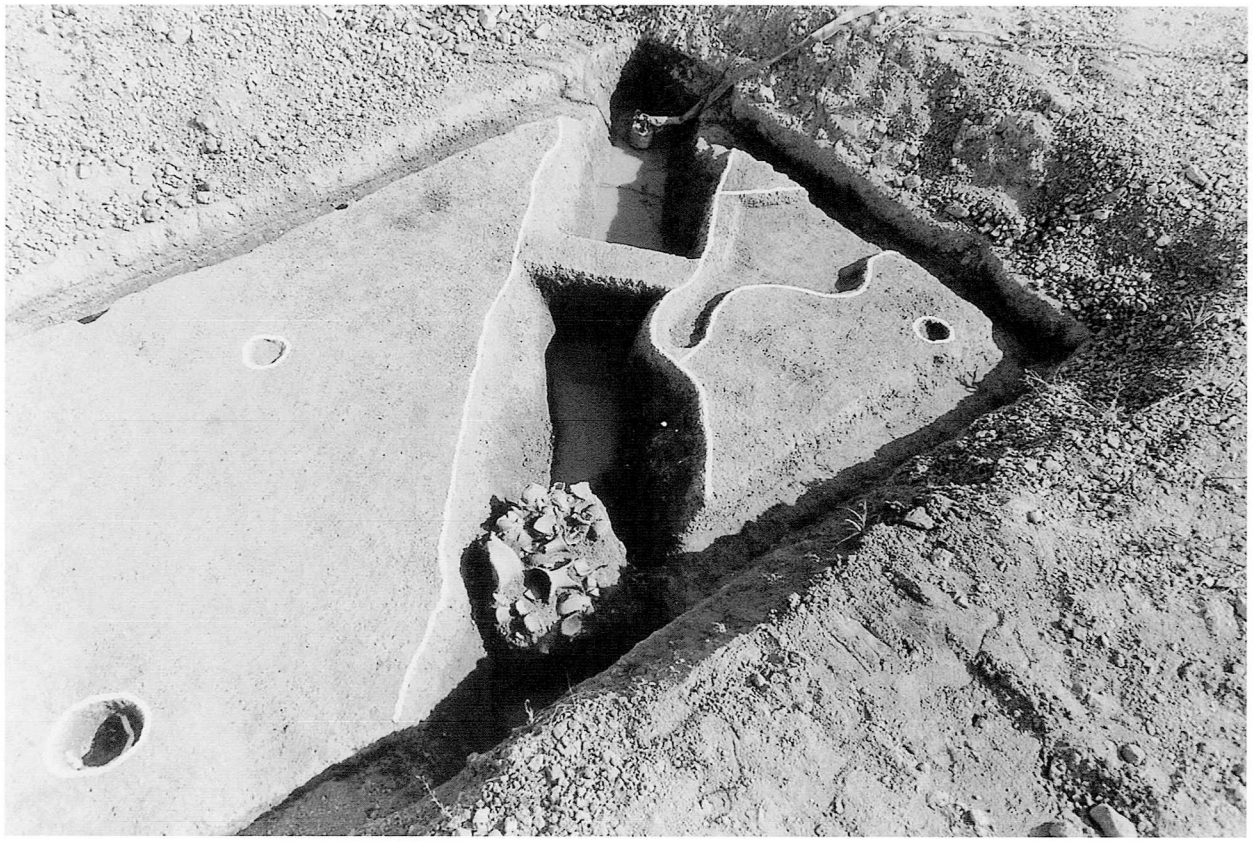




SX-308（158）、SX-306（160）、SX-203（139）、SD-212（159）出土瓦

1、第1区　SD－204　　南より

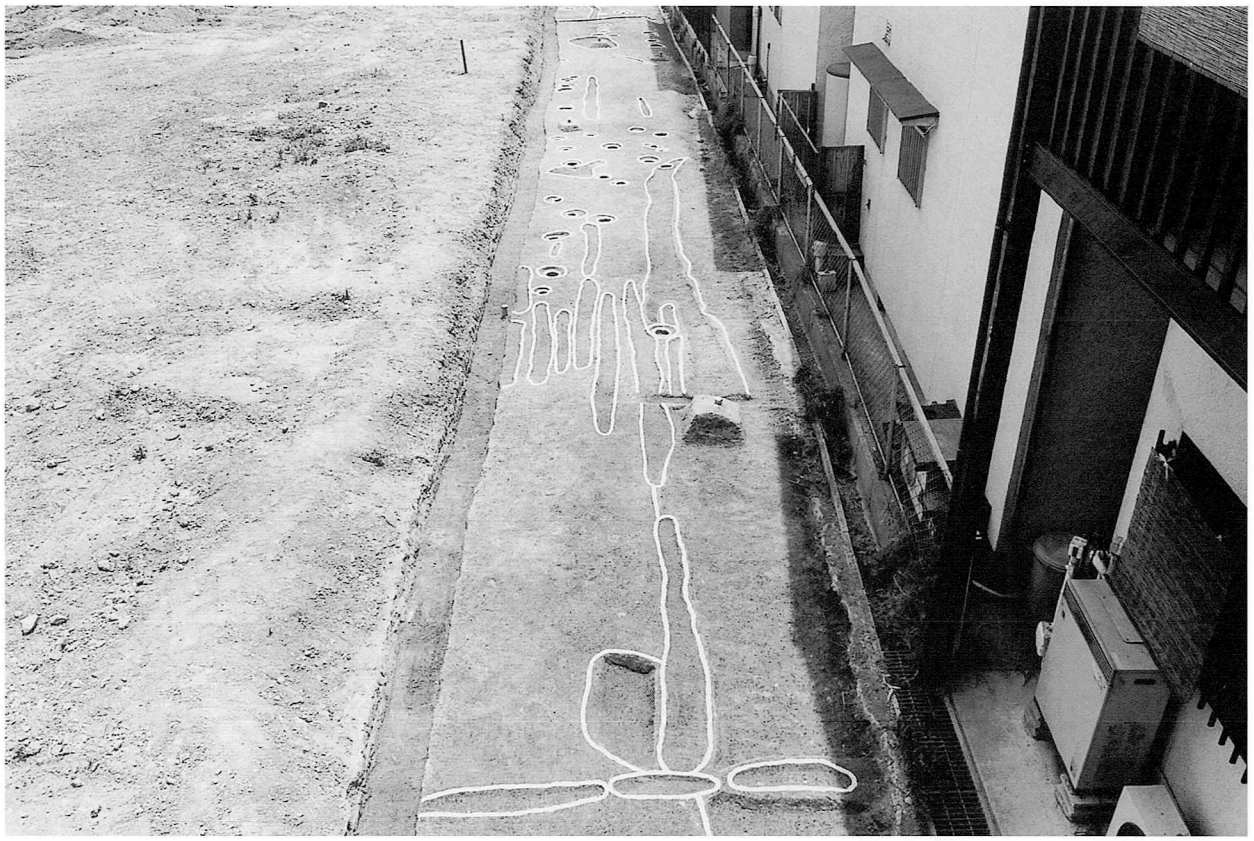
2、同　上　　北西より



1、ＳＤ－２０７　　北より

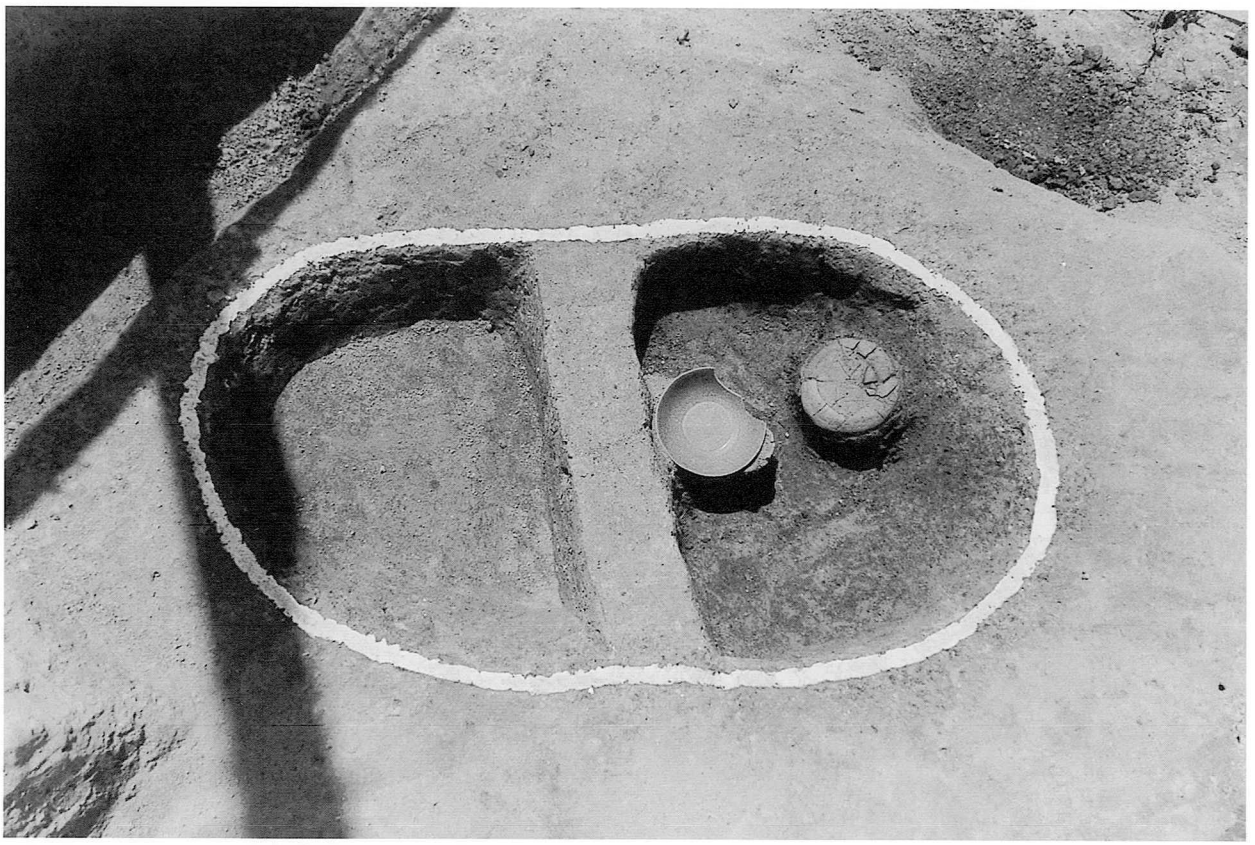
2、ＳＤ－２０７土器集積部　　西より

図版10　土生遺跡



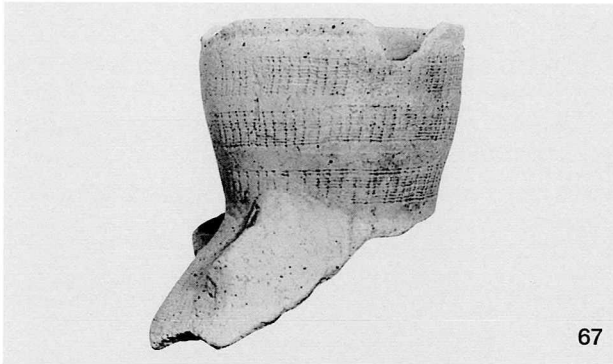
1、第2区全景　　北西より

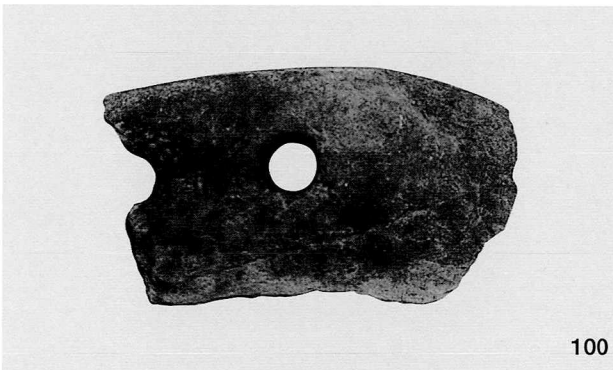
2、同　　上　　南東より

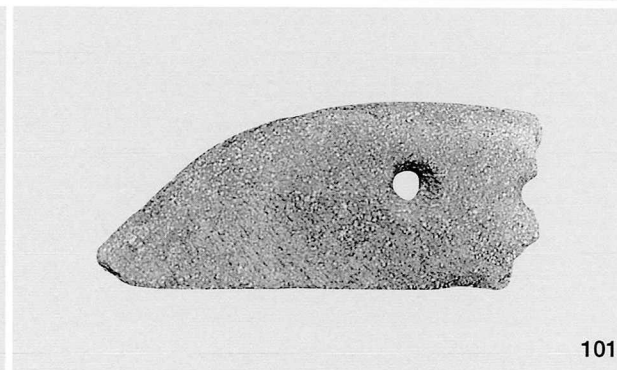


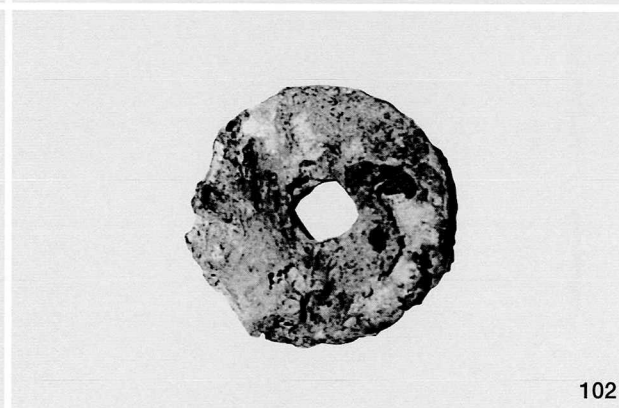
1、ＳＫ－２０１　　北より

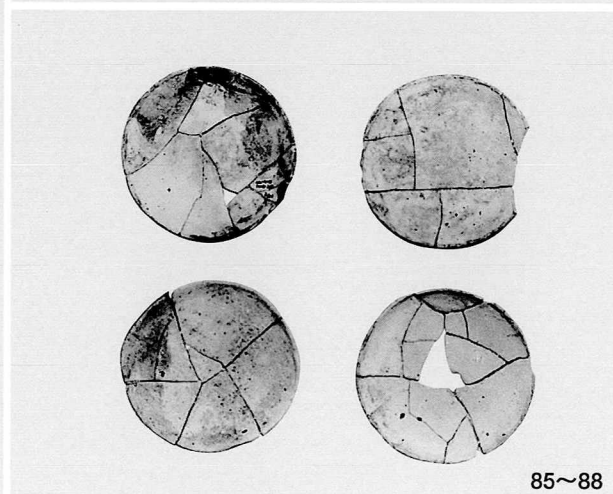
2、ＳＫ－２０１土器出土状況　　北より



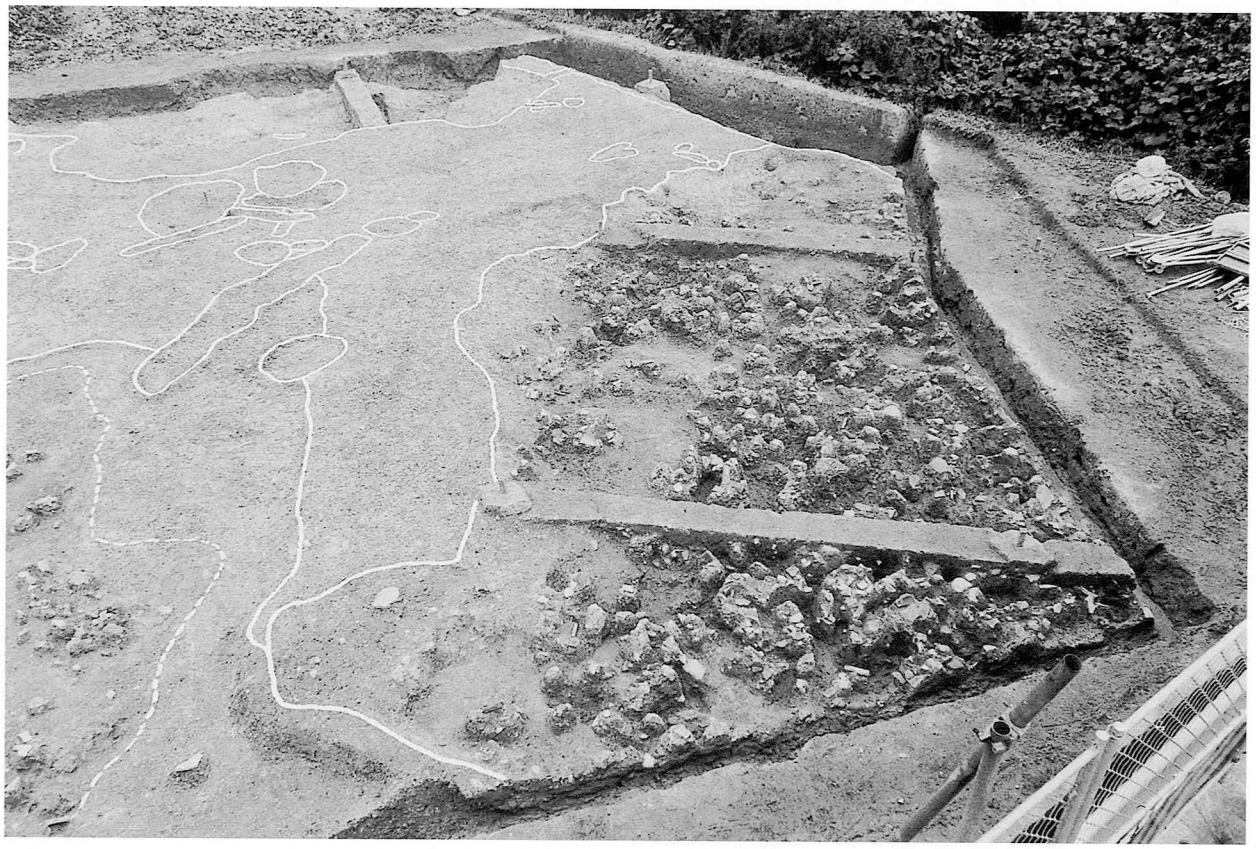




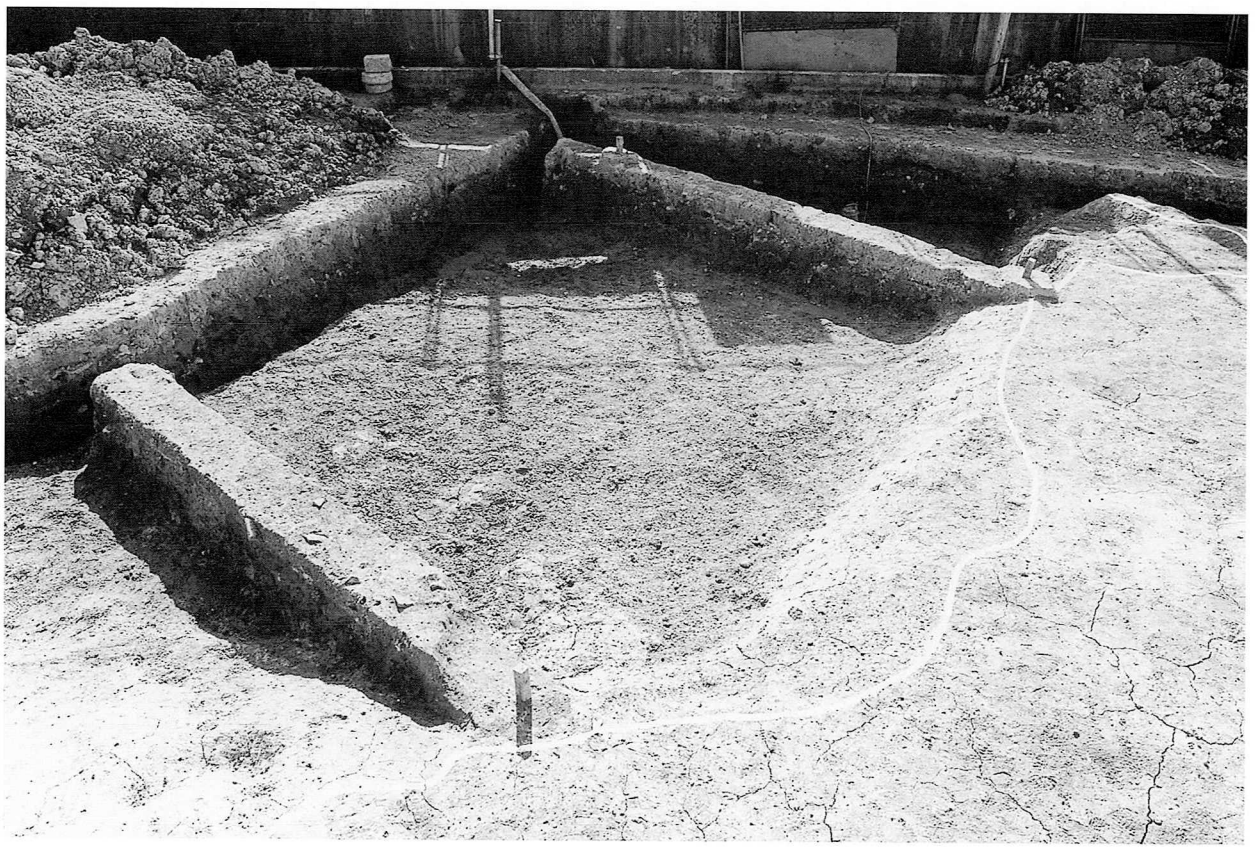




SD-204（67、100、101）、SD-207（79）、SK-201（85～88、90、102）出土遺物



1、ＳＤ－３　　西より



2、ＳＤ－３　　北東より

1、ＳＤ－４、５　　北より

2、同　　上　　北より

1、軒丸瓦検出状況

2、軒平瓦検出状況

1、第1区　SD－309　　北西から

2、第2区　SD－310　　北から

1、第2区　SD－312　　北から

2、第3区　SD－301、306　　西から

1、第3区　鋤溝群　　北から

2、第2区　SK－101～103　　南東から

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第56集

貝塚市内遺跡発掘調査概要

発　行　日　2001. 1. 31

編集・発行　貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号

印　　刷　㈱和歌山印刷所(和歌山市狐島609－9)